
【企画】とある創作の学園都市

こなつ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

【企画】とある創作の学園都市

【Nコード】

N4417X

【作者名】

こなつ

【あらすじ】

とある魔術の禁書目録の世界観で二次創作、つまりオリキャラだけで一から学園都市造っちゃおうぜ！という企画です。

オリジナル能力者同士を戦闘させて厨二病の血を騒がせたり、キヤラ座談会するだけの簡単かつ適当な企画ですので、オリ主二次創作小説が好きな方、禁書の世界観ちゅっちゅな方、禁書かじってて戦闘狂の方、文は書けないけど絵ならイケル！みたいな方、ぜひどうぞー！ レベル5は募集終了しました

また、ある程度の縛りは存在するので、それを遵守できる方でお

願います。

募集期間は2011年10月9日から、管理人が飽きない限り延々と。

詳細説明【必読】

参加なさる方は必読！

ええと、まずこんな珍妙な企画なんぞに手を出していただいてありがとうございます。大ざっぱな説明はあらずじでしたとおりなのですが、こちらでは細かい説明をば。

とある創作の学園都市とは？

こなつが立ち上げた行き当たりばったりの企画です。オリキャラオンリー企画。主に戦闘シーンを書いたり書いたり、座談会も面白いんじゃないかなーなんて思います。あつ、『一から学園都市』というのはつまり、既存の能力者は一切居ないよ！ということになります。文は書けないけどキャラ提供だけなら、という人や、絵なら描けるよ！という人でも大歓迎。ぜひ。

参加資格

一切不問です。年齢も関係ございません。

ただ、マナーを守ればそれでいっこうに構いません。

参加方法

こなつ 「ID：113338」 こちらのIDにメッセージを送ってください。

件名に『企画参加』とか書いていただけるとありがたいです。

下記のテンプレをコピーして貼り付け、必要事項を記入してください。

氏名：

ID：

確認した後、こちらの方から小説の投稿方法などを送らせていただきます。

もしわからないことがあればご一報を。

えー、それではいよいよオリキャラ登録方法を。

募集人数

一人5人まで登録可能です。もちろんそれ以下でも構いませんが、どれだけ多くても5人です。

能力の強さ

募集する能力者は、レベル5は6人（あと1人は管理人が登録するので）、それ以下は何人でも可です。

もちろんレベル0でも構いませんが、戦闘企画だということを覚えておいてください。↑今更ですけど座談会（ry
レベル5の枠は埋まりました！

禁止事項

最強設定は原則無しとします。天下のレベル5でも、必ず弱点等を用意してください。

能力の内容については完全オリジナルでも、禁書本作から拝借しても構いません。ただし後者の場合、レベル5の能力を引用するのは禁止とします。

登録用テンプレ

参加表明のメッセージにコピーし、やはり必要事項を記入してくだ

さい。

【オリキャラ登録】

名前：

性別：

年齢：

レベル：

能力名：

能力内容：

容姿：

性格：

複数の場合はその人数分お願いします。また、能力内容に弱点なんかを書いていただけると嬉しいです。

座談会・雑談について↑NEW！

だいふく様より、チャットルームをお借りしております。ぜひぜひご活用くださいませ。ただし、参加している方優先的にお願いします。

URL：<http://9413.teacup.com/kamachi/chat>

座談会に関しては、日時等は管理人の方で指定する形が多いかと思っています。指定は活動報告等ですのでチェックお願いします。

タイマンで語りたい！なんて人が居りましたら、それは各自こそこそ…というか、各自で連絡しあってくださいな！

長々と並べましたが、大丈夫でしたでしょうか？

如何せん企画を立ち上げるのは初めてのことなので、戸惑っていましたが、お付き合いくださると嬉しいですよ。

10月14日、ちょっと改定です。 / 11月22日、事項を増やしました。

登録キャラクター名簿【科学サイド】

登録された能力者の名簿です。

あゝわの順で並んでいます。また、魔術サイドとの被りもあります。

【asuta様より・ID157665】

名前：阿頼耶家康
あちやいえやす

性別：男

年齢：18歳

レベル：5

能力名：圧殺空間
ブレッシャースペース

能力内容：半径100m以内の圧力を操作する力。空気圧を操り物体を潰す、殴った時にかかる力を操り強化する、地面を蹴り上げる圧力を強め高速移動、圧電気によるレベル3クラスの電撃、圧力を使った電気抵抗を作り出す防御、圧力操作による真空の作成、内臓破裂がおきる程の空気弾攻撃などが可能。

また、能力がなくとも、彼には、信号機を叩き折って投げ飛ばす腕力、新幹線に追いつくスピード、トラックに跳ねられても無傷で生還する耐久力がある。

また、圧力操作で対処出来ない精神操作系の能力者、空間移動系能力者の体内への物質転移（内臓にナイフを突き刺されても平気だったりするが）等が能力自体の穴となる。といっても、後述の特異体質でカバー出来ている。

容姿：切れ長の目に、目の下に施したコウモリのタトゥー、後ろ髪の長い毛先をショッキングピンクに染めた茶髪が特徴な、the Gazetteの流鬼似の目立つ外見の美形。さらに、スカイブル

ーのタンクトップに、鯉が描かれたジーンズ、鎖で繋がれた銀色のヒトデ型の首飾りと、ファッションもとにかく目立つ。さらに、身長が199cmとデカい。体系は細身な方。

性格：能力者を（自分も含め）ある理由で嫌悪し、反対に無能力者には困難が降りかかれば体を張り、命をかける。傲慢で、馬鹿で、直情的で、キレやすいが、底抜けに優しく仲間思いで、後輩や後述のスキルアウトの新人にとっては面倒見のいい兄貴。また、アニメ好きで、ボカロ好きという、なかなかオタクな人。眼鏡っ娘好き。一人称は俺。二人称は

能力者と無能力者を狙うようなスキルアウトしか食い物にしない、最低最悪最強と評されるスキルアウト『チーム』のリーダー。掲げる目標は、『学園都市を無能力者にとって安全で、能力者にとって危険な街にすること』。スキルアウトなのでアンチスキルに何度もお世話になつては、牢屋を壊し脱獄している。

また、彼は嗅覚が異常に鋭く、AIMの匂いも嗅ぎ分けることが出来る。これで能力者の種類や、レベルが分かり、この特異体質で能力者がそうでないかを分けている。また、これはかなり正確で、能力者が演算をし、能力を発動するタイミングまで分かる。これを使い、自分の弱点となる種類の能力を持つ能力者が能力を発動する演算のタイミングに、攻撃をいれ妨害する戦法をとる。

【黒羊様より・ID181842】

名前：亞羅々戲^{あろろぎ}

性別：男

年齢：不明

レベル：ぎりっぎりレベル4

能力名：座標逆転 ボジションチェンジ

能力内容：モノの位置を入れ替える能力。勿論自分も対象に出来る。結標の能力と似ていて、対象に触る必要はないがいくつか条件がある。

？入れ替える対象をどちらも視界に入れていなければならない（但し自分が対象の場合は自分は除く）。

？対象は生物無生物問わないが、大きさは一番小さくて人間の子供（約1m弱）〜大きくてワゴン車ぐらい。重さは問わない。

距離も重さも問わない割に、入れ替えるのは自分が見える場所限定、それもサイズに制限有りとなかなか面倒な条件がある。

能力の特性通り、自分の力では十一次元上の理論値を計算出来ない事から当初はレベル3に認定されかけていたが、重さと距離（見えているという条件付き）に制限がない事、また入れ替えるのは自分でもなくてもいい事を考慮して、ぎりぎりレベル4の認定を受けた。

容姿：真っ黒で長い髪。こけた頬。常に真っ黒なコートを羽織っている。

性格：暗部の人間。能力を使った自殺に見せかける殺人を得意とする。

自身に迫る『死』のスリルに快感を感じる狂人。

使い方は、まず自分がビルから落下。地面に落ちる前に標的と位置を入れ替え、標的はわけもわからず落下、死亡。というのが基本。わざわざ自分が落下する意味はないが、そこが壊れてる。

正面から敵と戦う場合は、相手が自分に攻撃——相手と位置を入れ替える、自爆。が基本。多人数相手でも有効。

仮に接近戦であつても、相手と位置を入れ替えれば背中合わせの状態で入れ替わる為、能力を知らない相手は突然自分が消えたように錯覚させ、自分は悠々と振り返って無防備な背中にナイフをグサリ。

【ユーシン様より・ID172033】

名前：茨野^{いはの} アゲハ

性別：女

年齢：18歳

レベル：4

能力名：超^{テンベスト}進化論^{バイオ}

能力内容：遺伝子操作系能力者で、遺伝子を歪め、新種の植物『茨野新個体』を造る。動物にも通用するがかなり危険な作業なので自分にしか行っていない。『茨野新個体』の何種かは神経があり茨野の背中に造ったアクセス部分に接続し手足のように振るうことができる。

容姿：木の幹のような色で、腰まで伸びるロングの糸のように細い髪と、手足に鎖付けて引きずっているような歩き方が特徴的。眠ってしまいそうにみえる目つきで、唇は色も厚みも薄い。背中を中心部分は円盤を埋め込んだように変形しておりここで脊髄に『茨野新個体』をつなげている。服装は黒が多い。

性格：基本的には自分が住んでいる植物園で植物の世話をしており、人には興味なさげに見えるが、常連や知人には声を掛けるなど他者を遠ざけている訳ではなく、騒音や雑音を発するモノを嫌っている。口調は上司のような命令口調で一人称は私。

【アポリオン様より・ID121225】

名前：岩見祥吾いわみしょうご

性別：男

年齢：27歳

容姿：いつもシンプルな形の般若の仮面（口の部分が開いているので、つけたまま飲食も可能）を着用しているが、外すと火傷の跡（家が放火された際に左眼辺りを火傷）があるものの意外に整った顔立ちである。その醜い傷を隠すため、仮面をとろうとしない。取ろうとすると例え誰であろうと、極めて冷酷で殺意に満ちた目で威圧する。身長は174cmぐらい。後の特徴といえば、黒のビジネススーツ、白い汎用手袋と黒色の革靴ぐらいか。

職業：必殺仕事人

性格：人と接するとき、愛するか殺すか無関心かという極端な感情しか持てない。基本的に好戦的で、感情の赴くままに多くの人間を理由なく殺害し、数多くの人物から「人間じゃない」とまで称されている。その生い立ちから銃を持つ警官複数を生身で倒すなど、戦闘能力も極めて高い。その暴虐さゆえ「射殺止むなし」とまで言われている。

家族が殺害されて以降は、「泥を食ったことがある」と語るなど浮浪者のような生活をしてきたらしく、その名残からかトカゲを焼いたり、生卵数個をコップに割って一気飲みしたり、ムール貝を殻ごと食べた（噛み砕いたが飲み込み切れなかった貝殻の破片は流石に吐き出す）と、人間の域を超えた悪食ぶりを見せる。しかし、最近近は学園都市に住居を持つているせいか、自宅周辺のコンビニを強盗し、食料や生活用品などを大胆に盗ってきている。時々、スキルアウト達から殺して奪った札や硬貨を強盗した店に代金として置いてきている。

また途中で辞めているとは言え、高校や仕事をしていた事もある他、

自動車を運転する際はちゃんとシートベルトをし、焼きそばを食べる際はお湯を捨てるなど意外と律儀なところもある。そして意外にも女性や子供には優しい。でも、あまりに身勝手・理不尽・ふざけた人だとイライラして殺そうとする。

案外好きな人には尽くす性格で、タイプの女性と一緒にいるときはイライラもなくなってくる。その人が危険に陥るなら自分の命を顧みずに助けにいったりもする。基本美人であれば仲良くなるうとするが、性格がわがまま・高飛車・イラツとするような言動などあれば脅して態度を改めさせようとし、相手に対するイライラが一線を越えれば殺そうする。インデックスあたりが危ないかもしれない。特に無理難題でもない限り女性の頼み事は基本的に聞く。理由は「好かれないから」であり、これは幼い頃に家族が殺されてしまい、愛されることがなくなってしまったからだと考えられる。

上記の通り男性に関しては基本「殺す」対象ではあるが、心を開いた者は例外であり、食事に誘うほどにまで仲良くなることが可能である。ちなみにサディスト。酒には強く、酔った奴を肴にするレベルではあるのだが、自分からは飲む事はなく誘われた時のみである。お酒はあまり自分からガバガバ飲むタイプではなく、誘われたら飲む、というより誘われたら大抵の事は快く乗ってくれる。特に美少女のお願いなら尚更。ノリはいいほうである。でも、性格が酷い場合はキツパリと断る。超能力への関心は殺すが面倒になる程度。魔術に関しての知識は全くの皆無である。

20年前に無差別放火魔によって住んでいた家と家族を失い、復讐の為に自分もまた無差別殺人鬼になるという過去を持つ。現在はもちろん全国指名手配犯である。ちなみにすでに仇である放火魔は自身の手で殺害済みの様子。何度か政府要人暗殺請負人「死神」として殺人をよくやっており、その他には密偵のお仕事も数回行い、その際の成果は上々のもの。そのどちらも気まぐれでやっていたようで、報酬は現金、しかも持ち運べる量と依頼人に釘を打っていた。現在は第10学区のボロいアパートの住民を皆殺しにし、その一室

に住んでいる模様。コンビ二強盗やスキルアウトの虐殺をしている。目的のために他人を幾度となく騙して利用するなど、頭も非常に回り戦闘時にもその傾向がみられる。

身体能力：膂力に関しては、並みの能力者を圧倒するレベルである。戦闘力を能力者レベルで表すと、軽く見積もってもレベル4上の上クラスに相当し、最悪レベル5上の中クラスであると噂されている。刀を主に使うが我流で、「斬る」や「突く」というよりは、「叩きつける」といった豪快な力押しでの戦闘を好む。そしてこれが通用しない場合は、抜刀術や突き技にすぐさまシフトする。瞬発力や短距離の移動速度については武術を極めた人間でも見切るのは難しい。長期戦も苦手ではないが、面倒なので避ける傾向がある。常に戦いの中に身を置いていたため、眼光が鋭く、大抵の者はこれを見るときはしばらく動けなくなる。ちなみにこの眼力、リラックスしている時は緩む。身体能力に関しては、一般的な常人のそれとは比較にならないほどに高い。西洋刀なしでの戦闘を行うことも可能で、どこで学んだのかは不明だが、主に拳法を使う。（殺しを目的とする戦闘を行う場合、決まって「イライラするんだア・・・！」という言いながら、首を回すという癖を持つ。）

一人称及び二人称は俺、お前又は相手の名前
何だかんだ言って、可愛い女の子には甘い。

好みのタイプは性格は従順で髪型はボブカットに近いもの。それ以外は特にこだわっていない。（胸に関しては特に選別基準ではないが、どちらかというと大きい方がいいらしい。）五和のような子が好きの様子。次にオルソラや佐天らしい（佐天はボブではないが、性格が気に入る模様）。年齢で考えると中高生が好きで、熟女や人妻は嫌い。

通称死神。名前の由来は上記のような外見に加え、容赦のない連続無差別殺人が原因だと思われる。活動範囲は学園都市全域。そして神出鬼没。が、戦いが起こっている場所には血の匂いを嗅ぎつけて

高確率で現れるようである。

【ティンク様より・ID176467】

名前：A01（エースぜろいち） 機械化前 相澤一 あいざわはじめ

性別：男（機械化前）

年齢：9 + 4（機械化後）

レベル：0

設定：通り魔に刺されて、死にかけたところをとある浮浪者に助け
てもらい、サイボーグになる。普段は人工皮膚でメタリックボディ
を隠している。機械の体であるため、海に入る事ができない。（プ
ールとかは平気）

体内のチップさえ無事であれば首を斬られても平気。また、すぐ
にくっつく。やむを得ずビルを破壊してしまった事があるが、警察に
は特になにも言われなかった。サイボーグになっても五感を感じる
ようだ。

エネルギー源は人間が食べるご飯でオーケー。1日一回油を飲む必
要がある。

浮浪者に助けられてから誰かを守る人になろうと決めた。が、一
人を守るために多くの悪人を病院送りにしてきた。好物はカレー。
きらいなものはゴーヤ。

バックドロップで学校の校長を泣かせてしまったことがある。機械
のクセに機械オンチ。ウィンナーとソーセージの違いがよくわから
ない。機械なので電車や飛行機に乗ることができない。

電気店に行くと必ずといっていいほど防犯装置を誤作動させてしま
う。彼がつくるラーメンは絶品であり、友達である植木に「お前は
主婦か！ー」とよく言われる。キリンのモノマネがめっちゃウマイ
らしいが、誰も見たことがない。6歳の時まで10の次を100だ

と思っていた。

一年ごとに部品改造してもらっているため、背はふつ々に伸びている（ように見える）

一人称俺 二人称お前 テメエ 植木のみ植木っち

戦いの途中で名前聞かれると、「知りたきゃ俺に勝ってみな！」「とかならず言う。人ならざる者同士植木とは気が合う。

戦闘スタイル：基本殴る、蹴る。機械化前に空手を習っていたように、なかなか強い。機械なのでパンチやキックがかなり痛い。あまり使わないが、腕がガトリングがわりになる。（3000発）弱点は電撃使い（エレクトロマスター）に極端に弱い事。

容姿：メタリックボディ、人工皮膚を装備。黒の髪に学校の制服。顔は子供っぽい。背は低い。

【だいふく様より・ID191002】

名前：御伽有栖おていざ ありす

性別：男

年齢：17の高2

レベル：5

能力名：幻想空間ワンダーランド

能力内容：自身の知りうるあらゆる物理法則や物理現象を無効にするだけではなく、ある程度の変更すら可能とする。

最大は御伽を中心に半径10メートルまで。

一方通行のような無意識下での能力使用をしており、その時は体表から30センチのところまで使用している。

弱点は知っている物理法則ではない攻撃。ちなみに御伽は既存の物

理法則は全て把握している。
提督人には基本勝てない。
物理法則を掌握すれば勝てるけど。

容姿：なんか雰囲気は一方通行に似てます。金髪碧眼の切れ長で、
髪形は一方通行っぽいけど少し長い。
172cmの痩せてるイケメンさん。

性格：色々あつさりしてる、諦めが早い、やや謙虚、などなど。
戦闘になると積極的な性格に変わる。

口癖は「夢がない」一人称は俺。
本名を知っている人物はアレイスターのみ。他は謎の死を遂げたっ
つか彼が殺した。

学園都市では能力名の『ワンダーランド幻想空間』と呼ばれている。

【だいふく様より・ID191002】

名前：朧江相馬おぼろえそうま

性別：男

年齢：17歳で高二

レベル：0

能力名：能力記憶スキルメモリー

能力内容：無能力は勿論、超能力まであらゆる能力の影響を受ける
と、その能力の「自分だけの現実」を記憶して、時間制限付きで一
度だけ使用する事が出来る。

能力が強いほど時間は短くなる。

この能力の解説をすると、朧江は自身の「自分だけの現実」を自分
の意思で使用する事が出来ず、他の能力の影響を受けた時にその「

自分だけの現実」を上書きすることでその能力を使用する事が出来る。

そのため身体検査では無能力者判定とされている。

ストックは多数あり、知り合いに発火能力者がいるため頻繁に使うものは強能力の発火能力。

能力の影響を受けると言うことは能力による攻撃を受けなければならないということなので、能力を記憶するときは必ず一撃喰らわなければならない。

容姿：身長は171cmほど。

中肉中背で髪は前髪は眼が軽く隠れる程度、サイドも耳に少しかかる程度で後ろ髪は少し長めの黒髪でところどころ寝癖がある。美形と言う程ではないが顔は整っている。

性格：クールと言う程ではないが落ち着いている。

正義感が強く、人を助けることもしばしば。

一人称は俺で、口調は上条が落ち着いた時みたいな喋り方。（僕の書いた小説を見ていただければ分かりやすいと思います）

恋愛に関しては全く興味がない。

【オウニンポヤ様より・ID174538】

名前：風祭 涼 かざまつり りょう

性別：女

年齢：14歳

レベル：5

能力名：大気支配 エアリアル

能力内容：元々はレベル1の空力使い（エアロハンド）であったが、

事故で視力を失ったことでそれを補うために大気感知能力が急激に拡大し、レベル5の大気支配へと進化した。エアリアル

戦闘にあつては突風やカマイタチといった空力使い（エアロハンド）一般の能力のほか、

1・気圧を操作することで相手を押し潰したり、低酸素症（高山病）に陥れる。

2・大気中に含まれる水蒸気を摩擦させ発電、落雷を起こす。

3・身に纏った水蒸気で光を屈折させ透明化する（本人が可視光を捉える必要がないため完全透明にもなれる）。

4・気温を操作し燃焼・冷却（凍結）させる。

5・窒素を操作しての窒素装甲を身に纏う。オフエンスアーマー 盾として板状に展開することも可。

6・大気の動きから周囲の状況を把握できる。本人は視力が無いものの、この力で目視以上に周囲が視えている（大気の動きを演算し、画像として処理している）。側面・後方も感知しているため、基本的に死角はない。

7・風を操作し飛行が可能。

など、大気そのものを武器とする。

本人は6の能力を使い周囲を完全に把握しているものの、どうしても視覚より反応が一步遅れてしまうため、接近格闘戦を苦手とする（そのための窒素装甲である）。オフエンスアーマー

そのため、相手との距離を取り、（繊細な戦い方が出来ないわけではないがこちらの方が簡単なので）ごり押しの戦い方を専らとする。

容姿：150cm、40kg。

明るい茶色の髪で脛まで届く長いポニーテール。目も同じ色だが、盲目のため光がなく無機質な印象を与える（御坂妹に類似）。

常盤台中学に在学のため服装は常に制服を着用。

能力で周囲を把握できるため無くとも全く支障はないが、白杖を常

に持っている。

性格：口数は少ない方で通常はおとなしい。しかし「盲目」という禁忌に触れた場合は豹変し、相手を殺すことも躊躇しなくなる。豹変モードでは全く喋らなくなり、周囲の空気が瘴気化するようなオーラを放つ。素直に謝れば「一応は」許すが決して忘れず、機会があれば報復する。一人称は「ウチ」。

【ITEM様より・ID184601】

名前：神鬼大和 かみきやまと

性別：男

年齢：13

レベル：5

能力名：事象選択 オールセレクト

能力内容：発生した事象に対して選択肢を持つ事が出来る。簡単に言えばあった事をなかった事にしたり別の結果に変更出来る。

選択出来る事象は発生した事象のみで未来の事象に対して選択肢は持てない。また自分を除く人体への能力の直接の使用も出来ない。

容姿：髪型は鏡音レンと同じで鮮やかな茶髪。いつもホストの様な服装をしている。身長は美琴より少し高いくらい。非常に端正な顔の持ち主でかなりのイケメン。

性格：口調と共に超攻撃的。基本的に慣れないは好まないが積極的に避ける訳ではない。残忍かつ冷酷。だが決して外道な訳ではなく無駄な争いはしない、する気がない。一人称は「オレ」

能力者でありなが聖人の頂点に君臨する『完全聖人』でもある。

完全聖人は聖人と違い神と全く同じ特徴を持ち、それゆえテレズマを完全に操り身体能力も通常の聖人の倍に匹敵する。戦闘時には能力よりも圧倒的な身体能力を駆使する。最強にも見える戦闘力だが身体自体は普通の子供なので人体への負担が大きい完全聖人の力やテレズマで長時間の戦闘は出来ない。

【助けてください様より・ID125573】

名前：神夜恭介 かみやきようすけ

性別：男

年齢：15歳

レベル：Level 10

能力名：暗黒火焰 ダークフレイム

能力内容：黒い炎を使う能力者。設定上では、上条さんの幻想殺しでも消せなく、一方さんの反射も通じないという設定です。欠点は、他者より譲り受けた能力のため、たびたび暴走し、上手く使いこなせない時がある。

容姿：身長168cm、体重52kg。上条と同じ制服を着ているごく一般の高校生。細身で、ぱっちりとした目が特徴。

性格：良く笑う明るい性格。争うことを余り好まない性格で、能力に身を委ねるのは本当に危ない時だけ。口喧嘩に非常に弱く、いつも謝ってばかり、

【黒羊様より・ID181842】

名前：神矢 かみや 真夜 しんや

性別：男

年齢：16（高一）

レベル：0

能力名：絶対観測 ホライゾン

能力内容：ずばり言えば人間離れた洞察力を発揮する。相手の動きを予測したり、違和感を見つけたりする事などが得意。この能力は結局『見えるモノを見ているだけ』という判断を受けていて、超能力ではなくただの特技とされレベルは0の扱い。

確かに普段は『常人よりかなり目が良い』程度だが、本気をだせば匂いや音といったものも視覚化する事も可能で、他にも魔力の流れ、AIM拡散力場すら視る事も出来る。それらを見極め、力の弱い箇所（力のほつれ）を見極め攻撃することで、あらゆるものを破壊する。

もう一つ、その優れた洞察力で疑似的な未来を視る事も出来る（ただしこれもあくまで予測の範疇であり、予知ではない）。

はたしてこれほどの力がただの特技なのかは、一部の科学者の間で議論されている。

弱点は、力の強いものを視ようとするとその分脳に負担がかかる。頭痛が発生。

容姿：猫っ毛質の茶髪（地毛）。一見して体格は細いが、剣道をやっているので筋肉は割とついている。困ったような笑顔が特徴。

性格：平凡な家庭で育った平凡な高校一年生。基本真面目な性格で、正義感にあつい。その性格が災いして、争い事は嫌いだがよく厄介事に巻き込まれる。ただしどんな相手でも自分からは決して手を出さず、最初は対話から始める。

手を出す時は、あくまで相手が攻撃してきてからの正当防衛。
運動神経は良い。剣道の腕もなかなか。ただ疑似的な未来を視る眼があるので、公式でも練習でも負けなし。
所属しているわけではないが、スキルアウトとも交流あり。

【ティンク様より・ID176467】

名前：川中植木 かわなかうえき

性別：男

年齢：13

レベル：0

能力名？：『新天界人^{ネオ}』、『職能力（ジョブ能力）』

能力内容：『新天界人』自分でゴミと認識したものを木にかえる能力。（あくまでゴミがないと使えない）ゴミが木になり、その木がゴミと認識されてさらに木としての形をかえ、とりサイクルする。そのサイクルを他者の能力へと影響させる『回帰^{リバース}』は、あらゆるものを元に戻す（演算を元に戻す）ことが出来る。ただし万能ではなく、元に戻しきれないものもある。（だいたいは相殺される）あくまで能力で木を出している事が発動条件。

天界力のコントロール そのまんま。自らの中に眠る『天界力』をコントロールして、『燃え状態』になる。（身体強化）少しでも気を抜くと暴走してしまう事が難点。

神器 ゴミがないと使えない。『回帰^{リバース}』をつけることも可。

一ツ星神器 『鉄^{クロガネ}』 巨大な大砲を出現させて木の弾丸を打ち出す。

『自覚』の神器。

二ツ星神器 『威風堂堂^{フド}』 鉄甲のついた木の腕を目の前に出し、防御する。『忍耐』の神器。

三ツ星神器 『快刀乱麻』^{ランマ} 刀を召喚して切る。大きさは自由自在。

『不惑』の神器。

四ツ星神器 『唯我独尊』^{マッシュ} 顔のついた巨大な立方体で相手をかみ砕く。『渾身』の神器。

五ツ星神器 『百鬼夜行』^{ビック} ブロックで相手を突く神器。攻撃の他にも橋やエレベーターがわりにすることも。『集中』の神器。

六ツ星神器 『電光石火』^{ライカ} 高速移動できるローラーブレードのような神器。使用中はジャンプ不可。『先読み』の神器。

七ツ星神器 『旅人』^{ガリバー} 地面に碁盤状のマス目を出現させてそこから0.5秒で相手を箱の中に閉じ込める。中からは壊せないが外からは簡単にこわせる。相手に動き回られると捕縛できない。『持続』の神器。

八ツ星神器 『波花』^{なみはな} 巨大なムチ。『把握』の神器。

九ツ星神器 『花鳥風月』^{セイクリ} 黄緑の翼で空を飛ぶ。『バランス』の神器。

十ツ星神器 『魔王』^{まおう} 自分の思いの強さほど強くなる生物神器。植木の場合はなぜかブルーアイズホワイトドラゴン。6発しか使うことができない。

『職能力』

『モップ』に『?』^{ガチ}を加える能力。右手にある紋章からモップを出す。モップの先は自由に伸びて、対象を掴める。ただし、直線のみ。

容姿：黄緑色の髪の毛。手に黒のリストバンド。あとはふつうの中学生。

性格：一人称僕、二人称君、知り合いには。君、さん。基本優しい性格。だけど怒ると手がつけられない。好物はラーメン。

あくまで天界力を使う能力なのでLEVELは0（そもそも能力開発をうけていない）

【黒炉様より・ID140369】

名前：霧崎美鈴 きりさき みれい

年齢：16

レベル：4

能力名：獄炎魔獣 フレイムケルベロス

能力内容：炎の中から魔獣、ケルベロスを生成する能力。生成したケルベロスには石があるらしいが、真偽については美鈴のみぞ知る。炎さえあればどこでも生み出すことができるため、常にライターを持ち歩く。普通の発火能力者と違い、自身の力で発火させることができず、炎の操作もできない。能力の影響からか、炎による火傷や、熱さを感じることがない。

容姿：身長154cm、ピンクブロンドの髪を三つ編みにしている。目の色は澄んだ藍。赤い服が好み。

性格：おっとりしていてドジ。高レベルの割に成績も低い。静かな性格で、ほんわかしている。好きなものは犬、赤いもの、辛いもの、恋バナ

【OX様より・ID164163】

名前：鬼無里 栳 きむり もみじ

性別：男

年齢：17

レベル：3（0）

ブックオブライズ

能力名：虚言魔書

能力内容：「周囲10kmを「既存の物理法則」にあてはめた現象しか発生させない」

しかし、無数のトリックとギミックを駆使してイカサマでレベル3の能力をでっちあげた。

「周囲の人間を酩酊状態にする能力」と偽っている。

容姿：メロンハットにブレザー、トランプ柄のネクタイ。

長身の案山子のような青年。

堀の深い鉤鼻。

性格：金というより利益にがめついニヒル気取り。

内面は非常な夢想家。

境遇：学園都市でまっとうに研究していたが故に「超能力の優位を脅かす」として排除された学者の息子。

父親の「研究成果」により「AIM至上主義の打倒」を目指す。

【瀬河ナツ様より・ID136851】

さかさきかずは

名前：坂崎和華

性別：女

年齢：15歳

レベル：4

能力：痛み分け（ダメージセパレート）

能力内容：自身が受けたダメージを相手にも与える能力。相手の名前さえ知っていれば発動するが、与えた本人にしかダメージは返せ

ない上に、名前を知らないダメージは返せない為少し不便な能力。
ただし、和華本人が自分を傷つけた場合のみ、ダメージを与えたい
相手全員にダメージがいく。

容姿：黒髪で目が隠れてしまう程前髪は長く、後ろ髪も腰くらいま
であり、目の色は赤、身長は普通です。私服は暗い感じの服オンリ
ーで。

性格：基本的に暗くて引つ込み思案。例外として秋風（以下参照）
にだけは明るい（が引つ込み思案なのは変わらず）自分の友達が傷
つけられると、とても残忍な性格になる。

どーでもいい補足、何気に身体能力が高い。普段から藁人形をデフ
オルメにした人形『ウラミー』を持ち歩いている。

【フニヨ様より・ID145847】

名前：草壁修くさかべしゅう

性別：男

年齢：17

レベル：4

能力名：情報戦略オペレーション

能力内容：情報を操って物に情報を付与したり演算を邪魔したり出
来る

脳にかかる負荷が一般的な能力より高く1日に1時間しか使えない
使用方法 例：そこらへんに転がっている石に視覚情報を付与しそ
の石から大量に煙が出ているように見せることが出来る

（五感すべてに影響する情報を付与することは出来るが高難度演算
が必要になるのであまりやらない）

普段はサポート（情報収集&交渉）に徹している

レベルが大きくなるごとに操作できる情報の量が変わる

主人公はレベル4なので他人に情報を”付与”は出来ない（他人の体から煙が出ているように見せるなどは出来ない）

戦いでは近くにある石に自分の姿の情報を付与し（簡易的に説明するとホログラム）それを罠に銃で攻撃したり日本刀の長さを短いナイフに見せて間合いを勘違いさせたりして攻撃するのが主流

容姿：綺麗な黒髪ロングで目は黒色　顔は良く体は中世的でよく女に間違われることから

初対面の人にはしっかりと男と認識するように自分の体に情報を付与したりする

性格：思考がずれている、天然に近い

一人称は基本『俺』基本チャラ男口調だが真面目なときはチャラ男口調をやめ普通にしゃべる（イメージとしては土御門に近い）

好奇心に基づいた実験の協力を頼んだりすることはあるが相手が嫌がることはしない主義

例：電気系能力者と二人で協力すれば無料で地デジ見れるんじゃない？

といきなり考え始めそれを理由に協力を求めようとする

↓断られた場合は「あつ、嫌？ああ、なら良いんだよ別にー」とあつさり引き下がる

あまりされることはないがOKされたら実権後飯をおごるなど礼は忘れない

基本LVは気にせず広く浅く付き合うタイプ

【管理人より】

名前：細波 さざなみ むつき 六月

性別：女

年齢：16

レベル：1

能力名：ダメージカウンター
衝撃貯蓄

能力内容：受けたダメージを好きなときにエネルギーとして放出できる。ただしレベル1のため、ダメージを受ければ痛いし長時間エネルギーを溜め込むことができない。使い勝手の悪い能力ともいう。

容姿：ぼつさばさの赤い髪に、よれよれのセーラー服を着ている。

目の下の隈は濃く、正直妖怪にしか見えない。ストレスをそのまま具現したような人。身長164センチ。

性格：かなり自虐的な人。被害妄想が強い。ただ足が常人より速いことだけが自慢らしい。戦闘は大抵「いいよどうせあたしをいじめて楽しむんでしょいいよやればいいよ」みたいなノリで受けてくれる。喋るときは一気に喋る。どんなに長くても息継ぎ無し。一人称は『あたし』。

【柊 千終様より・ID】

名前：四之森誠凜 しのもりせいりん

性別：男

年齢：16歳

レベル：4

能力名：ハザードリセット
衝撃封鎖

能力内容：あらゆる攻撃のダメージを物理的な衝撃と認識して反射する能力。要約すればダメージを跳ね返す。特徴として受けたダメージの大小及び対象物との距離に関係なく威力を操作してぶつける事が可能。

例）自らのパンチの威力を自分に反射して、威力を操作し砲弾並みの破壊力を0距離でぶつける。

足で地面を叩きつけた威力を操作して、相手の足元を爆砕させる等。

容姿：茶色がかった耳元まである黒髪にブラウンの目。体格は細身だが、貧弱ではない。身長は171センチで平均並み。常に灰色のロングTシャツの上にパーカー、ダメージジーンズを身につけている。

性格：元々は学園都市の『闇』の研究機関で実験体となっていた。

よって現在は暗部ではないが闇を知っている。過去が過去だけに性格は粗暴で好戦的。敵には容赦しないし、攻撃してくるのならば例え知り合いでも全力で叩き潰すが、完全に悪という訳ではなく所々に甘さが見える。一方通行と垣根帝督の性格を足して2で割ったような感じ。

【灰空様より・ID185419】

名前：守道途鷹すじつ みちたか

性別：男

年齢：18

レベル：5

能力名：元レベル3「頭上注意」改造後「パーフェクトレポート完全移動」

能力内容：触れたモノは当然の事、彼の能力は視界の中に移っている者すべてを自在に動かす事が出来る。

ただし本来の使い方では自分の体の周りに薄く触覚を作っており、それに触れると同時に接触箇所を含めた直径30cmの円状に挟まれて、挟られて消失したモノごと11次元を経由して上空にテレポートする。

自身をテレポートしながら周囲にある武器になりそうな物を使って攻撃してくる。

容姿：

いつもくろーい制服に雨カッパを被りを着ている
目には生氣はなくマスターからの依頼がなければただの人形にすぎない。

性格：テレポーターの弱点である感情や痛覚は脳を改造する事で完全に除去されている。そのため暗算のミスなどはない。変わりに感情はほとんどない。ただもくもくつとターゲットを追い詰めて殺すただし、彼も人なので皆から波状攻撃＋フルボッコされたら死にます。

【OX様より・ID164163】

名前：炭津^{すみつ} アヤメ

性別：女

年齢：12

レベル：0

フラッディーハートランド

能力名：残留死念

能力内容：「幽霊のようなものを発生させる能力」

正確にはその場に残った残留思念から生前の人格と姿を喋る幻影のような形で作り出す力。

強烈な恐怖感が不快感を感じさせ、見たものの精神をネガティブにする。

容姿：黒いワイシャツに赤のチェックのスカート。ややパンク気味。

性格：いくつもの「人格」からの影響でジジイのような思考と喋りをする。

その「人格」の元となった「残留思念」は鬼無里 葉赤。鬼無里 椋の祖父である。

彼と彼女の性格は、厭世的で諦め気味、躁病的。

つまりは、ひどく枯れた男である。

【管理人より】

名前：竜守綾季 たつもり あやき

性別：女

年齢：14歳

レベル：5

能力名：万有引力 アトラクタ

能力内容：あらゆる引力を操作する能力。正確に言うと、物体と物体の間に存在している引力を強めたり弱めたりできる能力。質量さえあればそれは可能だが、綾季の視界に入っていないかったりすると操れない。（自分を軸にして周りに干渉することは可能）つまり効果範囲は綾季の目が届く範囲。光や音、熱などは質量を持たないため操れないが、大気中の水蒸気やら何やらでどうにかしてしまう。

質量の限界は水素レベルの小さな分子から、クジラさんだつて大丈夫。電子同士の引力を操り、電磁波を発生させることも可能。攻撃に使えるもするが、逆に電気を打ち消すことも可能。超電磁砲は打ち消すことができる。万能な能力である。

容姿：身長148センチ。肩までの青みがかつた黒髪を無理やりポニーテールにしている。万年半袖短パン少女。

性格：基本荒事は好まない、というか大嫌い。戦闘になつても第一に逃げることを優先するような子。普段では負けず嫌いだったりするけれど元気娘。というか聖母。一人称は『綾季』。「喧嘩っ！？だ、だめだよだつてそんなことしたら……痛いよっ！！」みたいなことを言つて相手の神経を逆撫でさせるのが得意。ただし無自覚だけれども。

【asuta様より・ID157665】

名前：テレサ（大王命名）

性別：女

年齢：（大王の見立てでは）17歳

レベル：測定不能

能力名：聖人（大王の見立てが正しければ）

能力内容：言わずと知れた魔術サイドの人間兵器。10階建てビルを片手で粉砕する怪力と戦闘機に生身で追いつく機動力、タンカーを頭上から落とされても死なない意味不明な耐久力を有し、4メートルの巨大なチェインソーと、ガトリンググレールガンを武器に戦う。なお、魔術について知らないため、魔術は現時点では使えない。弱点は、物理攻撃の通じない相手（一方通行など）。また、弱点とも

言えないが、彼女よりも高い身体能力を有する相手（レベル5クラス
の肉体強化系や、自分より強い聖人）には勝てない。

容姿：ウェーブのかかった白く長い髪と、生気の抜けた真つ赤な瞳
が特徴的な大人っぽい美少女。ヨーロッパ系な顔立ちをしている。
（大王の見立てはスペイン人）メイド服を着用。

性格：大王の命令に忠実。機械のようなしゃべり方と、思考をして
いる。大王に言わせれば『幽霊みたいで気持ちが悪い』。だからテ
レサ（マリオに出てくる幽霊）と名づけられた。

大王がとある研究者からある情報の提供料代わりに貰った、ボディ
ーガード兼メイドロボ。だが、学園都市の技術でも、このレベルの
人型ロボットは作れないため、大王は『聖人の少女の記憶を無理や
り抜いて人形にした結果』と考えている。大王の仕事の手伝いや、
彼の趣味に必要な物品（重火器や、違法薬物）の運搬、彼の趣味の
後の事後処理の一部（死体の隠蔽など）、さらには食事などの身の
回りの世話もしている。

【ニシン様より・ID132268】

名前：東城時人とじょうときと

性別：男

年齢：16

ジャッジメント

職業：風紀委員第一七七支部所属

レベル：レベル0（能力というよりは特異体質）

能力名：名前をつけるとしたら身体調律

能力内容：筋力から視力、聴力などの五感挙句は自然治癒力の活性
化などの身体に備わってるあらゆるものを任意で上昇させる事が出

来る。使用の際には左目が碧く染まる。蹴りでコンクリートを砕いたり、至近距離からの弾丸を回避したりなどが可能となる。がその分身体への負担も大きく長時間の使用や連続での使用は危険。目安として左目から出血↓身体が動かなくなり行動不能となる。また左目から症状が現れるため左目が使用不可になり死角にもなる。その為長期戦になればなるほど不利になる。

基本的には上記の体質？能力？と常に持ち歩いている刀（能力を斬る事ができる特殊な刀）を用いた近接戦闘が得意である。

容姿：黒い瞳に程よい長さの黒髪で中肉中背の見た目ごく普通の高校生。

性格：世話好き、お人好し、家事が好きという主夫特性を持った典型的なお人好しキャラ。滅多にキレる事は無い文キレとかなり怖いらしい。常に周りに気を配っているため状況把握能力も高く特に慌てることは少ない。

【あしゆき様より・ID169400】

名前：常闇直人 とこやみなおと

性別：男

レベル：5

能力名：黒之微笑 ダークフエンサー

能力内容：影や闇を操る能力、本来影や闇を操るだけでは『大能力者』だが、本人の影や闇の印象を変えることで内容を変えることが出来る。応用がかなり利く能力。通常の状態だと切れ味のいい影イメージはハガレンのプライド だが、マイナスの印象をつけることで圧縮したり電子を操ったり、拒絶したりすることも出来る。し

かし、その分光に弱く、日が出ている間は能力を使うことが出来ない。また、日の光を浴びると極端に衰弱する。

- ・能力の存在：常闇は脳に直接魔術の『陰陽術』が刻まれており、能力者でありながら魔術の知識がある

そのため、魔術の知識を使うことで能力を格段に強化出来る。

- ・現在の能力の力：基本的に自分の影、闇に陰陽術の陰の属性が付与できる。ただし、一つ付与している状態で、さらに付与することは出来ない。

付与できる属性

電子・圧縮

反発・拒絶

幻・消滅

重力・湾曲

水・電気

硬化・空間 e t c . . .

また陰の属性を自分に付与することで、それ自体になることが可能である

例 人体↓影、水、電気

これを使うことにより、自分自身の性別を変えることも出来る。本人はあまり使わないが。

容姿：男とも女ともとれる

性格：昼間はただの根倉野郎だが、夜になると気が強くなり笑顔が増える。また共通で困っている人を見過ごせず、よく事件に首を突っ込む。外道を許さず、子供に手を出そうものなら病院行き確定である。また裏の人間であり、信条は『殺られる前に殺る』、その通りに奇襲や速攻が得意であり、一瞬で命を奪う。また、ネコ好きである。さらにハーレム持ちである

【雨季様より・ID79970】

名前：中田雄二
なかつたゆうじ

性別：男

年齢：18

レベル：3

能力名：見えざる手
マジックハンド

能力内容：自分の見えている範囲に透明な手を二つまで出現させる能力。手自体は透明な事以外は能力者の手と全く変わらず、更に透明な手が傷付くと能力者の手まで傷が付く。しかしこの能力の最も特異な点は『見えている範囲』に能力を発動できる事である。望遠鏡などで遠くから見た場所に出現させるのはもちろん、リアルタイムで動いているならば映像の先にも透明な手を出現させる事が出来る。防犯カメラだらけの場所は能力者のテリトリーと言っても過言ではない。

容姿：没個性の塊。黒髪黒目に黒ぶちメガネ。高校を卒業して警備会社に入社してからはほぼ常に警備服である。休みの日にもモノクロの服を着ていて、彼だけ色がないように見える。

性格：目立つことを好まず、なるべく人目につかないように行動をする。だから警備会社で監視カメラを眺めつつ、不審者がいればその能力で捕まえるような事をしている。しかし本人としてはそんな性格を直してもっと社交的になりたいようだが、それが直るのは遠い未来になりそうだ。一人称は自分。二人称はあなた。

【asuta様より・ID157665】

名前：永松大王 ながまつおおきみ

性別：男

年齢：15歳（高校生）

レベル：4（書類上）

能力名：断頭奔流 ウォーターソウ

能力内容：水流操作系最強の能力。最大速度マッハ16で、操作できる重量の限界は5.2t、操作範囲は自身を中心とした半径25M、1Lの水で軽自動車を持ち上げるかなり強力な能力。さらに、水の状態の変更（固体・液体・気体・プラズマに変更可能だが、プラズマだけはかなりの演算能力が必要で、使うとかなり疲れ、1週間は歩行不能。さらに、体重が3キロ減る）はもちろんゲル状や、ゼリー状にすることも出来、水の純度の操作はもちろん、なんと水の硬度まで操ることが出来る。一方通行や絹旗のような、無意識下での防御が可能（鋼鉄並の硬度の氷を相手の攻撃に合わせ、自動生成する）得意技は自身の通り名である、ウォーターカッターの原理で敵を斬りつける断頭奔流。また、純粹を生成できるので、電撃使いに対して滅法強い。

容姿：短い前髪と、長いもみ上げが特徴的な黒髪、琥珀色の瞳の、人懐っこい印象を受けるやや童顔気味な見た目。『面白いこと』をしている時や、情報屋としてはたらいっている時は、瞳が切れ長になり、実年齢より年上に見られる。筋肉はほとんどない虚弱な体系。身長170cm、体重51kg。

性格：普段は見た目通りの、人懐っこい明るい少年。だが、裏では、自分の退屈を埋めるためにおもしろいことを探し、その実行と成就のためなら人の命も、情も、夢も、目的も、何もかも踏みこむイカれた思想を持っている。一人称は学校生活は『僕』で情報屋モ

ードは『ボク』になる。

『面白いこと』を探し、色々な情報を仕入れている。学園都市において、彼が知らないことはなく、学園都市が出来た理由、つまりは統括理事長の目的も把握しているらしい。情報操作の技量も相当で、『レベル5にランクインすると目立ったことが出来なくなってしまう』として、自分のレベルを4にしている。つまり本来の実力はレベル5。ハッキングが得意。また、情報獲得のためにスキルアウト、暗部組織、風紀委員、学園統括理事会などにコネがある。必要悪の教会ともつながりがあり、魔術世界についてもそれなりに詳しい。以上の能力を生かし情報屋を営み、『面白いこと』をするための資金や、それに必要なものを得ている。

彼の弱点は極度の運動音痴。『のび太より足が遅い』、『重量上げのバーも持てない』、『ボーリングのアベレージは2』など様々な伝説がある。その弱点を、『皮膚の上に薄い水の膜を張りそれを操作する』ことで、超人的な身体能力に見せることでそれをカバーしている。

所属は長点上機学園で、結構まじめに通っている。

【あしゆき様より・ID169400】

名前：橋本^{はしもと}

性別：男

年齢：？

レベル：4

能力名：死屍累々（ポイズンダウン）

能力内容：全身の穴という穴から神経性の猛毒を噴き出す。ただし、猛毒は即死という訳でなく。じわじわと足の神経から汚染していき、最終的には脳に至り死亡する。能力者の周りには毒に汚染されて地

面に這いつくばって死んでいる屍が周りに敷き詰められる。まさに死屍累々。しかし、発火能力者に弱く、毒を燃やされてしまったは何もできなくなる。さらに能力者自体に戦闘力はなく、ケン力をしようものなら中学生にも負ける

因みに毒は毎回変わり、抗体は作れない。さらに有色ガスと無色ガスに自由に変えることが出来る

容姿：まさに極悪人、ヤクザとかそんな者ではなく、とにかく極悪人

性格：自己中心的、自分が邪魔だと思えば遠慮なく殺すし、自分が欲しい物、又は人はどんなことをしようとも手に入れようとする。拒めば同じく遠慮なく殺す。口癖は『屍決定』実は可愛いもの好き、あと赤ちゃん好き

【瀬河ナツ様より・ID136851】

名前：藤斑秋風 ふじむらあきかぜ

年齢：15

性別：男

レベル：3

能力：欠落回路 ショートサーキット

能力内容：相手の能力を一時的に封じる能力。本人のレベル以下の能力者にはかなり有効だが、レベル4、5には最大一分が限界、その気になれば封じられていても能力が出せる（ただしその場合はかなりの激痛が頭を襲う）、一度使うとしばらくは同じ相手に使えないと微妙な能力。

容姿：金髪（染めてます）に赤い瞳で背は高め。 カラーコンタクト 服装はヤンキーみ

たいなちよつとガラの悪いファッション。

性格：ぶっきらぼうだが根っこは優しく友達思い。和華を大切に思っているらしく、和華が傷つけられるとブチキレる。

どーでもいい補足、喧嘩は滅法強い。普段から怨霊？をデフォルメにした人形『ノロイ』を持ち歩いている。

【管理人より】

名前：二葉 ふたば 真雪 まゆき

性別：男

年齢：17

レベル：3

能力名：瞬間移動 テレポート

能力内容：知つてのとおりなので書きやすいかと。ただレベル3なので、自身の転移は出来ない。戦闘スタイルとしては手持ちのものを何でも使っちゃう人。シャーペンでも定規でも彼にとつては武器になる。相手の身体に転移させることができるが人体の中心はどうしても座標がずれるらしい。四肢を最初から狙う人。

容姿：身長176センチ。黒髪短髪。毛先は少しはねている。ヘアピン装備。いつもはブレザーの制服を着崩している。文房具一式INブレザー。

性格：いわゆるクソビッチ。虐められたら虐められたその倍だけボコボコにしたくなるなんていうDMでDSなわけのわからない人。一人称は『俺』。

【ユーシン様より・ID172033】

名前：不破 飛鳥（フワ アスカ）

性別：女

年齢：13歳

レベル：2

能力名：身体強化
アドバンスワーク

能力内容：自身の身体能力を外側から補強する能力。反動を相殺、反射速度や傷の回復速度の高速化、握力、脚力増加など。

演算を無意識下で行っているため開発による成長は見込めないが、実戦での上限は未知数。基本は黒いバットケースに入れている木刀を振り回し戦う。

容姿：紫を少し混ぜた黒に絹のような髪質、長身で健康的なスタイルの良さを持っている。服装は動きやすいTシャツ短パン、制服など。

性格：モデルのような外見だが、内面は子どもっぽく素直で活発な柵川中学の二年生の関西弁少女。一人称はウチ。

活発ではあるが、指示する側ではなく、必ずされる側であり、自分から行動しない受動的な性格でもある。能力の影響で運動神経が優れているが、演算を無意識に行っているらしく、勉強面に応用できないので成績は平均程度。経験値獲得のため、闘いは申し込めば断らない。肉体派と闘いたい人はどうぞ。

【渡様より・ID64533】

名前：紅渡音也 べにわたりおとや

性別：男

年齢：16歳

ブラッディローズ

霊装：血薔薇園

美しいフォルムと音色を奏でるバイオリン。

かつてその音色で怒れる人々の負の感情を清め、戦争が無くなった事がある。

しかし、持つものの感情により音色は変わり、負の感情を抱きながら弾くとバイオリンから茨が現れ周りを見境なく血に染めた事によりその名がつけられた。

容姿：茶髪で髪は耳が被るか被らないかぐらいで常にマフラーに見える長いスカーフを巻いており、バイオリンケースを持ち歩いている。

性格：バカで自由気ままで自意識過剰でナンパ癖が酷いが、本気で惚れた女は意地でも守り抜き、どんな事をしてでも助けたいと思う気持ちはバカ正直突っ走る熱血漢な部分がある。

暇さえあれば、花畑でバイオリンを弾いており、バイオリンの腕前は聞くもの全てを虜にするほどうまい。ナンパも、堕ちた女性は少なくは無く、逆に捨てた女性も少なくは無い。

能力は無く、魔術サイドの人間でも無いが学園都市にはただの気まぐれで来た。

高校の面接で突然バイオリンを弾いて、それが面接官の印象に残り合格した破天荒な過去があり、学校では伝説として残っている。

バイオリンは家宝であり肌身離さず持っており、花畑で弾くのは気まぐれ。

夢は教科書に載るほど有名になること。

バイオリンを作る事も出来、質屋に高値で売っている。

好物は無いが、愛する人が作る物なら残さず完食してしまう。
愛する人が近くにいて喧嘩を売られれば調子にのって良いところを
見せようとして諦めずに這い上がり、最後は……。

【管理人より】

名前：光谷 みつたに 桜 さくら

性別：男

年齢：13

レベル：2

能力名：立体映像 ホログラム

能力内容：相手に物体を見せるように錯覚させる能力。それだけ。
直接的な攻撃力はない。戦闘時はがむしゃらに使って合間を縫って
ハンマーを振り回す。そのハンマーも普通の日曜大工用のため大き
くもない。

容姿：普通に少年。栗色の髪を短くしている。身長153センチで
あまり高くない。普段はどういうわけだか作業服を着ている。

性格：究極のビビリ。不意打ちされたとりあえずハンマーを振り
回す。怖いことがあるととりあえずハンマーを振り回す。ビビリの
お陰か異様に感覚が鋭い。まあまあ書きやすいんじゃないかなあ。
一人称は『僕』。

【管理人より】

名前：ライエ

性別：男

年齢：16歳

レベル：4

能力名：絶対排斥^{レジスタント}

能力内容：物体と物体の間に存在する斥力（物体同士を退け合う力）を強めたり弱めたりする能力。極めて正確に言くと、元々物体と物体同士には斥力が無いのだが、それを生み出す能力。綾季の万有引^{アトラ}力と対になる能力といってもいいかも。ただこちらの方が若干精度が落ちる（分子レベルでの操作は不可）上、効果範囲が綾季より狭くなる。70メートルが限界。戦闘時は釘を使用する。斥力という概念がおぼろげなため、能力自体はわりと稀。

容姿：真っ直ぐの金髪に碧眼。例えでいうならガラス細工。中性的な感じ。ハーフらしいけどファミリネームを明かしていないため定かではない。身長168センチに釣り合わない体重。

性格：無関心。とにかく無関心。自分に関係しなければ基本大人しいが、面倒ごとになるととりあえずぶつ潰そうかな、という気持ちになる。（使うかわからないけれども綾季厨設定がありまうわなにするやめ）無意識厨二病。一人称は『俺』。

【黒羊様より・ID181842】

名前：忘^{わすね}善人^{ぜんにん}（本名不明）

性別：男（？）

年齢：12歳（中学一）

レベル：4（忘という少年のレベルは1）

能力名：盗作世界
ミラーリアリティ

能力内容：他人の顔、声、体格、指紋まで似せる事のできる肉体変^{メタモルフォ}化の能力かと思われていたが、実際はもつと恐ろしいものだった。姿形だけでなく、相手の『自分だけの世界』^{パーソナルリアリティ}までも真似てしまう。簡単にいえば能力のコピー。

だが、勿論そのまま再現できるわけはなく、真似た能力は1ランクほど落ちる。つまり仮にレベル5の超能力を真似てもレベル4までしか再現出来ない。レベル3ならレベル2、とどんどん下がっていく。

ちなみに、相手がレベル0だと姿形はコピーできるが能力は使えない。

容姿：おかつぱ頭の少年。

性格：忘という少年は元々コピーした相手の一人に過ぎない。しかしあまりにも多くの人間の外見や能力をコピーしすぎて、本来の名前も姿も忘れてしまった。なので本当は高校生かもしれないし、もしかしたら女かもしれない。

自分というものを見失った超能力者。

とにかく他人のモノが好き。相手が持つていればそれを欲しがり、食事の時も『美味しそうだね。僕のと交換しよう？』と毎回言うてくる。

他人のモノが欲しくなる。これが彼の能力に影響しているのだと思われる。

登録キャラクター名簿【魔術サイド】

登録された魔術師の名簿です。

あゝわ順に並んでいます。また、科学サイドとの被りもあります。

【翔泳様より・ID89505】

名前：アルハノア

性別：男

年齢：16

魔法名：Magnum489「私は偉大なる祖を称える」

能力：『神の手』

創造主たる手で、神々が作り出したあらゆる物を一時的に作り出すことの出来る力。主に零装を作り出す事が多い。一度に一つずつしか作り出せず、新たなものを作り出すためにはそれを破棄して次の物を生み出さなければさらない。ただ、人間が作った物を作ることは出来ない。

容姿：身長：170センチ。金色の短髪で碧眼。服装は動きやすさを重視する為に、下はズボン、上は革ジャンの様な神父服を着ている。中央のボタンを止めずにその下には何も着ていない為、上半身は体の中心部分が見えている様な状態になっている。

性格：魔法名とは裏腹にそんな事は微塵も思っていない軽い奴。戦うのが大好きで、強い魔術師を見つけると何かしら理由を付けて戦いたがる。ちなみに魔法名の489は4「し」8「ば」9「く」である。その魔法名を名乗っているのは、「そうしないとうるさい

奴がいるから」と言う理由。

口癖は「〜じゃん」

「戦つちまえばいいじゃん」

【フニヨ様より・ID145847】

偽名：浦葦 うらあし 善口本名：浦葦 ぜんこう 善行 ぜんこう

性別：男

年齢：不明（本人は永遠の18歳と言っている）

使用魔術：『嘘笑い』（liegen）と『本物の肉体』（Wahrheit）

魔術名：「Heuchelei999」（意味は、すべてが偽善）

魔術内容（嘘笑い）：発動中に嘘を言うとき嘘が本当になったように、『感じる』

そして嘘をばらした瞬間に元に戻る、

効果範囲は独自のルーンから半径3メートル、基本はルーンを刻んだ石をばら撒いたり壁に刻んだり紙に書いて張り巡らしたりして効果範囲を広げる、自分の背中と手のひらに小さくルーンを刻んでいる、

魔術内容（本物の肉体）：身体能力強化の魔術、使用中は聖人並みの身体能力を得られる、1日7時間しか使えない、天体関係の魔術のため、

使用例1（嘘笑い）：嘘で君の腕は今切り落とした、と効果範囲内と言うと本当に腕が切り落とされたかのように見え、痛みを感じ、神経も全部遮断され腕がなくなったように感じる、つまり腕を”使わなく”なる、「腕が切り落とされたのは嘘」というように嘘だとバラすと腕を失ったと言う”意識”がなくなり腕も元に戻る、効果範囲外に出ると元に戻る

使用例2（本物の肉体）：嘘笑いで自分を見えなくし、本物の肉体を使い殴ったり蹴ったりする、

容姿：金髪に青い目好印象を受ける青少年、嘘笑いを使うと目と髪の色が黒くなる、（黒髪黒目が本来の色）

性格：基本はいい事をしたり悩みを聞くが、それは恩を売るためとつながりを強くするため、偽善者、仲が良かった友人が“偶然”待ち合わせ場所の前で拉致され“偶然”行方不明になり、“偶然”研究所から死体で見つかりその（主人公の嫌いな）研究所がつぶれる、など一人称は「僕」で基本ですます調、普段は偽名の浦葦^{うらよし} 善^{ぜん}行^{こう}を名乗っている、いろんなところにふらふらしている事から流浪者とも呼ばれている

暗部にも深いかわりがありフリーの傭兵のようなことをしている素で善行をしているやつを嫌っており避けるように行動する

【ITEM様より・ID184601】

名前：神鬼大和^{かみきやまと}

性別：男

年齢：13

レベル：5

能力名：事象選択^{オールセレクト}

能力内容：発生した事象に対して選択肢を持つ事が出来る。簡単に言えばあった事をなかった事にしたり別の結果に変更出来る。

選択出来る事象は発生した事象のみで未来の事象に対して選択肢は持てない。また自分を除く人体への能力の直接の使用も出来ない。

容姿：髪型は鏡音レンと同じで鮮やかな茶髪。いつもホストの様な服装をしている。身長は美琴より少し高いくらい。非常に端正な顔の持ち主でかなりのイケメン。

性格：口調と共に超攻撃的。基本的に慣れないは好まないが積極的に避ける訳ではない。残忍かつ冷酷。だが決して外道な訳ではなく無駄な争いはしない、する気がない。一人称は『オレ』

能力者でありなが聖人の頂点に君臨する『完全聖人』でもある。完全聖人は聖人と違い神と全く同じ特徴を持ち、それゆえテレズマを完全に操り身体能力も通常の聖人の倍に匹敵する。戦闘時には能力よりも圧倒的な身体能力を駆使する。最強にも見える戦闘力だが身体自体は普通の子供なので人体への負担が大きい完全聖人の力やテレズマで長時間の戦闘は出来ない。

【あしゆき様より・ID169400】

名前：桜木麻耶さくらぎ まや

性別：女

年齢：36歳

魔術名：prodereプローデレ裏切ること「異端なることを誇るなかれ」

職業、傭兵 テロリスト 殺し屋 魔術師 科学者 魔術師と能力者の両方を殺せる殺し屋 専業主婦 現復讐者。

性格は、ほとんど二重人格に近く【心優しい女性】と『冷酷な殺人兵器』とつかいわけている。

経歴：幼少のころから戦闘力が高く現代では名は忘れられているが現役ではそれはそれは恐れられた魔術師。

22の時に結婚し3年後に旦那を事故で亡くし5年前に一人娘が学校での虐めにより自殺した時に酷い悲しみに毛髪が全て色素が抜け感情が無くなってしまうた・・・それからずっと孤独の中に身を置いていた。

極限まで肉体を高めており、飛び上がって戦闘機を掴んで投げる事が出来る完全に化け物。

その身は、聖人の一人で一時的だが天使と互角以上に戦える。

魔術：『ブリュナク投石魔術』

「強い力で物を投げる」魔術を独自に開発、たとえば石が麻耶の手からはなれた瞬間、目もくらむような白い光と熱を発し、うなりと稲妻を伴いながら敵へと向かって飛んでいくそして自動的に次から次へと敵を貫き、飽きることなく殺戮を繰り返すという魔術。

最大射程35km、静物必中射程25kmを超える礮弾を投げると近づく事すら不可能。

ちなみに礮弾の最高速度は音速の五倍。

やろうと思えば学園都市の軍隊一つを一人で相手できる。

『千里眼』

空間把握魔術で——ほぼ全方向を見渡す視野、半径40キロ先を見通す視力の他、物体の透視などに長けている。

武装：ハンドガン二丁にナイフ一本。またはスナイパーライフルなどかなり銃器に関しては自信がある。

【asuta様より・ID157665】

名前：テレサ（大王命名）

性別：女

年齢：（大王の見立てでは）17歳

レベル：測定不能

能力名：聖人（大王の見立てが正しければ）

能力内容：言わずと知れた魔術サイドの人間兵器。10階建てビルを片手で粉砕する怪力と戦闘機に生身で追いつく機動力、タンカーを頭上から落とされても死なない意味不明な耐久力を有し、4メートルの巨大なチェンソーと、ガトリングレールガンを武器に戦う。なお、魔術について知らないため、魔術は現時点では使えない。弱点は、物理攻撃の通じない相手（一方通行など）。また、弱点とも言えないが、彼女よりも高い身体能力を有する相手（レベル5クラス）の肉体強化系や、自分より強い聖人）には勝てない。

容姿：ウェーブのかかった白く長い髪と、生気の抜けた真つ赤な瞳が特徴的な大人っぽい美少女。ヨーロッパ系な顔立ちをしている。

（大王の見立てはスペイン人）メイド服を着用。

性格：大王の命令に忠実。機械のようなしゃべり方と、思考をしている。大王に言わせれば『幽霊みたいで気持ちが悪い』。だからテレサ（マリオに出てくる幽霊）と名づけられた。

大王がとある研究者からある情報の提供料代わりに貰った、ボディガード兼メイドロボ。だが、学園都市の技術でも、このレベルの人型ロボットは作れないため、大王は『聖人の少女の記憶を無理やり抜いて人形にした結果』と考えている。大王の仕事の手伝いや、彼の趣味に必要な物品（重火器や、違法薬物）の運搬、彼の趣味の後の事後処理の一部（死体の隠蔽など）、さらには食事などの身の回りの世話もしている。

【あしゆき様より・ID169400】

名前：常闇直人 とこやみなおと

性別：男

レベル：5

能力名：黒之微笑 ダークフエンサー

能力内容：影や闇を操る能力、本来影や闇を操るだけでは『大能力者』だが、本人の影や闇の印象を変えることで内容を変えることが出来る。応用がかなり利く能力。通常の状態だと切れ味のいい影イメージはハガレンのプライド だが、マイナスの印象をつけることで圧縮したり電子を操ったり、拒絶したりすることも出来る。しかし、その分光に弱く、日が出ている間は能力を使うことが出来ない。また、日の光を浴びると極端に衰弱する。

・能力の存在：常闇は脳に直接魔術の『陰陽術』が刻まれており、能力者でありながら魔術の知識がある

そのため、魔術の知識を使うことで能力を格段に強化出来る。

・現在の能力の力：基本的に自分の影、闇に陰陽術の陰の属性が付与できる。ただし、一つ付与している状態で、さらに付与することは出来ない。

付与できる属性

電子・圧縮

反発・拒絶

幻・消滅

重力・湾曲

水・電気

硬化・空間 e t c . . .

また陰の属性を自分に付与することで、それ自体になることが可能である

例 人体↓影、水、電気

これを使うことにより、自分自身の性別を変えることも出来る。本人はあまり使わないが。

容姿：男とも女ともとれる

性格：昼間はただの根倉野郎だが、夜になると気が強くなり笑顔が増える。また共通で困っている人を見過ごせず、よく事件に首を突っ込む。外道を許さず、子供に手を出そうものなら病院行き確定である。また裏の人間であり、信条は『殺られる前に殺る』、その通りに奇襲や速攻が得意であり、一瞬で命を奪う。また、ネコ好きである。さらにハーレム持ちである

【a s u t a様より・I D 1 5 7 6 6 5】

名前：永松大王 ながまつ おおきみ

性別：男

年齢：15歳（高校生）

レベル：4（書類上）

能力名：断頭奔流 ウォータージェット

能力内容：水流操作系最強の能力。最大速度マッハ16で、操作できる重量の限界は5.2t、操作範囲は自身を中心とした半径25M、1Lの水で軽自動車を持ち上げるかなり強力な能力。さらに、水の状態の変更（固体・液体・気体・プラズマに変更可能だが、プラズマだけはかなりの演算能力が必要で、使うとかなり疲れ、1週間は歩行不能。さらに、体重が3キロ減る）はもちろんゲル状や、ゼリー状にすることも出来、水の純度の操作はもちろん、なんと水の硬度まで操ることが出来る。一方通行や絹旗のような、無意識下での防御が可能（鋼鉄並の硬度の氷を相手の攻撃に合わせ、自動生

成する)得意技は自身の通り名である、ウォーターカッターの原理で敵を斬りつける断頭奔流。また、純粹を生成できるので、電撃使いに対して滅法強い。

容姿：短い前髪と、長いもみ上げが特徴的な黒髪、琥珀色の瞳の、人懐っこい印象を受けるやや童顔気味な見た目。『面白いこと』をしている時や、情報屋としてはたらいっている時は、瞳が切れ長になり、実年齢より年上に見られる。筋肉はほとんどない虚弱な体系。身長170cm、体重51kg。

性格：普段は見た目通りの、人懐っこい明るい少年。だが、裏では自分の退屈を埋めるためにもしろいことを探し、その実行と成就のためなら人の命も、情も、夢も、目的も、何もかも踏みこむイカれた思想を持っている。一人称は学校生活は『僕』で情報屋モードは『ボク』になる。

『面白いこと』を探し、色々な情報を仕入れている。学園都市において、彼が知らないことはなく、学園都市が出来た理由、つまりは統括理事長の目的も把握しているらしい。情報操作の技量も相当で、『レベル5にランクインすると目立ったことが出来なくなってしまう』として、自分のレベルを4にしている。つまり本来の実力はレベル5。ハッキングが得意。また、情報獲得のためにスキルアウト、暗部組織、風紀委員、学園統括理事会などにコネがある。必要悪の教会ともつながりがあり、魔術世界についてもそれなりに詳しい。以上の能力を生かし情報屋を営み、『面白いこと』をするための資金や、それに必要なものを得ている。

彼の弱点は極度の運動音痴。『のび太より足が遅い』、『重量上げのバーも持てない』、『ボーリングのアベレージは2』など様々な伝説がある。その弱点を、『皮膚の上に薄い水の膜を張りそれを操作する』ことで、超人的な身体能力に見せることでそれをカバーしている。

所属は長点上機学園で、結構まじめに通っている。

【翔泳様より・ID89505】

名前：フィールネノア

性別：女

年齢：17

魔法名：Magnum111「我が力を偉大なる祖に捧ぐ」

能力：『神の目』

右目に宿る神が持つ目。見ただけで術式や能力を見抜いて全く同じモノをぶつけて相殺してしまう。異能にしか効力はないので、核兵器に弱い？ 霊装等も同じように効力を相殺出来る。素手も防げない。

制御を解除すれば、数秒先を見ることが出来る。その場合、普段見えない未来を見ているため負荷が大きい。その場合、使用時間は三分が限度。

容姿：身長は160センチ。白銀の長髪。緑眼で常に右目には眼帯を装着し、神の目発動時にはその眼帯を外す。黒い修道服を纏い、腰の部分には安全帯の様な分厚いベルトを付けている。普段はフードをかぶっているの、神の目を使う時以外はあまり顔を出さない。

性格：必要以上の会話はしない主義で、基本無口。自分たちこそ正義と固く思っており、悪（それに刃向かう者）を断じて許さない。

口調は必ず「〜だ」で終わる。

「……そうだ」

【ティンク様より・ID176467】

名前：御仏聖^{みほとけひじり}

年齢：13（実際は4000を越えている可能性あり）

性別：男（実際はどちらでもない存在になってしまっている可能性あり）

レベル：0

能力名：ブツダの悟り

設定：ブツダの魂を受け継いでしまった少年。（ちなみに約八割くらはブツダの魂）そのせいで人を超えた存在になってしまう（自覚はある）。その事を隠して生きているがさまざまな奇跡をおこしているので、あまり人として見てもらえない（超人的な意味）。ブツダの魂を受け継いでいるため肉は食べない（魚は食べるらしい）。

インデックスみたいに経文を全て暗記している（ブツダの記憶）。が、別に魔術的な意味もないので命を狙われるなんて事はない。

最近の悩みは昼寝しようとするとうるせに入ると勘違いされてしまい世界中から動物が集まってきたりすることらしい。（学校の教室で三分うたたねしてしまうと学園都市中の鳥が集まってきたりしまうレベル）じつは自力で地デジ電波を受信できるためアンテナをつけてないしテレビも地デジ非対応（対応する必要がない）。あぐらを組むと後光がさしてしまうのでうかつにすわれない。水面や空中を歩くことができる。なぜかテレビのチャンネルを勝手にかえられると頭突きしてくる（許可したらオーケー）。黒髪で身長は普通。

彼から攻撃をすることは一切ない。大体の人物は彼から出るオーラで降参してしまう。また、心の中に直接語りかけることも可能。悪しき心や闇の心を持った者の攻撃を全て打ち消してしまう。一応武術の心得はあるが、一度も使ったことはない。あまり人を分け隔てないのでスキルアウトにも友達がいる（ていうか弟子）。弱点は、

聖なる心を持った者の攻撃は普通に通ってしまうこと（まあ攻撃する瞬間の心持ちによる。もともと聖なる心を持った者でも憎しみを持って攻撃しようとする弾かれる。また、悪しき心を持った者でもただ単に勝負したいだけとかだと通してしまう）一人称私。二人称あなた

前にいた街で消防団に協力したら街から火の気が完全に消え去り、千代田区よりタバコに敵しい街になったという伝説がある。

【a s u t a様より・I D 1 5 7 6 6 5】

名前：ルビウスⅡハグリット

性別：男

年齢：26歳

魔法名：s o m n i u m 3 8 1（我が腕は夢を紡ぐ為に）

魔術：『呪われた腕』という、自らが書く詩や小説が全て何故か、魔導書の原典になってしまう才能の持ち主。今まで書いた詩集、小説の数は1541冊であり、しかも増え続けている。戦闘では自らが書いた魔導書を使い敵を圧倒する。また、詩や小説のタイトルのセンスが独特。

『呪われた腕』と自ら読んでいるが、実際は自分の言葉選びのセンスや、文字配列が原因している才能である

例：『毒莓のワインのような君へ．．．』『刹那から切り取られたクロニクル』

容姿：ジヨニー・デップとダビデ像を足して二で割った顔立ち。細身で長身のナイスガイ。黒い帽子と闘牛士のようなファッションに身を包み、象でも入ってるのではないかという位のサイズのリュック

クを普段から背負っている。この中に魔導書が入っており、戦闘時は下ろす。身長188センチ、体重74キロ

性格：神の化身と言われてもおかしくない優しく温厚で平和的な人格の持ち主。また、詩や小説の創作に情熱をかけており、夢は自分の創作で世界中の人を幸せにすることという、少年的思想の持ち主とにかく戦闘嫌いで、回避出来ない戦闘以外は真っ先に逃走を図ろうとする。自分を狙って、襲撃してきた魔術師も決して殺そうとしない。（『勿忘草よりも純白』という原典で魔術に関する記憶を消去し、戦闘手段を無くす）

世界中の人達に自分の創作を読んで貰いたい、原典であるために読んだ人が魂を汚してしまうために、自分の本を世間の明るみに出せない。そのため自分の才能を疎ましく思っている。かまचीもゲ口を吐く程の速筆。

生い立ち：元スペイン星教の修道士。自分の才能を利用しようとする魔術結社や、自分の才能を危険視する必要悪の教会に追われ、世界中を点々としながら、『呪われた腕』を消す方法を探している。16歳から創作活動を始めた。また、ルビウスⅡハグリットは自分の好きなファンタジー小説の登場人物から採った偽名。本名は、ジュリアンⅡレイⅡソレイユ。

魔術結社：ノアの方舟

大洪水の後、地上に残ったノアとは異なり、再び浄化が行われた際に選ばれた者として樂園に戻ることを目的として結成された魔術結社。

メンバーは

フィールネ||ノア
アルハ||ノア
アスヤ||ノア
ユハナ||ノア

その体は『楽園にいた頃の人』に限りなく近づけた為、聖人に匹敵する身体能力を有するが、人間の魔術を使用する事は出来ない

登録キャラ名簿【神生徒会】

想像屋様オンステーズ（ry

【想像屋様より・ID93770】

名前：天音廻黎あまね かいり

性別：女

身長：147cm（アンデルフォン時：181cm）

年齢：不明

性格：妹の華音以外とはほとんど関わりを持たず、常に本を読んでいる為他人が顔を見る事は無いだがレベル6の連中とは会話が弾む。

また、二つの人格を使い分けていて、二つ目の人格のときは性格が真逆になり、全てを見下している様な感じの口調や態度となる。

能力：『神魔邪眼』

廻黎の二つある能力の内の一つで、一番の原石。

その名の通り眼を扱う能力で、無数に存在するありとあらゆる眼を保有している。

故にその効果も様々で、それぞれを見極めるのはかなり困難である。

常時使用しているのは『観察の邪眼』という眼で、常にあらゆるモノの情報等をその眼で観ている。

アンデルフォン
『攻略不可』

廻黎二つ目の人格と能力にして、最も謎に包まれている原石。

異常な程の耐久性 と体力を持つ。（影虎以上！！）

容姿：翡翠色のツインテールの髪に、紅色 の瞳。

背中の部分に大きなリボンの着いた

これまた翡翠色のゴスロリのワンピースを着ており、そこに淡い紅色の 桜の花の形をした独特の日傘を差している。

ちなみに日傘と本はそれぞれ持たずに浮いている。

アンデルフォン時は、軽く逆立たせた黒髪に、深い蒼色の瞳。

白い袖無しのシャツと黒い学生ズボンを身につけ、その上に黒い学生服 をマントの様に羽織っている。

そして体の周りを白と黒のエネルギー体が交差して廻っている。

（ティルズシリーズのダオスを参照しています）

設定：元は自分がティルズシリーズ好きなので、それに基づいて作ったキャラクター。

ちなみに、人間がアンデルフォンを攻略したいと思ったら、飽きるのを待つし か手段は無い。

（それで一応は攻略したという事になる）

それでも本気で攻略したいと思ったら、最初に周りを廻っているエネルギー体を破壊し、次に異常な耐久性 の耐久性の元である鋼体を破り、最後にアンデルフォン自身にダメージを与えれば勝てる。

イメージCV：廻黎はひぐらしのなく頃にの 竜宮レナの声優さんで、アンデルフォンはティルズオブヴェスペリアのジユデイスの声 優さん

名前：クレリア「クロス」死閻^{シアン}

性別：男

年齢：17

性格：負けた相手を不謹慎な言葉で罵倒したりと悪辣な性格 自分と同族（レベル6）など認めた物には、世話焼き 欲しい物またはしたいことのためなら誰でも犠牲に捧げる （欲しい物に『椿』が入っている）

容姿：イケメン

髪の色は金

長い髪をヘアピンをたくさん使いオーズのアンクみたいになっている
体格はふつう

常にスーツ（黒）

所持品：手帳（自分が心を折った能力者や魔術師のことが日記として記されている） たばこ お菓子 ケータイ

『絶対強運』

圧倒的な幸運を持ちさらには他人から幸運を奪い己が物とする事が出来る。

能力：『パラノーマルアクティビティ超常現象』

この世で起きるはずのない現象を運命的に誘発する能力
能力の効果も発動タイミングも運任せ

彼自身の特性 『絶対強運』があるため

どんなことでも（実際に起きるはずのないこと）ほとんど自由に出て来て

タイミングも強運のため絶妙なタイミングに発動する

黄金錬成のように自滅することもないため

本当の意味で最強

例、誰かが殴りかかってきたらその腕が何故かドロドロに解けたり他人の心を自分の物にしたり本人が嫌がっているのに感情と身体が自分を愛してしまっていたり

ビルがいきなりひっくり返ったり
死んだ人が生き返ったり
隕石が振ってきたり
いきなり身体が破裂したり
攻撃が自分をすり抜けてしまったり
年を取らなくなったり
いきなり別の場所に移動したりなどランダム過ぎて予想が本人にも
つかない様な戦い方をする。

追加事項

椿さんの過去に因縁がある模様。元は恋人だったらしい。
役職『書記』

名前：桜小路 影虎

年齢：15歳

身長：180センチ

体重：65キロ（少しやせている）

容姿：顔は、優しい人が一番しっくりくる顔（けっこうイケ面）

常に目を閉じているような顔で本気になったりイラッと来ると目が
開き鋭い目をする事が出き以外と鋭い八重歯が目立つようになる
この時は、ワイルドなイケ面になる
日本人にも見えるが外人にも見える

目の色は、黒

髪の色は黄色に茶色が混ざった感じ（染めている本当は、透き通る
ような黒）

足が長くモデル体型で結構、筋肉がついている

白いシャツにフード突きの緑のコート（裏地には、白の布に桜吹雪の刺繍が入っている特注品）を常に着ており顔をフードで隠している

職業：レベルの低い高校の一年生

元 長点上機学園（ながてんじょうき 学園）その他色々

元学園都市最強であらゆる研究機関で実験体にされていたが能力の開発に嫌気がさし逃げ出した

メモリーキャンセラー
能力：記憶消去

消去と書いてはいるが実際は、閲覧もでき改竄もできるまたは、他人の記憶を蘇らせたりもできるため消すだけではない

この能力は、常盤台中学のレベル5の心理掌握メンタルアウトや他の能力で記憶破壊に酷似しているがそれらの能力とは、遥かに次元の違うレベルに位置していて例えるなら 花火と太陽のような感じである
正確には、記憶だけではなく記録や経験も消去できる

記憶や記録に関してはこれ以上ない能力

効果範囲は、本人から離れて月くらいの範囲まで

彼の能力は、この範囲とそして、人の脳を完全に支配下に置くことが出来るため実質は、最強の能力

魔術：彼は、能力者でありながら魔術を使用できる稀な体質
彼の使う魔術は、錬金術に酷似しているながらも少し違う魔術
魔法名：vallete+000（さようなら、永遠に）

技名：『矛盾が生じる錬成』

名前は適当に決めているため意味はなし

発動するためには、詠唱が必要

頭でそのワードを読んでも可

ワード：『万物は、我とともにあり。そして、怪奇とは、我にまわりつくもの、その二つがあいなすとき、禁忌の力ここにあり』

効果は、身体の一部が触れている物体（異能も可）を変形させたり抜き取ったり陥没させたり溶かしたり固めたり動かしたり物体であれば好きに操れるしかし、錬成した物体には、何かしらの矛盾を付属しなければならぬ

例、鉄から銃を錬成するとその銃は、相手を切るために使うなど

または、コンクリートで槍を作ったとすると

その槍は、後ろに投げなければ前には飛ばないなど

正直、意味不明な能力

まだまだ進化の可能性があり

この魔術を簡単に言うと言理想を形にして表す力

黄金錬成とは、強弱の関係

精神の力：『闘争本能』

能力ではなく精神面の力

戦いを望み常に勝つことを前提に動く

そんな本能

相手の弱点を見抜いたり

自分の技を自分でアレンジしたりするため

影虎は、どんな能力を与えられても戦闘向きな能力に改造するらしい

影虎は、本当の能力は、科学でも魔術でも説明することが一切出来ない幻想殺しと同じく奇妙な能力

能力：名称は、『異世界樹』^{ユグドラシル}レベル6

この能力を発動するとまたは、影虎が生命の危機に陥ったり死亡したりすると勝手に発動し対象を破壊しようとする（自己防衛迎撃機能＋自己再生治癒機能）

なぜ、死んでも能力が発動するかというと『異世界樹』^{ユグドラシル}の意志で無理矢理蘇らされるから。これは、魔術に属している作用

影虎の頭から光り輝く桜色の鋭い刃のような枝が現れ頭に王冠（能力を操るための媒体で天使の輪と同じ性質で正式名称は、ケテルの

王冠）のようなものが出来る

そして、能力の一つは、全ての生命または生物でないものでも自分と強制的に接続する（支配する）

二つ目は、魔術にも科学にも常識にも非常識にも物理にもオカルトにも影響されない（イマジンプレイカーには、触れられた部分が破壊される？）謎の物質？（生命力）でできた桜色の鋭い刃のような枝を自在に操り闘う

この枝は、相手の攻撃を完全に受け止め攻撃にも使える

生命力で出来ているため相手を滅多刺しにしたり八つ裂きにしても相手は死なず傷も残らない（精神には大ダメージで痛みもちゃんと感じる）

3つ目は、『異世界樹』^{ユグドラシル}で傷の治療が出来る

4つ目は、巨大な世界樹を生み出して地球の生命力やエネルギーを支配し使役する

それを発射することもできる

この時の砲台の形が龍の顔似ていることから

^{ドラゴンウェーブ}
『竜王の波動』

威力は、ご想像にお任せ

後は、A I M拡散力場の完全な制御（支配）など・・

これだけの能力を持つてしても完成はしていないらしい

彼は、自分の能力を完全に掌握し、現在の『異世界樹』^{ユグドラシル}とは違い黒い枝の殺傷能力だけの、『死世界樹』^{キルドラシル}を生みだし使役していた。

『異世界樹（セフィロトの樹）』は、本来自分の意志を持っており自分の認めたものにしか恵みを与えない。気に入られなければ神にすら襲いかかる謎の物体。

彼が死んだ場合、勝手に彼の身体に現れて彼を死から蘇らせる程影虎のことを気に入っているらしい

使用しすぎると若返り（最低8歳の姿まで）成長しなくなる（使用中は）使用してから三日たつともにもどる。

追加事項：聖人である

神の力をその身に宿している

属性は、メタトロン

この属性は、本来存在しない

性格：穏やかでのほほんとしている

寂しがりや

感動屋

一途

乱暴

実は、人間に興味が無く全く関係無い人なら簡単に見捨てる。

戦闘スタイル：拳か脚かと言えば拳で闘う派

握力は、最弱で190キロ越えと異常

懐から本物の銃を取り出して闘う（アンチスキルからこっそりくすね取った）

結構腕っ節が強く

能力無しでも暴走族一つや二つは、壊滅させられる

口癖：怒ると『噛み殺してやろうか？』または『喰い殺してやろうか？』

かなりドスが利いた声で言う

酒を飲んでも酔うには酔うが冷静でいられるため

酒には強い

実は、影虎は、名前も能力も全てを偽って生きている

年齢と性別は、本当

影虎のヒーローとしてのあり方

己の意志で守りたい者のために人にも怪物にもそして、正義にも悪にもなれる良く言えば英雄、悪く言えば悪党、光と闇、両方を兼ね備えた者・・・桜小路影虎

能力は『異世界樹』^{ユグドラシル}と死世界樹と『異常抑圧』^{ゼロスキルアブノーマル}と記憶消去が主な能力と『敗北の王』^{ビクターバドックス}などを使う芸達者。
『異世界樹』^{ユグドラシル}を捨てれば他にもたくさんの能力が使える化け物

名前：園崎陽^{そのさきよう}
年齢：18歳
性別：男

容姿：身長が影虎と同じくらいで髪型が青い髪が長髪で顔が腹が立つくらいめっちゃ男前で体格がモデル体型で手足が長く服装が上下^{ズレ}制服で首にロケットペンダントを掛けている爽やか系の色男だ
唯一おかしいのが腰に掛けた日本刀（模造刀）

能力：『絶対時間』^{タイムオーバー}
時間を完全に操作することのできる能力。詳細は不明だが対物時変など物の時間を操ったり時間を止めたり早めたりできる。
特技はおいしい紅茶を入れる事と模造刀で空間から何まで切る居合斬り。

シスコンだが優しく礼儀正しい影虎と気の合う化け物。
役職『副会長』

名前：月明灯^{つきあかあかり}
年齢：16歳

性別：女

容姿：真っ黒な長髪と青白い肌という陰気な容姿で身長が160ちよつとの黒がメインカラーの上下制服の女
顔は結構かわいらしい。

性格は：引っ込み思案

特技1分間に300回の土下座と200にも及ぶ謝罪

能力：『幻実？ぎ（ドリーム・オア・リアル）』

幻が現実になったり現実が幻になったりなど自由に使用できる。幻覚なども使用が可能で黄金鍊成に効果は酷にしているが願った事しか現実にならないという点では、こちらのほうが使い勝手は良く。

自身が死んだ事や怪我をしたなどは、幻に変えてしまえるなど素晴らしい能力の持ち主。実はかなり強いお方

役職『会計』

名前：日暮暮日ひぐらしくれにち

年齢：16歳

性別：男

容姿：髪の毛がはねっパねの髪形で革ジャンとボロボロを通り越して雑巾なズボンをはいた影虎が完璧と認める容姿の男
キレ症

能力：『閉鎖空間』フリースペース

すきな空間を自由に作り出し自由に移動し自由に消し去ると言う能力

『平均気温8000度の世界』や『自分だけがモテる世界』など本当に好きな世界を作れる。死なない理由は、空間が彼を殺したからすぐに『死者が蘇る世界』に引きずり込み復活させるからである。影虎とは犬猿の仲である化け物
役職は『庶務』

イラスト展示

絵で参加してくれた方々の絵置き場です。ありがとうございます！

こちらもある順で並べられています。

ユーシン様より・茨野アゲハ

BYこなつ（管理人）

> i 3 3 1 2 1 — 2 1 6 1 <

みてみんURL↓http://2161.mitemin.net/
t/i33121/

（サンプルがてら描いたものです。誰だコレになりました； 申し訳ありませんユーシン様！あとアゲハちゃん！一応テンペストの綴りはあつてる！はず！です！多分！！）

管理人より・竜守綾季/ライエ

BYこなつ（管理人）

> i 3 5 6 1 4 — 2 1 6 1 <

みてみんURL↓http://2161.mitemin.net/
t/i35614/

（所謂落書きですが…。我が家の綾季ちゃんとライエ君！→のアゲハちゃんとはおそろしくタッチが違いますが同一人物です。こっ

ちのタッチのが描き慣れてはいますね！。紫大活躍でした！

ラストデイズ BYこなつ

>i36300—2161<

http://2161.mitemin.net/i36300/

随時追加予定です。

【サンプル】 細波六月VS光谷桜（前書き）

サンプルにするため書いたものです。参考になれば幸いです。多分
ならないです。

【サンプル】 細波六月VS光谷桜

肌寒い風。淡く輝く月。擦り寄る黒猫。静かな大公園。冷たいベ
ンチ。湯気のたつホットココアの缶。

それから、

「ぎゃあああああああ！！！」

劈く悲鳴。

あたしは放心の先の虚無の世界から無理矢理意識を引っ張り起こ
し、苛々と声の方を睨んだ。

「ちよっ……！何コレ！何なのコレ！何でこここんなに猫多いんだ
よおおお目光って怖いんだけどおおお！！！」

愛しのマイフレンズに何を言うか。声の主は情けない悲鳴を続け
様にあげながら、こっちに向かって突っ走って来る。背丈はあたし
以下、それから肝っ玉のサイズもあたし以下。どういうわけだか作
業服を着て、手にはコンビニの袋を提げていた。

そいつはあたしの目の前で急に止まって、今にも泣き出しそうな
声色で言う。

「その人！助けてくださいここは化け猫の巣窟です！！！」

「……」

「……あ」

そして、今度は半泣きの聞き取りにくい声で、

「ぎゃあああああああ！！猫娘ええええええ！！！」

「うっさいなもう猫娘とかこの鬼太郎だようせあたしは猫と戯れるのが好きな根暗だよ！！！」

思わずそう怒鳴った。失礼なことを言われた怒りと、あたしの持つ負のスキルの一つ被害妄想が炸裂する。

「いやあああああもしかして僕いつの間にやら猫の王国にトリップしてたのおおお！！？ひいひいひいお助けください王女様ああああ」

「うるさい黙れ耳が痛い！！！」

「ひッ！」

泣き喚くプチサイズ肝っ玉（今命名）はあたしに怒鳴られ萎縮した。面倒くさい奴だ。余計にストレスが溜まる。

「…名を名乗れ」

「あ、あの、もしかして変な契約書に使ったりするんじゃないか」

「家に帰ってたかったら名乗れって言ってるんだよ変なこと気にしてんじゃないよこのプチサイズ！」

「は、はい！！！！みったにさく光谷桜ですう！！！」

何だ、女々しい名前だな。思ったことは言わない性質なので口には出さない。桜は既に半泣きで硬直していた。対するあたしはベンチで体育座りをしたままである。何だこのシュールな光景は。

あたしたちを包むシュールな雰囲気能耐えられなくなり、あたしは立ち上がった。桜は「ひッ」と怖気づいて後ずさる。立っただけでその反応はビビリすぎだろう。

「…桜はあたしに余計ストレスを与えたわけだけどその辺どう落

とし前つけるよ?」

「はいっ!? 落とし前ッ!?」

「そう落とし前」

光景的には脅迫現場だろう。そしてあながち間違いではない。

「ストレス発散させてくれるよねさせてくれないのねえさせてよ」

桜の顔が真っ青に染まった。

*

この学園都市では、超能力開発なんていうイカれたカリキュラムが存在する。

230万人の学生がそのカリキュラムを受けていて、当然あたしも受けたわけだが、その結果得られた能力は実に使い勝手が悪いものだった。

ダメージカウンター
衝撃貯蓄のレベル1。

レベル0——無能力者の一個上、である。

まあレベルに関しては文句は無い。カリキュラムを受けた約6割があたしみたいなレベル1やレベル0に分類されるのだから、納得できる。逆に一番上のレベル5は230万分の7しか居ないらしいから、何もそんな寂しいランクに入りたくもない。

だが、宿った能力があたしはあまり好きじゃない。

あたしの能力は——受けたダメージをそっくりそのまま好きなときに放出できる、というものであった。

つまり、一度痛い思いをしないと、満足に能力を行使できないのだ。

お陰であたしの身体には、傷が耐えない。

＊

一目散に逃げ出した桜を、あたしは追っていた。

人から見たらその姿はさしずめ、脱兎とチーターだろう。脚力だけは自信がある。どんどん差を詰めて、思いっきり奴の襟を引っ掴んだ。

「ぐ、えッ!!」

「何で逃げんの」

理由はぶっちゃけわかってるが、それでもなお聞いた。聞いてやらないと可哀想かな、なんて思った。ああでもこっぴどい人から嫌われるんだろうな。

「ごめんなさい!!猫娘呼ばわりしてすみませんでした!!だから離してくださいお願いします!!」

「そんなの聞いてない」

逃げ出さないようにがっちりと襟を掴んでやる。桜はじたばたと

暴れるが、襟を掴まれては力づくで抜け出すのは困難だ。さもなくば首が締め付けられる。

「さて――」

ストレスの捌け口に向けて、あたしは暇な片手を振り上げた。

「……ッ！！」

視界の隅でそれを捉えていた桜の手が何かを握っていた。何だ、それは。どこから出したのか、そんなことを考える暇も無く、それはあたしの腹に勢いをつけて食い込み――

「がつ！！」

激痛。思わず桜の襟を掴んでいた手を離してしまう。桜はその隙をついて、あたしから距離をとった。ぐらりと揺らいだ上半身を支えるため、あたしは地面に触れる両足に力を入れる。

何だ、何が起きた。

痛む腹を押さえながら、殴ったのであろう桜を睨んだ。

彼の手に握られていたのは、小ぶりなハンマーだった。

「な……」

「……はっ！？あ、え、あの、これは」

荒く呼吸をしていた桜が、我に返って慌しく言葉を探す。生命の危機に瀕して、咄嗟に取り出したハンマーがあたしの腹を殴った――ということでもいいのだろうか。彼の慌て方を見る限り、故意では無さそうだ。演技だというなら話は別だが、桜の究極と言ってい

いびりりが火事場の馬鹿力を引き出したと考えれば辻褃は合う。

まあいい。これで彼に『ハンマーで殴られる痛み』を与えることが出来る。

武器を持たないあたしにとって、この痛みはありがたいものだった。

だんだんと痛みがひいてきた。痣にはなっているだろうが、切り傷よりはマシだ。切り傷はそれこそ大ダメージを与えるチャンスが増えるけれども、その分体力が削られるから。

「…ひやは、ひやはははははは」

「え、あの、猫娘（仮）さん…？」

「細波六月」
なみなみむつき

「さざなみ…さん？」

「よつくもやってくれたなあこのチェリーブロッサムめええええええ！…！」

彼は自業自得という言葉を知っているのだろうか。目には目を、歯には歯を、でも可。

右の利き足で強く地面を蹴る。あたしの脚力では桜とあたしの間は半歩ほどで縮まった。一瞬で目前に迫ったあたしに、彼は目を見開いた。その瞳は驚愕と恐怖が混じったような色で濡れている。

拳は必要ない。触れるだけで能力を行使することが可能なあたしは、右手を彼の腕へ向かわせた。怯んだ桜には叫ぶ暇も無ければ、逃げる暇も無い——はずだった。

ドスッ、と痛々しい音がして、やはりあたしの痛覚が泣き叫んだ。

桜の肩へ伸びた右手は、彼に触れる前に一瞬停止した。その隙を利用し、また桜に距離を取られる。

さっきのは、見えていた。

恐ろしい反射神経だ、と感嘆しよう。――桜は、ハンマーをあたしの肩に振り下ろしたのだった。

「…うあ、ああ」

またやってしまった、と言いたげな呻き声が桜から漏れる。呻きたいのはこっちだ。二発目だからと言って、ハンマーに殴られる痛み慣れるわけでもない。むしろ倍増したかのように錯覚さえする。

「このッ…！」

ハンマー二発分のダメージを受けたあたしの身体には今、ハンマー二発分のダメージを与えるだけのエネルギーが貯蓄されている。一気に放出させることが出来れば、当たり前所にもよるが桜のような小柄な人間は気絶させることが可能になった。

だが、それが果たして出来るか。二回目の火事場の馬鹿力が、偶然にしては出来すぎている。

彼がそういう人間なのかはわからないが、無鉄砲に突っ込んでもまたハンマーで殴られるのがオチだろう。

あたしは苦虫を思いつきり噛み潰して、飲み込んでやった。エネルギーと一緒に、ストレスも溜め込んだあたしの身体に、ぐちゃぐちゃの苦虫は大分効いた。

火事場の馬鹿力は、窮地に立たされたときに出るものだと言っている。

なら、その窮地を崩してやろうじゃないか。

「うぐ…っ、こっ、来ないでください!!」

ハンマーをあたしに見せつけるようにして桜は言うが、気にせずあたしは無表情でじりじりと詰め寄った。二回もハンマーで殴っているのだから脅しにくらいなるだろうと思ったのだろうが、あたし相手になるわけない。あたしが怖いのはストレス、それだけだ。……まあ、嘘だけだ。

さっきまでとは違う、焦らすように近づくあたしに、桜の火事場の馬鹿力は完全に出るタイミングを見失ったらしい。飛びかかって来ないしハンマーを振り回したりもしない。それでもあたしは油断はせずに、ゆっくりと確実に距離を詰める。直線距離にして大体5メートル。

桜は舐るような不穏な圧力に、元々引きつっていた顔をさらに引きつらせた。ここからでも握ったハンマーに力が入っているのがわかる。

そろそろか、とあたしが思った、その瞬間だった。

「わああああああッ!!!!」

桜の悲鳴と、あたしと桜の間にレンガの壁がそり立ったのはほぼ同時だった。

「なっ!？」

あたしの行く手を阻むその壁は、それこそ幅は広くない。だが、あたしの思考を中断させるのには十分すぎた。なお続く桜の絶叫が

徐々に遠くなっていくのに気づいて、慌てて壁を潜り抜けて彼を追う。

「わあああああああああ、あッ！！？」

「誰が逃がすか！」

やはりすぐ追いつけたあたしは、今度はかの壁のごとく桜の前に立ちふさがってやった。彼は怯えた表情をしていたが、手に持ったそれは凶器ではない。しかも桜は立ち止まらず、半ば発狂したように絶叫してハンマーを振りかぶってきた。

「あああああああああ！！！」

「っ！」

横殴りに迫ってきたそれは、どう避けるか考えることすらさせてくれないくらい、豪速だった。さっきの壁といい何といい、何なんだこいつは。

避けきれないと悟ったあたしは、作戦を変更して手の平でそれを受け止めることにした。もちろんそれだけでは手の骨が砕けて終わるだろうが、あたしの能力で相殺すれば受け止められるはずだ。

ぱんっ、と乾いた音がして、あたしは右手から伝わる鉄の冷たい感触を噛み締める。上手くいったみたいだ。桜がぼかんと呆気にとられている。あたしはもう一発分残ったエネルギーを叩き込もうと、ハンマーを押さえたまま桜の腹に左手を押し付けた。

思いのほか強くその手は彼の腹にめり込んだ。そしてそのまま、

「うぐっ！！！」

放出してやる。

小柄な桜の身体はいとも簡単に吹き飛ばされ、彼は公園の土の上に叩きつけられる。コンクリートよりは受ける衝撃は小さいはずだが、それでも桜は痛々しく呻いた。

「――さて」

あたしはそう小さく言って、倒れる彼に歩み寄った。

*

「こんにちは。細波六月さん、だよな？」

長身の美青年と、あたしは対峙していた。場所はいつもの大公園。黒髪の上のシルバーのヘアピンが日光を反射して、あたしの目を眩ませにかかる。

「…何の用」

「いや、この間光谷桜っていうレベル2の能力者がここで暴行にあつたって聞いて。その犯人が君だって聞いて、さ」

何だあいつ、レベル2だったのか。結局桜の能力が何だったのかはわからないままになっていた。まあ今となっては聞いてもどうにもならないし、あたしは心底どうでもいい。

「あんたは風紀委員か何か？」
ジャッジメント

「いいや」

黒髪は即答した。あたしは目を細める。

「…じゃあ何」

「ええ？俺が君に会いたかった理由なんて聞くほどのことじゃないよ。…ただ、ダメージカウンター衝撃貯蓄をボッコボコにしてみたくてさ」

桜といい、こいつといい、——あたしといい。

この街はイカれてしまっている。

【サンプル】 細波六月VS光谷桜（後書き）

（そんな街で、これからどんなことが起こるのだろうか？）

ボッコボコ宣言の彼と細波さんの話は書きません。多分。

【サンプル】とある小路の犬気支配（前書き）

オウニンポヤ様より、サンプル小説となります。

「サンプル」とある小路の大気支配

動脈より枝分かれした毛細血管によって人体の隅々まで血液が運ばれるのに似て、大通りより無数に別れた小路を通り生徒たちはここ、学園都市の各地へとその身を運んでゆく。

これはとある小路で起きたこと。

とある小路の大気支配エアリアル

> i 3 3 4 9 3 — 2 1 6 1 <

夜、人通りが絶えた裏通り。月の光は聳え立つビルに遮られ、それに代わる街灯は疎らにあるのみ。影の黒さは幾重にも重ねられた罪の数。そこは正しく悪意が支配する空間である。

寮への近道なのであろうか、地へ届かんばかりに長い鮮やかな茶色い髪を揺らし、その少女は暗い小路を歩んでいた。常盤台中学の制服を纏ったその少女は盲いているのか、神と同じ色をした瞳に光はなく、左手に握られた白杖を振り行く手を探っている。

少女の前方に足音、三人分のそれが小路に響く。立ち止まった少女の行く手を塞ぐように足音は動き、そして指呼の距離で停止した。

足音の持ち主は、その顔を獲物を見つけ出した肉食獣のような笑みで歪めていた。彼らはこの小路を本拠として様々な悪事を為す不良少年の集団、いわゆる武装無能力者集団である。スキルアウト

「おいおい姉ちゃん、こんな夜道の一人歩きはあぶねえぜ。それとも誘ってんのかあ。」

彼女の正面、リーダー格であろうか、三人の中央に位置する金髪の男が下卑た笑いと共に少女へと口を開く。

続けて金髪の右手側より、左耳にピアスをつけた男がニヤニヤと笑みを浮かべながら声を放つ。

「慌てて帰るにやまだ早えよ。寄り道ぐれえいいだろお。」

少女は男たちが漂わせている危険な雰囲気には怯えているのか、その場より動かないでいる。

「楽しいトコ知ってんだよ。遊びに行こうぜえ。」

黙り込んだ少女の姿は嗜虐心をそそるものであったのか、残る一人である丸顔の男は楽しげな顔でそう話しかけた。

少女が動きを見せたのはその時であった。軽い溜息と共に肩をすくませ、そして左手の白杖を地面に線を引くように軽く振る。

刹那、三人は何か足元を打ち払われ、その身を前方へと半回転させて倒れこむ。慌てて立ち上がろうとするが、彼らにできたことは驚愕の声を上げることぐらいであった。動かせるのは僅かに首のみ、彼らの腕が、足が、胴が、何かにより地面へと押さえつけられ微動だに出来ない。

「てめえ、何しやがッ!？」

得体の知れぬ戒めより逃れようと身を震わせつつ少女へと放たれ

た金髪の罵声は、延髄に何らかの衝撃を受けたのか、頭部を跳ね上げさせられたことで途切れ、そこから続くことはなかった。両側の二人も失神した金髪と同じように一瞬、頭をもたげたかと思うと意識を刈り取られた。

眼前の男たちが突如這いつくばり気を失う、という異常な事態が起こったというのに、少女が驚いた様子はない。それどころか、何の関心も持たぬかのように、この場を立ち去ろうと再び歩み始めた。

三人の横を抜けて進み続ける少女の後方より、軽い、踏み台より跳び下り着地したような足音が小路に木霊した。その音を聞き取った少女が振り返ると、路面に伸びた男たちの向こう側、そこに少女と同じく常盤台中学の制服に身を包み、黒髪をツインテールに纏めた女の子がいた。

「ジャッジメント風紀委員ですの！暴行の容疑で・・・と・・・これは・・・。」

背筋を伸ばし、袖に留めた腕章を示しつつ凜とした声で放たれた女の子の言葉は、次第に尻すばみになってゆき、全てが発せられることはなかった。

さもあるう。三人連れのアンチスキルが少女へと絡んでいる場面を監視モニターで確認し、現場の裏路地へと駆けつけてみれば、当の男たちは吐き捨てられたガムのように路面にへばり付いていたのだから。その無様な姿を目にすれば張った気も抜けよう、というものだ。

思わず脱力してしまったとは言え、その女の子もジャッジメント風紀委員として多くの経験を積んだ者、すぐに立ち直ると手際よく倒れている男たちに手錠を掛け拘束していく。

「あらー？そこにいるのは黒にゃんかしらー？」

少女が女の子へと話しかける。この二人は面識が有るようだった。

「風祭先輩！？・・・犬猫ではありませんのでその呼び方は止めていただけませんか？」

風紀委員の女の子、白井黒子は不良男子に絡まれていた少女が知人であったことに驚いた様子を見せた。ついで白井は軽く眉をよせて話し掛けてきた少女、風祭涼が使う呼び名が気に入らないらしく、使わないよう求める。

そしてはぐらかされる。

「えー？黒にゃんは黒にゃんでしょー？」

そのような風祭の反応に慣れているのか、白井は本題へと話を進めてゆく。

「それで、これはどういう状況ですか？」

「何にもやってないよー？この人たちが勝手に転んで気を失っただけだよー？」

「ウソですわね。」

風祭の返答を白井は一刀両断に切り捨てる。「状況」を問うているのに「何もやっていない」と答える時点で、「私は何かをやりました」と言っているようなものだ。

そして、風祭にはその「何か」を可能にするだけの能力を持っていた。

「なっ！？もしかして聞く耳なしー？」

そう言う風祭を見る白井の目は、「好き勝手能力を使わずに風紀
委員長を待て、といつも言っているじゃないですか！」と、雄弁に語
っていた。

「<大気支配>たる先輩の能力なら不良の二人や三人、気絶させる
ことぐらい簡単ですの。」

「<大気支配>、それは学園都市最強の能力者たち（LEVEL5）
の一人、空力操作系能力者の頂点に立つ者へと授けられた尊称であ
る。この少女、風祭涼は大気の王者として君臨する者であった。」

「あはは・・・、じゃさよならー？」

これから先に予想される面倒を回避するべく逃げる宣言をする風
祭。それを止めようと白井は空間移動の演算を開始するが、一歩遅
かった。

風祭の姿が一瞬、歪んだかと思うと溶けるように消失していった。

「じゃあねー？バイバーイー？」

虚空から姿なき風祭の声が小路に響く。残された白井の顔には、
「次はお説教だけでは済ましませんの！」という内心のセリフがあ
りありと刻まれていた。

【サンプル】とある小路の犬気支配（後書き）

オウニンポヤ様、ありがとうございました。

感想など、お待ちしております。

【サンプル】とある月夜の超進化論（前書き）

ユーシン様より、サンプル小説です。

「サンプル」とある月夜の超進化論

学園都市の十八学区にはトップクラスの教育機関意外にも様々な施設がある。例えば植物園。といってもその施設自体が大学の持ち物なのだが。

明星大学付属植物遺伝機能研究所、という書類上の堅苦しい名前ではお客がこないのに、園長の独断で勝手な看板が取り付けられている。もちろん研究施設といっても、観光を主軸になるよう設計されているので外装も内装も見栄えの点では問題ない。

ガラスのドームから見える生い茂った草木を見ればここが何をする所かはある程度推測できる。

こういった管理が難しい場所には専門のスタッフや業者を必要とするが、ここは違う。

すべてが学生達にまかされているのだ。それは園長でも例外ではない。茨野アゲハ^{いはの}という少女は十八歳にしてここの管理を任されている園長だ。

彼女は学生でありながら授業を受けることもなく一日ほとんどの時間を徘徊に使っていた。

入り口から入ってすぐにあるカフェから眺めることのできる花畑には様々な色の花が咲き誇り、彼女はちょうど今そこで水やりをしている。

木の幹のような髪色をした茨野の顔立ちは綺麗に整っているが、そこに血の気のない肌の色や生気の無い目つきが加わって、周囲には服屋に並ぶマネキンのような無機質で冷たい印象を与えており、身に着けている真っ黒なワンピースはもはや着せられているように見えてしまうほどだ。酷くいえば、ガラス越しのショールームでじっ

としても誰も気に留めないかもしれない。

生命力が溢れでるこの空間と対称的な茨野に、初めて来た人間は不気味さを感じ、そこに近寄ろうとしない。

だが、慣れればそんなこともないと言わんばかりに一人の少年が、彼女の背中に声をかけた。

「植物園の年間フリーパスって売れるんですか？」

赤黒いロツプイヤーのような髪で、白いカッターに黒いズボンの無個性な制服を着た少年は、草花を見に着たとは思えない、それでいてデリカシーのない台詞を平然と口に出しつつ問題のカードに目をやっている。

「あそこのカフェが見えるだろう？ 昼食や放課後にここで時間をつぶしにくる学生用だ」

ゆっくりと振り返り、茨野が真っ白な指を向けた先にはたくさんのパラソルと椅子が並べられている。賑やかというほどではないがそれなりに席は埋まっているようだ。

「最近顔見てなかったんで、ちょっと心配だったんですけど」

「わざわざ訪ねてくれたのか？ 心配も何も毎日同じことの繰り返しだ。巡回、食事、睡眠、それだけだ」

「あんまり充実して聞こえないんでやっぱり心配です。それで楽しいですか先輩は？」

「結論から言えば、割とな。お前が来てくれるだけで今日は十分

充実しているよ」

薄く笑みを浮かべる少女の言葉に、表情のなかった顔を少し赤くした少年は気恥ずかしさを誤魔化すように話題を変える。

「そういえば、オレが来たときはいつつもここにいるような気がするんですけど」

「この花には色々と思い入れがあるんだよ。　そうだなあ、お前はパンジーの花言葉を知っているか？」

「さあ？　ソーユータイプの豆知識には全然興味ないんで」

「心の平和、だそうだ」

茨野の目線は少年の方でなく、ネックレスのように首に下げている植物のデザインをあしらった銀の鍵の方だった。

その鍵をみつめる彼女は、どこか笑っているようにも悲しんでいるようにも見える。

「どっかで聞いたような気がするような、しないような」

「私の親友が好きだった言葉だ。　お前の方がよく聞いてそうだが」

「あんまり昔を振り返るのは好きじゃないんですよね」

少年は嫌そうな顔をしつつも彼女の言う親友と同じくであろう人物を思い浮かべてしまう。

会話が途切れたのが気まずいのか、「まあ、元気ならいいんです。

「じゃあ仕事があるんで行きますね」と、少年はそそくさ出口を目指して歩く。

とても短い会話だが、彼も彼女も特に不服そうな表情はない。少年はいつもせわしなく動き回っているし、少女にはいつでも時間がある。

簡単な見送りを終えた茨野は来た道をゆっくりと戻り、一番奥の自室を目指し歩を進め始めた。

茨野の自室は観覧できる区画と変わらない広さを誇る。外壁には大量のツタが張り付いて、そのいくつかは秋でもないのに紅葉しているのだが、それは試験的に造り出した植物を混ぜて観察するためだ。部屋の中央にある玉座に似せた岩のようなものと、そこに座らされたマネキンのように、じっと動かない少女は、屋根のガラス越しに差し込む薄い月明かりに照らされている。

「久しぶりの客人だな」

貯水用に外壁の真下に設置された細い円の水路が揺れを感知し進入者の存在を茨野に知らせる。

そしてすぐにボンツという音とともに、防火扉のような分厚い入り口が焼き切られて内に倒れた。

その奥から十人程度の物騒なモノを装備した覆面達が一斉に茨野を取り囲む。部屋の向こうからはキーンという耳障りなかん高い音が

響いてくる。

「茨野アゲハ。抵抗せずに後ろの扉を開け」

リーダーらしき男が指をさす先には植物園という光景からはどこか浮いている鉄の扉がある。

「対能力者用のジャミングか。用意がいいな。どこの部隊だ？」

「その状態ではろくに動けないだろう。お前はおとなしく開錠の方法を提示するだけでいい」

「その後で殺す、か……なかなか無慈悲な連中だ。そうやって何人殺してきたんだろうな」

溜息を吐きながらくだらなさそうにしている茨野の顔からは恐怖を感じ取れない。

「そうか、こちら側の危機感が伝わっていないらしいな。……三秒以内に答えろ」

男は不格好な機関銃の先を茨野に向ける。

「……三！二！いつ！……ちい？」

男の叫びはそこで途絶えた。なぜなら、彼は足下から生えた槍のような大木の根に腹部を貫かれたからだ。

男の頭は垂れ下がり、槍のようなものには赤黒い液体が流れている。

「結論から言えば、必要ない。それと、書類も見ずに能力者とい

うだけで判断したのは迂闊すぎるな」

一瞬状況を遅れて認識した他の覆面達は合図もなく一斉に銃の引き金を引く。

ダンッダンッという大量の発泡音が部屋中に響き渡る。

結果、一つも弾も彼女には届かない。阻んだのは先ほど男を貫いた槍のようなもので茨野が創り出した特別な植物だ。

茨野は背中に植えつけられた接続装置にある九つのうち二つのスロットをその植物に使用している。

一つは地面に潜らせ、もう一つは一度地面まで下がってから根のように別れ、槍のスカートがUの字状に彼女の全身を覆っている。

「ややこしい過程を省くと、私は創る能力者だ。つまり振るうすべては私が体を動かすことと大差ない」

そこで言葉を切る。そして強く、静かにこう言った。

「お前達の相手をしているのは特殊な武器を持った子供ではない。真正正銘の化け物だ」

それが合図だったのか、一斉に地中から槍が飛び出し、反応が遅れた者は先ほどと同じ結果を招いた。

何人かが転がるように回避して発泡を続けても茨野アゲハは座ったまま動かない。

編みこんだようになっていく太い根の隙間を狙うには距離があり過ぎるし、この状況で足を止めることは自殺行為だ。

とっさに、部隊の一人が腰に着けていた缶ジュースぐらいの手榴弾からピンを引き抜き、彼女目掛けて投げつけた。

たとえ彼女自身にダメージが入らなくても植物は焼け、間接的に戦闘手段を失うだろうと判断したからだ。

小型といえ、それは人一人をバラバラにするには十分な威力である。爆発はドガンツという炸裂音とともに周囲を焼き、彼女のいる玉座を挟り飛ばし、周囲に大量の土煙を巻き上げた。

二人の男が彼女の死を確認するため近づくとか何か細い蛇のようなものが動くのが見えたが、その正体が分かった時には男の一人の体中に鞭のようなものが撒き付いていた。

バキバキッと肋骨が折られた音と共にゆっくりと立ち上がった茨野は頑丈な装甲さえ失ったものの体には傷一つない。

ぐらつと揺らめく彼女が袖を振るうと、中から飛び出す触手がもう一人の男の銃を握り潰す。

男は唐突な反撃に硬直してしまった。そして次の行動をとるよりも速く彼女の周囲に針山が築かれた。

残る三人のうち足を止めていた二人もすでに串刺しになっている。

「あと一人か」

その一人は茨野の視界には入っていないが、彼女は別の方法で索敵を開始する。

地中に潜った根には貫く意外にもう一つ役目がある。それは振動を感知することだ。

一本一本が彼女の意味で動かせるので、彼女からすれば簡単な作業だ。

「うおおおおおッ！！」

彼女は根で感知するよりも先に背後から絞り上げた絶叫を耳にした。

弾切れしたのか、迫る男は刺殺用と分かる異様なナイフを握っている。

それでも茨野は振り返らず、そこに立ち尽くす。

そして男は見た。彼女のばつくり開いて露出している背中部分、正確には中心の接続装置から急速に柿色の蕾が生まれた光景を。

今までの根や蔓と違い、具体的な使用方法のわからない武器に、男は思わず足を止めてしまう。

そして男の次の判断よりも先に蕾の茎が急激な細胞分裂を行い、花は男の目の前で開花した。

普通の花なら何の意味も持たないだろう。だがその花は違う。大きさは茨野の全身よりも二回り大きいなら全く違う意味になる。

男はその光景を見て、花が開くというよりもっと的確な表現があると素直に思った。

竜の頭が大きく口を開けている。実際には見たことなど無いがおそらくこんなものなのだろうと。

花卉一枚はまるで爬虫類の鱗のようで、内側には大きな刃が三重にびっしりと備わっている。

ガチンツと竜の口が閉じられたのを最後に辺りは静寂な夜に戻った。

砕かれて機材がむき出しになった玉座に腰掛ける茨野は首だけになった竜を眺めている。

あれこそが自身の能力名でもある『テンペスト』だ。破壊力は凄まじいものの、キャパシティーは馬鹿にならない。

百のエネルギーがあるなら、発生だけで五十、十分間の起動で十程度だろうか。あまり割に合わない。

この玉座のようなものは植物園全体とのパイプラインであり繋がったままなら百以上も余裕だがそれでは他がもたないので結局すぐに使い捨てる。

（まあ、キャパの高さが急速な枯化を生み出すから問題はないが、金属は溶かせないからな）

もうすでに水分を失い変色し始めている『テンペスト』は辺りの死体を丸飲みにし、内容物を溶かし栄養にしたものの、後ですぐ土にかえっていくだろう。

（いつからだろうか。何人殺したかも憶えていない）

静まりかえった中で、一人彼女は先ほど男を侮辱した言葉を思い出す。

人を殺すことは食物連鎖と変わらないと認識している、というよりそう考えることにした。勿論、いつしか自分の番が来ることも承知している。

彼女は親友と約束したのだ。ここの扉を守ってくれと頼まれ、自分はこの植物園という居場所をもらった。

だが彼女はその中身を知らないし、扉を開けたことも無い。そして今日もまた繰り返された殺戮も当初からはあまりにも想定外の事だった。

それでもいい、たとえ親友がいなくなろうと役目を降りる気はない。

ピオラという花はパンジーと誤解されるらしく、正確には別種で花の大きさが違うらしい。

それを誤解した親友はその花言葉の一つをパンジーとともに彼女に送ったのだ。

『信頼』。

（お前は私に、生きる理由をくれた。たとえこの奥にあるのがどんなにくだらないモノでも、お前との約束は私のすべてだ）

過去に円盤を埋め込んだ時から続いた悲惨な実験の毎日から、救い上げてくれた彼の手のぬくもりと、暖かい言葉の一つ一つを思い返しながら、彼女は瞳を閉じた。

【サンプル】とある月夜の超進化論（後書き）

ユーシン様、ありがとうございました。
感想お待ちしております。

オウニンボヤ様より。

序章ということ、よろしくおねがいます。

地に在る限り昼より夜へと時が進む。この不変の法則は全てを支配するもの。必ず訪れる夜は闇を含み、それは光を塗り潰し、一色へと染めてゆく。

ここ、学園都市もその例外とはならない。漆黒に沈む街を科学の光でどれほど明るく照らそうとも、全ての闇を破り捨てることなど出来はしない。

そう、このビルの屋上のように、かしこの建物の地下のように、闇は確かに存在する。

> i 3 4 5 5 0 — 2 1 6 1 <

1・Side | Mikoto Misaka

とある街角、そこに在るのは白という差し障りのない色を纏い、およそ特徴の無い形を取る、「無個性」の一言で表現可能な建築物。それが面する通りはもう深夜といってよいこの時間帯、人が通る気配などはない。白い建物と道を挟んだ対面のビル、その脇に設けられた街灯が、通る者が絶えた道をビルの下半分と共に明るく、しかし虚しく照らすのみ。

視点を移し、ビルの上方より下方を望む。黒々とした中空を四角に切り取るその空間の境界線、屋上の縁に足を置き佇む少女がいた。短めの茶髪を後ろで括り、黒いＴシャツとクリーム色のショートパンツという活動的な装いの少女。自らが立つビルの道向かい、白い建物を見据える少女の名は、御坂美琴という。

御坂は酷く疲れていた。さもあるう。昼夜問わず、休息も、食事
も碌に摂ることなく動き続けていたのだから。普段の健康的で活発
なイメージとは対照的に、今、ここにいる御坂は疲れ淀んだ雰囲気
を纏っていた。

しかし、御坂の瞳は力強い光を放っている。それは内に秘めた固
い意志であろうか、それとも強い怒りであろうか。

「あと二ヶ所。」

ポツリ、と御坂が呟く。それはとある計画に關与し、かつ未だ御
坂の襲撃を免れている施設の数。そのうちのひとつが御坂の視線の
先に在る建物、名をSプロセッサ社病理解析研究所という。

つい、と黒いキャップを握った手をかざし、御坂はそれを目深に
被る。その鍰の下、影に覆われたその表情は先程よりも厳しさを増
している。

自らに言い聞かせるように再び呟く。

「今夜中にすべてを終わらせる。」

意を決したのか、御坂は虚空へと足を踏み出す。眼下の標的を破
壊するべく。
けんきゅうじょ

それは『絶対能力進化』計画を止める為に、我が身の分身達を救
う為に。
イカレた
シスターズ

とある外道の断頭奔流（前書き）

asuta様よりお預かりしました。アポリオン様のキャラクターとのコラボになります。

とある外道の断頭奔流

「ぜえ．．．はあ．．．」

少女と男は逃げていた。

少女は、学園都市の暗部と呼ばれる組織に所属していた高位の能力者である。

男の方も、統括理事長直属部隊『獵犬部隊』に所属する元『警備員』である。

そんな二人は出会い、恋に落ちた。愛し合っているが故にお互いの死が怖かった。結ばれたいと、一緒にいたいと思っていたとしても、学園都市に、統括理事長アレクスター・クロウリーによって自分達は使い捨てられるのみである。そんな自分達の運命から逃れるために、二人は学園都市を捨てる覚悟をした。愛の逃避行。二人の前には希望しかなかった。なのに．．．．．

「何なんだよ！？アレは！？」

男は、少女の手を引き逃げながら叫ぶ。意味が分からなかった。何であんなモノがよりにもよって追いかけてくる？

男の口元だけが見える般若の面で覆い、ビジネススーツに身を包んだ、真つ黒い長髪を靡かせた死神のような男。それが、西洋刀を引き吊りながら追いかけてくるのだ。一目で分かる。アレは確実に危険だ。剣なんて持っているのだから、危険というのも当たり前かもしれない。だが、それ以上に纏っている雰囲気が危険過ぎた。暗部に所属する人間なら誰でも分かる、人を簡単に、躊躇いもなく殺せる人間の、独特な殺意。追いかけてくる死神のような男はそれを持っているのだ。

あれに追いつかれてはいけない。それだけを考えながら、男は少女の手を引いて逃げる。だが、運命とは無情かな。路地裏に逃げた二人は、死神のような男にあえなく追い詰められた。死神は、迫る。命を刈り取る武器を、カタカタという音を立てながら引きづって、

ゆらりゆらりと、陽炎のように。

男は少女を自分の後ろに隠しつつも、

「く、くるなあ――！」

恐怖のあまり銃を構える。『スターマイン星火花』と呼ばれる学園都市製のハンドガン。まだ暗部でしか出回っていない、未だ実験段階の、詳しい原理が男には全く理解不能な発明品。分かることは只一つ。これは、人を一発で血と肉の飛沫に変えられるということだ。

「ちよつとでも動いてみる――！こ、こ、こいつをおまえにぶち込むぞ――」

男は銃を構えて、目の前の死神に脅しをかける。だが、止まらない。死神は、一心不乱に、ただただ自分たちに迫ってくる。

「ひい！？」

男は、自分の想い人の前だということ等すっかり忘れ、情けない悲鳴を上げながら引き金を引いた。

バンッ――！という乾いた音が鳴り響く。銃弾は、真っ直ぐに死神のような男へと向かう。銃弾は死神の命を摘み取りにいく。しかし、
「フン――！」

死神は、それを蚊でもはたき落とすかのように、軽く叩き斬った。まるで鈍器を叩きつけるかのようなその動きは、決して剣術などと言ったスマートなものではなかった。言うならばそれは暴行。それは人殺し。乱暴で粗暴な、狂った殺人者の挙動であった。そんなことを考える間もなく、

「イライラさせるなあ――！」

男に刃が叩き付けられた。一閃する白刃は、男の右腕を斬り落とす。
「ギヤアアア――！」

男は痛みあまりにうずくまり、絶叫した。男は思った。このままでは確実に殺されると。その予想通り、死神は男にとどめを刺さんとして西洋刀を振り上げた。だが、その瞬間

「お前、何のつもりだ？」

死神は不意に動きを止め、尋ねた。今まで男の後ろに隠れていただ

けだった少女が両手を広げ立ちはだった。

「モヨコー!」

男は少女の名前を叫んだ。モヨコと呼ばれた少女は男の方を振り返って、

「平気だよ、しげる。アナタにだけは手出しさせないから」

と言って微笑んだ。

「手出しさせないって．．．やめろよ．．．お前、戦闘系の能力者じゃないだろ．．．」

男、四季崎樹は、少女、倉科モヨコの死という未来がはつきり見えてしまい弱弱しく呟く。倉科モヨコの能力はレベル4記憶探求^{メモリートラベル}。相手の体の一部に触れ、記憶を選択して擬似体験する能力である。希少性が高い能力ながらも、戦闘能力は全くない。暗部組織に居た頃も、回される任務の殆どが諜報の類であった。それに相対するビジネススーツの男。何かの能力を使っていたのか、元々の身体能力かは不明だが、少なくとも銃弾よりは素早く動いていた。刀なんて持つてることからも分かる通り、明らかに戦闘系である。勝負は初めから明白であった。だが、

「大丈夫。絶対大丈夫だから」

少女はそれでも決して逃げようとはしない。恐怖に震えながらも、大切な人の為に。

「さっさとどいてくれないか？俺は可愛い女の子の顔面を破壊したくないんだ」

西洋刀を、モヨコののど元に突きつけながら男は吐き捨てた。だが、「やってもいい。けど、しげるには指一本触れさせない。死んだって、アナタを呪い殺してでも止めるから」

モヨコはそう言って死神の男を、凍てつくような眼光で睨む。その瞳には恐怖が映りながらも、それでいて力強かった。本気で呪い殺す気さえ伺えた。それを悟ると死神は逆上、

「アああはははは!」

．．．するどころか笑い出した。その光景に少女は呆然とし、男は

痛みさえ忘れそうなほど驚いた。

「ハア．．．面倒な」

打って変わり、死神は億劫そうに首をコキコキと鳴らした。いよいよもってモヨコは思考がついていかなかった。地面に蹲る樹も同じだ。

「男はともかくお前はいいや。助けてやろう」

死神は面を食らっているモヨコにそう言った。

「私だけって．．．しげるはどうするの!？」

モヨコの言葉に、

「知らんな。どのみち俺が殺さなくても別の誰かが殺るだろうよ」
素っ気なく死神は返す。

「蚊がいるとイライラして殺したくなる。つまりはそういうことだ」
非人道的な、それすらも超えて化物じみた考えだった。そう語った死神は、

「．．．．．行つてよし」

と言ってモヨコと樹に対して西洋刀を上段で構える。その行動は、
「三度は言わん。行つてよし」

と、自分に伝えているのだとモヨコは思った。だが、それを分かっていたながら少女は、

「私はここを絶対に退かない」

と力強くそう言った。大切な人を見捨てるという選択肢なんて、考えられるワケがなかった。死神はモヨコの決意を受け取ると、はあ．．．と溜め息を吐き、剣を振り下ろそうとした。その時、

「ま．．．待て．．．．．」

地面に崩れ落ちていた樹が、斬られた腕を押さえながら、立ち上がった。その様子に、死神は動きを止め、少女は目を見開き驚愕する。
「なんだ？」

死神は尋ねた。すると樹は、

「お前．．．．．モヨコがもしここで逃げれば．．．．．絶対手出ししないんだな？」

と問うた。

「見ていてイライラするバカカップルならともかく、流石に殺せんわ」
死神はあっさりと答えた。

「それに、さつきも言ったが、可愛い子は斬りたくない」

と、付け足す。死神の口調は飄々としていたが、嘘は無さそうだった。樹はそれを聞くと、

「そうか．．．．．良かった．．．．．」

そう言っただけで安堵の表情を浮かべた。

「何．．．．．言ってるの？」

モヨコはその表情を見るなり、樹にそう尋ねていた。

「まさか、私だけ助けて自分は死ぬとか、そんなこと言わないよね？」

嘘だと、そんなことはないと言っただけでよかった。しかし、少女の思いは簡単に打ち砕かれる。

「そうだ」

樹はたった一言そう言った。何で？どうして？そんなモヨコの気持ちを察し、

「俺はモヨコに生きていて欲しい。そういう選択をして欲しい」

と自分の思いを伝えた。好意という気持ちから発生する、自己犠牲に過ぎないその気持ちを。

「もし俺と一緒に死ぬなんて言うなら、俺はモヨコ、君を嫌いになる」

その思いはあまりにも強く、少女にとって残酷な一言に結びついた。モヨコは絶望した。樹の嫌いになるという一言はポーズではなかった。本気で、死ぬその瞬間に自分との愛を忘れると、冷た過ぎる表情は伝えていた。死神から逃げきって二人とも生きるなんて選択肢は最初から消え失せている。つまり選択肢は二人とも死ぬか、自分だけ生きるか。樹と心中を考えれば、樹は自分を嫌いなまま死んでしまう。かと言って、樹を見捨て逃げる選択なんて出来ない。少女は、死神がしびれを切らしかけたその時、選択した。

「グアアアアア！！」

後方から響く樹の断末魔を振り払いながら、モヨコは必死に走った。少女は、死神から逃げるという選択肢を取った。樹の気持ちに答えたかったのかもしれない。自分を好きなまま、樹に死んでもらいたかったのかもしれない。ただ単に、最後の最後で死神が怖くなったのかもしれない。兎に角少女は、自分だけが生きる道を選んだ。少女は走って、走って、走って……そうして幻想を殺す少年の物語が始まった鉄橋で、恋という名の物語が終わってしまった少女は全てを消失して立ち尽くした。

「……なんで私には力が無いんだ」

少女は自分の無力を呪った。能力者の街学園都市。様々な能力が0～5までのレベルに分けられている。そんな街の中にいて、何故自分は戦闘系の能力者でないのか？大気の支配者と呼ばれる盲目の少女のように、引力を統べる争い嫌いの少女のように、感情の無い完全な空間移動能力者のように、最低最悪最強と呼ばれるスキルアウトの長のように、自分は何故超能力者（レベル5）ではないのか？

「……なんでしげるが死ななきゃいけないの？」

ふとした瞬間、出会った年上の男。出会った瞬間に二人は惹かれあい、最初はお互いに暗部の人間だと知らず、知ったらきつと自分を愛してくれなくなると思っていた。だが、樹は変わらずに自分を愛してくれた。自分にとって、間違いなく運命の人だったのに……

「……どうすればいいの？」

少女は誰かに答えをこうようには呟く。

「……しげるがいない世界なんて耐えられないよ」

少女は人知れず涙を流した。すると、どこからか声が聞こえた。

「死ねばいいんだよ」

と。妙に澄んだ、純白な少年の声だった。

「誰！？どこにいるの！？」

モヨコは辺りを探すが姿は見えなかった。そんなモヨコに、

「ここだよ」

と上から声をかけられた。モヨコがそちらを見上げると、ソイツはそこに存在していた。月を背に橋のアーチ部分に腰掛けたその少年。長点上機学園という、学園都市の名門校のブレザーの下に、ファーフードの真っ赤なパーカーを着た黒髪の少年だった。切れ長の瞳と妙に大人びたのである。月を背負っているその姿が似合い過ぎる程に似合い、そこはかとなない不気味さを漂わせていた。その少年は、

「√?5点」

と唐突に言い出した。少年の言葉の意味をイマイチ理解出来なかったようにできよとした表情をしていた。少年はハアと、溜め息をつき、

「君と四季崎くんの純愛ごっこに対する評価だよ」

と言った。

「ボクとしてはさ、相手の命を差し出して自分だけが生き残ろうとする、そういう人としての穢れた部分つてのを見たかったんだ。それなのに君達ときたら、お互いのことを庇いあつてさ」

さもつまらなさそうに、侮蔑を含めて少年はモヨコに語る。

「いらないんだよ、そういうの。純愛なら俄然、『君に届け』とか『花より男子』の方が上なんだから。ボクはそっちで間に合ってるんだよ」

少年の言葉は、罵詈雑言とかそういうレベルのものではなかった。モヨコが今まで生きる意味としてきた恋愛に対する全面否定である。ギリギリと齒軋りするモヨコの表情を見て少年は笑顔になり、
「さらに言っならさ、『お互いが死にそうな環境に置かれてるから駆け落ちする』？全くもって意味が分からないね。世の中にはもっ

と苦しい状況に置かれても、それでも愛し合ってる人達がいるんだ。その人達に対して、君達の行動は、侮辱に価するよ」

と、までもで一見筋の通った意見の中に侮蔑を込めて語った。

「だから√ - 5点だ。実数で表すことすら厚かましいんだよ。君達の行動はさ。ていうか、虚数で表すにしても過大評価だが。兎に角、ボクをあまりガツカリさせないで貰いたいな」

少年はそう言いながら、軽快な動きで立ち上がり、

「まったく。生体観測の為に『アンダーライン滞空回線』と携帯を無理矢理接続したっていうのに。観察対象の片方は、ポンコツを超えたジャンクときたよ」

と、肩を上げ、お手上げと言わんばかりの手振りをした。そして、少年は

「まあ、もう一方は期待以上のものを見せてくれたからこの観察は成功としておこう」

と言ってほくそ笑んだ。そんな少年の言動に、モヨコは怒りを露わにして、

「ふざけるな！！さっきからなんなの！？あなたは！？」

と叫んだ。すると少年は橋のアーチから、まるでそよ風に揺れる木の葉の如く、フワリと少女の目の前に降りてきた。風を操る能力でも持っていたのか？はたまた念動力かなにかか？兎に角少年は、少女倉科モヨコの前に相対した。そうして、

「何って、ボクはただ趣味を楽しもうとしたものの満足度が5割にしか到達しなかったから、少しガツカリしてるだけだが？」

と、至極真面目な顔で答えた。そして、モヨコが何かを言い出す前に、

「そういうことを聞いているのではなくて、ボクの名を尋ねているのなら」

と話し出す。

「ネットでのハンドルネームは『月桂冠』。裏社会での通称は『イスマン非無知者』。魔術と呼ばれる非科学世界での名はオカルトscio050。そ

して-」

少年はモヨコが、今にも噛みつきそうな獅子のように凶暴な表情になっながまつおおきみているのを楽しみながら、

「本名は永松大王。情報屋をやっている、しがない能力者だよ」

と言った。その瞬間少女のくすぶっていた怒りは臨界点に達し爆発した。モヨコは、

「ふざけるな!!」

と、激昂して情報屋を自ら名乗る少年永松大王に、拳を握りこんで殴りかかった。大王はそんな様子を他人事のように眺め微動だにしなかった。普通なら拳は、大王の頬骨を抉っていた筈だった。少女の一撃とは言えども、大王は細身で筋肉が無さそうな虚弱な体系であり、大王にとっては致命傷にも成りうる攻撃だった。しかし、
「.....っあ!!」

モヨコの方が逆に呻き声を上げていた。少女の拳は、大王ではなく彼と自分の間に突如として現れた氷の壁に阻まれたのだ。苦悶を浮かべたモヨコの表情が、壁の硬さを物語っていた。

「言い忘れてたけど、ボクは身に降りかかる外界からの干渉に対して、無意識下の防御が可能だから、そこのとこ悪しからず」

大王は人を食ったような物言いをする。少女はそんな大王を敵意を持って睨み付けた。が、

「あ.....れ.....?」

視界がどんどん大王から、下へ下へと遠ざかった。そして顔が地面にぶつかった。顔に激痛が走り、口の周りが真っ赤に染まった。そして、顔の激痛の後に、

「嫌アアアア!!」

それ以上の形容し難い痛みが襲いかかった。

足が、足が、足が-痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い-
思考の中はそれだけで埋められていった。分からなかった。いつ斬られたのだろう?

-私はいつ両足を斬られたんだ?

太股から先が切断されていた。少女はパニックになり、痛みのあまりに地面にのた打ち回った。だが、そんな状況下であろうとも情報屋の少年は至って冷ややかに、

「これも言い忘れてただけだよさ」

と、話し始める。

「ボクの本名って裏の人間にとっては殺し名と同義語だから。今決めたけど」

そう言いながら、永松は少女を見下すように嘲笑う。そして、少女が自分に対して呪い殺すような視線を向けた瞬間、
グサツ！！

と、氷の棘がモヨコの顎を貫いた。

「うん。自分の本名を殺し名にするのはもうやめよう。自己紹介が不便になる」

大王は、勝手にそう自己完結し、

「そう思うだろ？ 岩見祥吾くん？」

と自分の視線の先にいる男に同意を求めた。そこには、先ほど倉科モヨコの思い人を殺した仮面の死神が刀をぶら下げて立っていた。

「――極めてどうでもいいな」

岩見祥吾と呼ばれた死神の男はそう吐き捨てる。

「そんなことより、どうして殺した？」

岩見祥吾は尋ねる。すると、大王は祥吾の言葉にクスリと笑い、

「本当に君は人に対して『愛する』か『殺す』か『無関心』かしか行動を選べないようだね。今の言動で大体分かった」

と言って

「君はこの娘を『愛する』という選択肢を取ったワケだね」と悟ったように語った。

「そして彼女の恋人である四季崎くんには『殺す』という選択肢を取った。全く君は本当に恐ろしいよ。故に面白いけど」

大王の物言いに、

「さっさと答えろ」

と祥吾は苛立ち始める。

「ああ。そうだったね」

大王はワザとらしくそう言っ

「まあ、一言で言えばボクは合理主義でね。いらなくなったものは邪魔だから、極力排除したいのさ」

と常軌を逸した考えをさも当然のことのように語った。その発言を聞いた瞬間、死神は西洋刀を引き抜こうとした。しかし、

「む？」

西洋刀は抜けなかった。西洋刀の鰐の部分に水が巻き付いて、いくら力を入れても抜けないのだ。

「言わせて貰うが、ここでボクに刃を向けるのは不正解だよ。君はボクに聞きたいことがあるんだろう？」

彼は岩見祥吾にそう、諭すように言った。苛立ちが募り始めていた祥吾だったが、大王の言い分は的を射ていた。そのために彼はあの二人を、さしてイライラもしていないのに殺したのだから。

「なら言え。すぐ言え。今言え。お前の顔を早く破壊したいんだ」

祥吾が刀から手を外し、面倒くさそうに、だが苛立ちながら言った。

「君の中に偏在するフラストレーションを消す方法だっけか？連続殺人鬼の岩見祥吾くん？」

大王は分かりきっていながらも、敢えて尋ねた。

「岩見祥吾。君がボクのところを訪れた時は驚いたよ。全国指名手配中の有名人が学園都市に潜伏していたとは知っていたがまさかボクにあんな事を頼むとは思わなかったからね」

大王は大袈裟に手振りをしながら言った。

「まあ、君にあんな過去があれば当然かもしれないが」と大王は同情するかのよう

に語る。「お前のような奴に同情される覚えはないな」

祥吾は吐き捨てる。

「君の過去を色々と調べたり、記憶を探る能力者を雇って色々と調べたからね。そこから君のことは大抵予想出来る」

しかし、大王は語ることを止めない。

「岩見祥吾。20年前に放火魔により家族と死別。12歳の頃、とある人物と出会い西洋刀とビジネススーツと仮面の三点セットを手に入れその放火魔を殺害。それ以来、自分のフラストレーションの赴くがままに人を殺し、いつの間にもやら全国指名手配の犯罪者になつていた。大体こんな感じだよな？君の過去って」

「流石は自称『情報屋』だな」

自分の過去をさも壮大そうに語る大王に対し、祥吾は賞賛し、
「だがさつさと言え。今すぐお前の顔面を破壊したいと言っている
だろ？」

と自分の聞きたいことを答えるようにいった。

「あまり急かすな。君の聞きたいことへの『回答』だからさ」
大王はそう言つて、さらに語り続ける。

「君の人への接し方って、ボクの仮説が正しければ100%、20年前の放火が原因となつていんだよね。君が人を『愛する』のは、家族を失い愛に飢えているからだし、放火によってフラストレーションが溜まり『殺す』という選択肢を取るようになり、放火の後に全てに対して『無関心』だった名残で今でもその選択肢が存在するわけだ」

長々とした台詞を殆ど一息で言う。そして、

「だったら君のフラストレーション、消すなんてお断りだね」
と軽い調子で大王は語った。

・・・・・・・・・・イラッ。

祥吾は青筋を浮かばせる。

「君のフラストレーション、間違いなく今の君の人格形成に一役買つてるよ。だったら消してしまうなんて勿体ない」

大王は祥吾の反応を楽しみながらそう言つて

「ボクは『死神』としての君に『面白さ』を感じているんだからさ。
消すなんて有り得ないよ」

と大王は祥吾を馬鹿にしたように、嘲笑うかのように嬉しそうに語

る。祥吾のピリピリとした殺気を感じると、さらに

「言つとくけど君のフラストレーションを消せないわけじゃないから。学園都市には感情を操る能力者なんてのも沢山いるし、ボクはそついうところにもコネがあるからさ。ここ重要ね」

と明らかな侮蔑を込めて語った。その瞬間、

「もういいや。殺す」

祥吾のフラストレーションが頂点に達した。

「お前の顔面を破壊する！」

と、祥吾は宣言し、かと思えば祥吾の姿がいきなりその場から消失した。もしこの場に、他に人間がいたならば錯乱しかねなかっただろう。祥吾はいつの間にか大王の懐に入り西洋刀で大王の首をなぎにいき、その西洋刀を大王が氷柱のようなものを手に持ち、それを防いでいる状態が形成されていた。大王は氷柱の剣に罅が入っていることに冷や汗をかきながら、

「ねえ」

と祥吾に話かける。

「さつさとお前を斬りたいんだが・・・なんだ？」

と祥吾は西洋刀にさらに力を込めながら尋ねた。大王も氷柱の剣に力を込めながら、

「ボクがさつき放った『断頭奔流』^{ウォーターソウ}、いくつあったと思う？」

と聞いた。

「21だな」

祥吾は素っ気なく答える。

「ボクの『断頭奔流』、マッハ16で水を動かして放ってるんだけどさ、それをそんなにかわすなんてさ、どういうことだよ？」

大王は尋ねる。

「しかもさ、ボクは君が刀を抜けないように水でおさえてた筈なんだけどなんで君はこうして抜いてるんだよ？」

皮肉混じりの大王の言葉に祥吾は何も語らない。

「ていうか、ボクの鋼鉄より硬い氷の防御を力ずくで破った挙げ句

に、同じ硬さの氷の剣を破るなんてさ。君は一体どういう腕力をしているんだい？」

大王がそう尋ねた瞬間、

「お得意の情報網で調べれば？」

と祥吾が口を開いた。そうして、

「イライラすんだよ．．．お前を見ると」

祥吾は明らかに敵意を持って言い放つ。そして刀を一旦引いて、突きを大王に向けて放とうとするが、

「面倒な能力だ」

いきなり辺りに30cm先すら見えない程の濃霧が発生した。

「やめてくれ。岩見祥吾くん．．．．面倒だからシヨウちゃん
で良いかな？」

とどこからか、ふざけた調子の情報屋の声が響いた。しかも先ほどの場所にはいない。祥吾が辺りを探すと、

「無駄だよ。この霧の中じゃボクを探すなんて不可能だから」

と語る。尤も、大王にも祥吾の姿は見えておらず、自分の姿をさがしているのと当てずっぽうで語っているだけなのだ。

「いやあ。君の戦闘スタイル、予想通り近距離型だねえ。ボクの近距離戦闘用の裏技だけじゃ、いつかボクが出てくるし、自動演算による防御も通じそうにない。よって逃げさせて貰うよ」

霧の中から語りかける大王に、

「死ぬがいい」

と祥吾は言った。

「そう言っな。ボクだって君と戦いながら、観察を楽しみたいと思ってるけど」

霧から聞こえる祥吾の声はそう語り、

「今は他にも楽しみがある。ここでボクが死ぬのもキミが死ぬのも惜しいからさ」

と言って、大王は笑った。霧の所為で全く分らないが、確実に笑ったと祥吾は思った。その瞬間霧が晴れ薄気味の悪い情報屋の少年

はそこから、最初からそこにはいなかったかのように、忽然と姿を消した。それを確認すると祥吾は沸々と湧き上がる憤怒のままに、
「チツ．．．次に会った時は今度こそ．．．お前の顔面を破壊する」
夜の学園都市の中でそう誓った。

「予想通り、いや予想以上だ」

大王は夜の学園都市をピーターパンのように空を舞いながら、岩見祥吾をそう評価した。

永松大王は決して、水的能力と、氷的能力と、念動力を有する多重能力者ではない。彼は『水』に関することなら、状態変化も、運動も、硬度も、純度も操れる万能な水的能力者であるだけなのだ。氷と水の両方を操れるのもその為であり、先ほどの霧も空気中の水の操作で作りに出したのだ。そして、今こうして空を飛んでいるのも普段から、弱点である運動音痴をカバーするために表皮の上に纏っている『水の鎧』、能力によって体をあたかも操り人形のように操作し聖人並みの運動力を誇っているように見せる為の『裏技』を操り、空を飛んでいるだけなのだ。

「盲目の『エアリアル大気支配』、感情の無い『パーフェクトレポート完全移動』、逃げの『アトラクタ万有引力』、スキルアウト『プレッシャースペース圧殺空間』、この街はいくらでもボクを楽しませてくれる！」

心を躍らせながら少年は空を舞い、とあるビルの上に降り立った。
「これだから好きなんだ！！学園都市が！！世界ってヤツが！！」
そう興奮しながら叫ぶ。そうして、

「だからさ、やり過ぎるなよ。君の計画もボクを楽しませてくれるが、もし世界を殺すっていうならさ」

と言つて自分の目線の先にあるビルを、より正確にはそこに住まう
住人を冷たい瞳で睨んだ。

「君の幻想、跡形もなくぶち殺すよ？」

情報屋はそう宣戦布告する。

この街の創設者であり、最も歪んだ存在、『アレイスター』クロウ
リ』』に対して -

とある外道の断頭奔流（後書き）

感想など、お待ちしております。

とある迷子の万有引力（前書き）

管理人より、a s u t a様のキャラである永松大王君をお借りしました。

とある迷子の万有引力

「えーっと……」

彼女——竜守綾季の視界を埋め尽くすのは、ひたすら人、人、人。

今日は休日。この第七学区はショッピングと称して外へ繰り出してきた人々で轟めいていた。

人々は皆、休日を有意義に過ごそうと同じようなことを考えてここに来たに違いない。そしてそれは、竜守とて例外ではなかった。

だが、今の彼女のこの状況は何か。

この状況と言うのは、自分の現在地を把握できず、さらに付き添いで来てくれた『彼』をも見失う——そんな状況である。

「これって……迷子？」

「とある迷子の万有引力」

「……と、とりあえずっ」

兎にも角にも、連絡をしなければ始まらない。そう思い立って、竜守は慌てて携帯電話を取り出そうとショートパンツのポケットに手をつっ込んだ。しかし、——まあ展開としては当然、そこに携帯電話の感触は無い。

「あれ？ ……お、落とした？」

竜守としては顔も真っ青である。竜守はやつと事態の深刻さを理解し、そして、

「どーしよっ！？ うわあ怒られる、怒られる以前に二度と巡り会えなくなる、もうなってる、うわあああん！！」

——パニックに陥った。

道の真ん中で小さなポニーテールを振り乱し喚く少女に、道を行く人々は当然彼女を怪訝な目で見る。だがそんな視線に気づかないまま、竜守の思考はフルスロットルであらゆる選択肢を右往左往し、やがて一つの場所へ不時着した。

「とりあえず、探さないとっ！…ふにやつ！？」

弾かれたように竜守は駆け出そうとした。が、それは呆気なく阻まれる。

どんっ、と何かに衝突したのだ。

「……大丈夫？」

やんわりとした声色で、その何かは竜守に声をかけた。竜守は何が起きたのか、しばらくポカンと呆けていたが、やがて状況が掴めると素早く『何か』から一歩離れた。

「ごめんなさい！ あの、言い訳をいたしますと、綾季はわざとじゃなくて、急いで探さないといけないひとがいて、それであるパニックになって周りが見えなくなっ取りあえずごめんなさい！」

深く頭を下げて、竜守は謝罪する。その謝罪の言葉は早口な上

に大音量で、道行く人々はやはり怪訝以下略。相手は困ったように笑った。

「僕は大丈夫だから、顔上げてよ」

そう言われておずおずと顔を上げる竜守。そこに居たのは、長身で細身の少年だった。着ている制服は、竜守もどこかで見たことがある。

その人懐っこい笑顔には好印象を受けるが、そのシルエットはどうにも細すぎるような気もする。なかなかの勢いでぶつかって、彼が押し負けなかったのが不思議なくらいだ。

簡単にぼつきり折れてしまいそうなその少年は、どことなく硝子細工のような『彼』に似ているような気がした。そして再び今が由々しき事態であることを思い出し、竜守は慌てふためく。

「あの！ほんとにすみませんでしたっ！じゃあ綾季は急ぐのでっ！」

「え、あ、ちょっと待って」

「はいっ!？」

改めて駆け出そうとした竜守を、少年は呼び止めた。事態の深刻さ故半泣き状態の竜守だが、そんな彼女の心情を少年が知る由もない。少年はおもむろに口を開いた。

「——綾季って言った？」

何を言っているのか、この少年は。

竜守は猫のような大きな目をぱちくりと瞬きさせると、「はい？」と聞き返した。

「だから……自分のこと、綾季って言った？」

「あ、まあ、はい……」

「上は？ 苗字」

「えと、竜守、ですけ……あ、」

見ず知らずの他人に名乗ってはいけない、と『彼』に言われていたことを今更思い出して、竜守は自分の口を手で覆った。また怒られる理由が一つ増える。

だがやはり遅い。少年は目つきを変えて、竜守に詰め寄った。

「竜守綾季ちゃん、でいいんだよね？」

「え、いや、あの」

「人探ししてるの？」

「まっ、まあ、はい……」

「迷子？」

「迷子じゃないっ！ー！」

反射的に否定してしまった。今までと違う反応に、少年は一瞬キョトンとしたようだったが、すぐにその表情を愉快そうに変える。

「もしよかつたらなんだけどさ、その人探し手伝ってあげるよ」

「っ、ほんとっ！？」

思わぬところから救いの手、と言ったところか。竜守は案の定それに食いついた。少年はにこにここと機嫌の良さそうに頷く。

「どうせボクも暇だしね。手伝うよ」

知らない人には付いていくな、と小学生が受けるような指導を日頃から聞いている竜守だったが（言わずもかなそう言ったのは『

彼』である）、今の状況とその忠告を秤にかけるとこれまた案の定、秤は前者に傾いた。忠告なんかは遠い彼方に吹き飛ばして、竜守は少年の手を掴んで言う。

「ありがとうっ！ すっごくありがとう！」

「どういたしまして。ボクは永松大王。ながまつおおきみ。探してる人が見つかるまで、よろしく」

*

竜守綾季という少女について。

まず年齢は十四歳だが、身長は148センチと小さい。さらに無邪気で大きな瞳も手伝って、実年齢より幼く見える。本人もそれを少し気にしているようではあるが、愛くるしい見た目のお陰で周りから好かれている節があるので明言はしていない。

そして中身も、これまた幼稚というか、純粹である。

彼女に嘘をつけば、まずバレることはないと言われる。疑うことを知らないのだ。単純に馬鹿だからともとれるが、どちらにしろ純粹だ。

と、まあこのように、竜守綾季という少女は何処かずれているところがある。それは今に始まったことではない。

だが、明らかにずれすぎているところが他にもある。

この学園都市では、超能力開発という少年漫画よろしくなカリキュラムが存在している。学園都市内の全ての学生が、その開発を受けそれぞれ異能の力を手にしているのだ。中にはそれが発現しな

い者も居るようではあるが、全くの無能というのはそう居ない。皆その強度に差はあれど、何かしらの力を手に入れている。

しかしその中で、全く異能の力を持たない無能力者以上に、稀な存在があった。

超能力者——レベル5。たった一人で軍隊に匹敵する力を持つと言われている、正真正銘の化け物がそれである。

230万人の学生が学園都市には在籍するが、レベル5はたったの七人しか居ない。それほどまでに彼らはイレギュラーだった。

話を戻して、単刀直入に本命を撃ち抜こう。

——竜守綾季は、まさにそのレベル5であった。

——そしてそれを、永松大王が知らないわけがなかった。

*

「え、えと、大王……？」

『彼』を探して第七学区を練り歩いていた竜守と永松は、いつの間にか学区の外れまで来ていた。

人通りはさつきまでの盛況ぶりが嘘のように皆無になっている。ひたすら学生寮ばかりが陳列しているが、その学生が居ないだけで何となく寂れた雰囲気を書わせた。

「ここまで来ちゃったら流石に居ないと思うんだけど……」

竜守のこの意見は、彼女にしては的確だった。『彼』と彼女は

ショッピングに街へ出てきたわけだから、当然である。

だがそんな竜守の正論に、永松は返事をせずただ歩を進めるだけだった。

「大王、ねえ、大王つてば！ ストップ！」

反応を示さない永松に痺れを切らした竜守は、彼の腕を強く引いた。これにはやっと永松も、こちらを向く。

「聞いてるっ？ 戻ろうよ、多分こっちには居ないから」

「あー……いや、でももうちょっと」

「だから！ 居ないんだってば！」

意地でも腕を離そうとしない竜守に、永松は小さく溜め息をついた。溜め息をつきたいのは竜守の方だが、文句を言う暇を与えず永松は口を開く。

「もうちょっと人目につかないところに行きたかったんだけど、あまり目立つと面倒だし」

「え？」

わけがわからない、と言った風に、竜守は首を傾げた。理解が追いつかない竜守を尻目に彼は続ける。

「いい拾い物だな。——超能力者の万有引力がこんな単純に手に入るなんて」
アトラクタ

瞬間、竜守の頬を冷たいものが撫でて通り過ぎた。

「——え」

それが水の刃だと気づくのに、そう時間はかからなかった。

「大人しくついて来てくれるんだったらこういう手は使わないんだけど、仕方ないね」

本能的に、永松の腕を放し後ろに下がる。彼は笑みを――それも好奇心しか感じられない無邪気な笑みである――を浮かべていた。竜守は自身の血管が縮むような感覚を覚える。

「何で、その名前を……」

「ん？ 万有引力アトラクタっていう名前？ 有名じゃないか。重力操作系能力者の頂点に立つ超能力者だって」

まるで褒め称えるような言いぐさだったが、その名を冠している竜守としては嬉しくも何とも無い。警戒を解かぬまま、竜守は問う。

「……大王は綾季を連れてって、何するの」

「何って言われてもなあ。面白そうだから遊ぶだけだよ」

しかし返ってくるのは玉虫色の答えである。明らかな歪みを永松に感じながら、竜守は竦みそうな足に力を入れる。逃げる、と彼女の全身の神経は叫んでいた。

叫びはしたが、その前に。

どこからともなく、水の束が永松の背後で湧いた。轟々と音を響かせながら、その水は竜守を威嚇するようにうねる。

「早いうちにネタばらしした方がいいかな。……断頭奔流ウオーターソウ、簡単に言くと水流操作の能力だね。逃げる気なら容赦は出来ないよ」

「っ！」

はじかれたように竜守は彼に背を向けて駆け出した。タイミングを見計らい逃げ出すなら、今しか無かったのは間違っていない。だが、逃げ出すという行為は最早最善の策ではなかった。

轟！と水の大蛇が唸り、鱗を撒き散らしながら竜守の行く手を阻む。

阻んだものの——次の瞬間には大蛇はここでは珍しいコンクリートの道路に叩きつけられ、飛沫を散らしてその形を崩されていた。

「——やめて」

無論、そんなことが出来るのは一人しか居ない。

質量を持つあらゆる物質に存在する『引力』を、思うがままに操ることの出来る能力者——竜守綾季。

竜守は場面に似合わない、泣き出しそうな表情で振り返って、言った。

「その能力じゃ——大王じゃ、綾季を傷つけられないよ」

その言葉は、二人の間に語弊を生むには十分だった。それどころか、永松の知的好奇心を滾らせるのには十分すぎるくらいだ。

「……中身は普通の子なのかなんて考えてたけど」

「え？」

「流石超能力者」

「え、あの、何か勘違いして——！？」

聞き入れる耳が無いのか、はたまた聞く気が無いのか。再び永松

の背後から水の大蛇が噴き出す。今度はその数は五つに増え、それが違った動きを見せる。

「面白いや」

その言葉を合図に、蛇たちは一斉に竜守に向かって特攻した。

「――！」

猛攻、と形容するのが相応しいだろうか。蛇たちは目で追うのも難しい凄まじい速度で竜守に迫る。

だがそれも、竜守に届くことはない。今回は直接地面ではなく、空中でそれらは静止させられ道路に落ちた。

「ちがうんだよつ、見下すとかそんなじゃなくて、本当にそういう意味じゃなくて……っ!？」

蛇だけでは止まらない。次に竜守を狙ってきたのは、彼女によって地面に落とされた大蛇『だったもの』であった。

裏手から這い出たそれは、自身の身体を仰け反らせて竜守に向かって振りかぶっていた。竜守は反射的に、能力を使うより先に振り下ろされるであろう水の刃の軌道を読み身を擦らせる。

ドスッ!という鈍い音がして、刃はコンクリートを抉った。その威力はどう考えても水のものではない。

「っ……!」

「こんなもんじゃないだろ？」

身を擦らせた不安定な体勢の竜守に向けて、また先ほど地面に落

とした蛇が刃として復活を遂げ追撃してくる。戦闘慣れた他の能力者だったなら、このような状況をいくらでも打破出来たはずであった。永松もてつきりそう考えていた。

だが、生憎戦闘慣れしていない竜守は思わず怯み、あろうことが目を瞑ってその場にしゃがみ込んでしまう。

「あ」

これはまずい、と永松は直感する。――が、時既に遅し。

ズシャツ、と飛沫を散らしながら、水の刃はコンクリートにめり込んだ。

「え？」

「……ふ、え？」

何が起こったのか、二人の間に少しの静寂が流れる。
永松ではない。見たところ竜守でもない。

では誰か。

「駄々言うから一緒に来てやったのに、はぐれるわ携帯は通じないわ終いには不審者に襲われてるわ……。ホントどうにかなんねーの、お前」

ちょうど永松の正面、竜守の背中の中線上に、『彼』は居た。

声に聞き覚えがあったのか、恐る恐る振り返って『彼』を確認する竜守。そして案の定思い描いたそれであつたらしく、歓喜に顔を

綻ばせ——たかと思いきやすぐに引きつらせる。

白い肌に蒼い目、さらには金髪。この時点でフランス人形を思わせる風貌だが、細い手足が手伝ってフランス人形と言うより硝子細工を連想させる。繊細、美麗、なんて単語が浮かび上がる、そんな少年だった。

——これで妙に夥しい殺気を纏っていないければ、それだけで済んだものを。

「らっ、らいえ……？」

「何でお前はそうやって人にホイホイついて行くんだよ、自衛なんか小学生でも出来るぞ。小学生以下かお前は」

面倒そうにがしがしと頭を掻きながらしゃがみ込む竜守まで歩み寄る、ライエと呼ばれた硝子細工。小学生以下と罵られては黙っているわけにもいかない竜守だったが、立ち上がって抗議しようにも彼の静かで綺麗で繊細でおどろしい憤怒の圧力に口を開くことさえ出来ない。

「今までにも襲われてんだろ。いい加減学習しろよせめて暴れるとかしろよ頭潰すくらい造作もねえだろ」

「怖い！ 怖いよライエ！」

やつと口を聞けたかと思えば、何やら漫才のようなものが成立した。彼がただ饒舌に文句を連ねるのは怒り心頭であるという証拠だと竜守は知っている。早急に消火を行わなければならないと踏んだ彼女は、おずおずと言った。

「……ごめん、なさい」

「……別に怒ってねえよ」

「うそだっ！」

「あーもー、いいから」

適当に竜守をあしらうと、ライエは大人しく漫才を眺めていたらしい永松に向き直った。

「次、お前の番なんだけど。何か言い訳とかあるか？」

「あれ、ボクはとっちめられるのかい？ その前に聞きたいんだけど、キミは竜守綾季の保護者ってことであってる？」

「……だつたら何」

ライエの無愛想な返答を聞いた永松は、「じゃあちょうどいい」と笑って言った。

「しばらく彼女を譲ってくれないかな？」

返事は猛スピードで飛んできた釘だった。

釘は永松の黒髪を掠め、そのまま彼方へ飛んでいく。即答であった。

「……交渉決裂だな」

「随分堂々とした誘拐宣告じゃねえか。……ぶち殺すぞ」

「ちよつ、ライエ！ 前者の台詞と後者の台詞が綾季には結び付かないよ！」

何処から出したのかわからない釘を四本握ったライエは、竜守の指摘など無視して永松を睨み付ける。硝子のような外見のお陰で迫力は薄れているが、纏った殺気は誰にでも視認出来そうなほどであった。

「……なるほど。竜守綾季が妙に戦闘慣れしていないのはキミの仕業か。彼女を狙う虫を退治してきたのは君なんだね」

「お前には関係無い」

「関係あるよ。……キミも面白そうだから、ちょっと遊んで行こうか」

ぶわっと、水の網がライエと竜守の二人を囲むように湧き、飛沫をあげる。竜守は「ひっ」と小さく悲鳴をあげたが、ライエは動じない。——というか、まるで興味が無さそうだった。

その水の網が、幾数もの刃となり——彼らを中心に弾かれてしまったのだから無理も無い。

「選ばせてやる。——脳天ぶっ潰されて死ぬのと、心臓に釘刺されて死ぬのと。どっちがいい？」

散った水泡の中で、ライエは無表情を貫いたまま言った。

*

怪しい笑みを貼りつけた永松と、氷のような無表情のライエ。対峙する二人の少年の顔を、竜守はただ不安げに見渡すこととした出来ないでいた。もちろん声をかけられるものならすぐにでもかけたいだが、二人の間に流れる空気はどう足掻いても断ち切れない、と彼女は悟っていた。

そして、唯一断ち切ることが出来るものがあるとすれば、それは

空気を斬る、微かな音。そして直後に、轟という——やはり、音

ライエの放った——というより手から離れたただだったが——釘

を飲み込んだ永松の断頭奔流^{ウォーターソウ}が、そのまま空気を突つ切りライエへ向かう。ライエは少し目を細めたかと思うと、竜守を庇うように立ち塞がった。

「っ、ライエ……！」

やっと発された竜守の声は、ズドン！という重い音に掻き消された。二人の目前まで迫っていた水の刃が見えない壁にぶち当たったかのように遮られる。雫の一つさえその壁を越えてくることはないやがて刃はその場で霧散した。

自身の技をことごとく潰された永松だったが、その表情は崩れない。ポーカーフェイスというやつだろうか、と竜守は思う。それどころか彼は、相変わらずの楽しい声色で呟いた。

「へえ……じゃ、これならどう？」

第二撃。今度は特攻でも、振り下ろされる水剣でもない。横から薙ぐように——まるで鞭のように、それは襲い掛かって来た。だがわかるのはそこまでで、『襲い掛かってきている』以上のことはわからない。——というのも、目視出来ないほどにそれはスピードを増していたのだ。

永松という一点から伸びているため、軌道を読むことは竜守でも容易だった。これならこれまでのように、単純に防ぐことが可能である。

バンツ！という叩きつけるような音。豪速のそれはやはり『見えない力』に阻まれた。そしてそのまま跳ね除けられる。

「ら、らいえ……」

「……気に入らねえな」

何が、と竜守が再び問う前に、永松が手を叩いた。まさに謎解きを始める探偵のように、彼は言う。

「なるほどね、よくわかった。——キミの能力は竜守綾季アトラクタと同一、もしくは似たようなものなんじゃないかい？　そこまで珍しい能力でもないわけだし」

「……だったら」

「色々考えて、レベル4と見たんだけど、どう？」

「……だったら」

何というワンパターンなレスポンス。だがそれ以上に、竜守を驚かせたものがあつた。

ライエの操る『見えない力』の正体を、曲がりなりにも解き明かしたのは永松が初めてだったのである。

斥力操作——簡単に言えば、そういうことだ。竜守が操る引力が引き寄せる力だと言うのなら、ライエの操る斥力は斥しりぞける力。大きくなれば物体同士は反発し合い、小さくなればそれらは引き付けあう。本質は竜守のそれとほとんど変わらない。

だが、操るのが『斥力』だというのが問題である。

「そろそろ種明かししてくれていいんじゃないかな？　ほら、ボクのは見たままだけど、キミのはまだ不確かだ」

「お前の予測で大体合ってる。それでいいだろ。それより——」
「よくないよ。ボクは面白い奴のことは隅々まで知っておきたい」

だからそれはお前だけの事情であろう、というか人の話は最後まで聞けよこの野郎、とばかりにライエは不愉快指数を跳ね上げた。

永松の饒の舌に、本来無の口であるライエが口挟みをする暇などは無かった。これで指数は二倍である。

苛立ちに対しての耐性が皆無なライエは、しびれを切らしたように溜め息をついて鬱積した思いを吐いた。

「――絶対排斥^{レジスタント}。これで満足かよ」

その言葉と、ほぼ同時に。

今時学園都市ではほとんど見られない、広いコンクリートの歩道が『弾けた』。文字通り――弾けたのである。

バゴツ！なんていう鈍い音と共に、永松の足元が炸裂した。コンクリートの大きな破片――最早それは岩塊と呼ぶのに似つかわしいそれと、粉塵が一斉に溢れる。暴風と砂塵が辺りを覆いつくし、竜守視界を霞ませにかかった。

「……っ、大王！」

一陣の風が吹き抜け、辺りは一瞬静寂を取り戻す。竜守は直ぐ様顔を隠していた腕を下ろし、目前で起きた大惨事に顔を青くさせた。

爆発と言ってもさし違えない事故だった。それに真っ向から巻き込まれた永松の無事は保障できるものではない。というか、ただの人間なら確実に死亡ものだ。だがそれを起こした本人は無情にも無言無表情無感情のスリーコンボを決め込んでいる。

「ライエっ！ やりすぎだよ！ 怪我どころじゃ済まないかもしれないじゃんっ！」

「怪我で済んでたまるか。死んでてもらわねーと困る」

「バカ！……わぷっ」

漂うだけだった砂塵が、風圧を受けてぶおっ、と一帯に沸き上がった。咄嗟に目を瞑り顔を守った竜守だったが、砂は顔のみならず全身に叩きつけてきて、少々痛い。

——風圧？ 思い立った瞬間には、竜守は身体中のちくちくとした痛みなど忘れて顔を上げていた。

「——今のはちよつと……いや、かなり危なかったかな」

舞った粉塵のせいでその姿は上手く掴めない。だが、声はしっかりと捉えられた。竜守は当然、ライエですら目を見開く。

砂の濃霧が退いたその先で、彼は——永松大王は、屈託の無い笑顔でそこに立っていた。

「お、大王……？」

「ビックリした。死ぬかと思ったよ、本当に」

そう言っただけで困ったように笑う永松。笑い事じゃなかっただろう、と竜守は言葉を失う。代わってライエは竜守とは別の意味で押し黙っていた。

「さて、と。絶対排斥^{レジスタント}だっけ？ 聞いたことあるよ。学園都市で唯一斥力を操る能力者だっけ」

制服についた砂埃を払いながら、永松は確かめるように言う。話しかけられた当人は肯定も否定も示さなかったが、永松は構わずに続ける。

「ごめんごめん、さっきまでは予行練習みたいなもの。気を悪くしたんだったら謝るけど——もう遅いか」

わざわざ明言する必要が無いほどの大遅刻だ。上機嫌そうな永松に対し、不機嫌そうに彼を一瞥したライエは、足元に転がっていたコンクリートの破片を足で小さく小突いた。

まるで、鬱憤を閉じ込めていた蓋を開け放つスイッチを押したかのように。

＊

そこからは、れっきとした『戦闘』であった。

まず、自身の主力武器がほぼ無意味だということが明確になつて
メインウェポン
いるライエは当然釘を使うことはしなかった。永松の断頭奔流を打ち破るには結局大きな力が必要になる。釘ではそれが適わないとなれば、あとは別の——今この場合ではコンクリートの岩塊である——を使う他ない。普段は釘を自身の質量で飛ばしていた彼が岩を遠隔操作することが慣れているはずもなく、戦力的には圧倒的に不利な状況であった。対する永松はフルに能力を活用できるのだから尚更だ。

それでも文句も泣き言も、弱音すら吐かないのは、彼や竜守に永松の攻撃が届かないからである。

水には質量があり、質量さえあれば斥力は発生する。ライエにとって重要なのは『質量』だった。それが無いなら話は別だが、兎にも角にも目の前の鬼畜は質量を持たないもの——例えば熱、光、電気などを操作する術を持たない。よって、ライエの斥力による防御は破られることはないのだ。そう言った意味で言えば、戦略的には

彼が圧倒的有利だということになる。

ただ、目先の永松のにやかな顔だけがライエのただでさえ切れやすい堪忍袋の尾をじわじわと腐らせていた。

永松を中心に空に舞った岩石たちが、風を切る音だけを残して彼に突撃しに入る。逃げ道は皆無。故に永松は一步も動かず、断頭奔流ウオーターソウの切っ先でそれらを砕き、飲み込みんだ。

そしてそのまま、砂やら何やらが混じった濁流をライエに——訂正、ライエの斥力の壁に叩きつける。一向に破ることの出来ない壁にそろそろジレンマを覚えてもおかしくないはずだが、そんなことは微塵も感じさせず永松は微笑み続ける。

再び岩が浮かび上がったのを見計らい、断頭奔流ウオーターソウは壁を破ることを諦めてまた主人を守る大蛇へと様変わりした。もうこんなことを飽きることもなく何度も繰り返している。竜守はさっぱり終了の兆しを見せない緊迫した空気に、だんだんと緊張し放題の心をやつれさせてきていた。

唯一変化しているものをあげるならば——それは、水流のスピードだろう。

目で追うのも難しいほどに、それは飛躍的にスピードを上げてきていた。轟音をたてながら猛スピードで迫ってくる水の大蛇には命の危機を感じさせるものがある。しかし、生憎ライエの斥力の障壁は速度に関係なく作用するので、結果的には大した変化とは言えないかもしれない。

バンツ！と、濁流が懲りもせず真っ向から特攻してきたのを斥力の壁が阻む。それは勢いを殺さずまに受け止められ、弾かれるようにして後退する。

「——うーん、つまらなくなってきたなあ。かと言って打開策があるわけでもなく……」

そうぼやいたのは永松だった。このままではたちこっこそのものだと踏んだ彼は、わざとらしく唸ったかと思うと、ぱつと何かを思いついたかのように顔を上げる。

「そうだ、ライエ君。こういうのは？」

彼の言葉と共に、濁った水の大蛇が幾数にも枝分かれする。根元から裂かれたそれは、薙刀の如く細く、高速で四方八方から二人に迫った。——否、高速という言葉では済まないように思われた。どちらかと言うとそれは——音速。

一閃、一閃、一閃。

これまで見てきた断頭奔流が重みと力強さで真っ向から敵を圧倒する剣であるなら、今四方からライエの壁を切り裂こうとしているそれは、速さとしなやかさで相手を攪乱させ首をはねる刀に違いないだろう。先ほどと比べると随分細身になった刀身のせいか、そのスピードは最早比べ物にならない。目で追うことも出来ず、気付けば壁に衝突している始末だ。

——もしかすると、彼は。

竜守は唐突に脳に浮かんだ不安に、背中がじつとりと濡れる感覚を覚える。当たり前だが気持ちのよいものではない。

不安の霧に巻かれていたそのとき、バンツ！という音と共に、水の刀が竜守の肩に触れる寸前で止まった。彼女は思わず「ひゃあっ!？」という悲鳴をあげ、その場から立ち退く。

「馬鹿、動くなっつーの」

そう叱咤するライエの声は静かではあるものの、余裕が無いように感じられた。仕方のないことだとわかっているだけに、「だつてびつくりしたら逃げたくなるじゃん！」とは思っても言えない。

彼と同系統の能力を持つ竜守には、そのデメリットも弱点も知っている。——正確に言うと、戦闘慣れしていない彼女はそれらを性質だとだけ理解していて、一転させればデメリットにもなりえるということを知っていた。

例えば、今まで破られることのなかった壁は常時展開されているものではない。引力と斥力はいくまで物体と物体との間に発生する力であつて、物体単体には絶対に発生しないものなのだ。つまり、この壁は『ライエ』と『水』という二つの物体があるからこそ——と言うより、ライエが『自分』と『水』を物体として認識できるからこそ成り得るものなのである。

そして、質量の大きさも関わってくる。質量が大きければ大きいほど引力と斥力は大きくなり、逆も然り。よって、細身になり質量を減らした断頭奔流は前よりずっと斥力が小さくなっているはずだった。

——視認出来ない上、質量が小さいとなれば、斥力を操作するのも困難になるわけで。

「やっぱり、ね」

「——！」

息を飲んだのは、ライエだけではない。

ドッ！と一際鋭利そうなそれが、竜守を突き刺そうと側方から迫っていた。

「ひッ……！」

竜守の掠れた声に、ライエは反射的に振り向く。——彼女がそう簡単に死ぬわけがないということを、彼はいつも忘れてしまうのだ。

竜守が本能的に自衛のための演算を組み上げたのと同時に、ぱきんと薙刀の時が止まる。だが、止まったのはその薙刀だけ。ライエに向かう刃は止まらない。

皮膚と、肉が裂ける嫌な音が鼓膜を揺さぶる。

「っ——！」

「あっ——！」

ハッと、意識をライエに向ける。彼の白い左腕に、赤い筋が通っていた。演算の名残があったからか、腕は刈り取られずに済んだらしい。傷口から深紅の液体が溢れるだけに留めている。一緒に、痛み二割、面倒臭さ八割の感情を込めた舌打ちが漏れた。

「らいえ……っ！」

「……別に、大したことない」

そんなはずがあるものか。命に関わる怪我でこそないが、やはり血を見るのは気持ちのいいことではない。よくもまあ舌打ち一つで済ませるものだ、と竜守は半ば彼に絶望する。

怪我をしてもなお変わらないライエの反応を見て、満足そうに永

松は言った。

「そんなに竜守綾季アトラクタが大事なんだね。ボクにはよくわからないけど」

能力事情に疎い竜守でも、永松が高位の能力者だと理解できた。
——この手の能力でライエを圧倒する人物を見たのは初めてだったのだ。

ライエもそれをわかつているらしく、永松を睨む。

「彼女を巻き込まないように演算組んでるのが見え見えだし、お陰で演算速度も落ちてるみたいだし」

「うるさい、関係無い」

「……やっぱりわからないな」

相変わらずの、というか、より一層殺気を含むライエの声。向
けられた牙に対して、永松は呆れたように溜め息をついた。

「どうしてそこまでして竜守綾季アトラクタを守ろうとするんだい？ 放
つておいても勝手に死ぬような生き物じゃないだろう、『それ』は」

竜守の肩が震える。永松の言うことはもったもたであった。

超能力者は皆規格外の能力を有する。竜守も例外ではない。襲
われることがあってもまず死なないし、それどころか一秒足らずで
相手を殺すことが可能だ。

「むしろもう人間って言うのにも語弊が出るというか。何て言う
んだろうね。異形？ 怪物？」

「……！」

言葉を失う。

「綾季………？」

「あれ、どうしたんだい、アトラクタ竜守綾季。キミのことを言ってるんだけど」

「う、う…！」

ぐらり、と竜守の『何か』が揺れる。喉の奥で熱が疼く。足が竦むのとは違うけれども、彼女の身体には身じろぎが許されない。

明らかに動揺している竜守を見、ライエはもう一度舌打ちをした。対して永松は一瞬きよんとしてからすぐにほくそ笑む。反応を楽しんでいると見えた。表情を出すまいとしても、竜守には元々無理な話であった。

「もしかしてさ——八年前の事故とか関係あったりする？」

「——……っ…！」

今度揺れたのは身体と瞳。身体を雁字搦めにしていたはずの緊張の糸が嘘のように弛緩し、支えの力を失ってふらつく。同じく焦点の定まらない瞳は何も映さない。

「おいっ、綾季！」

「ひっ、う…！」

ついに竜守の上半体が揺らいだ。地面に倒れる前に、ライエが竜守の肩を掴む。新たな支えに何とか持ちこたえる竜守だったが、表情を見るからに確実な意識を保っていない。

「あれ、まさかとは思うけど壊れちゃった？ 早いなあ、それだけ凄いいトラウマになってるんだね。あの事故ももつと掘り下げておいた方がいいかな」

「お前…！」

「さて、と。キミはどうするのかな。竜守綾季アトラクタを渡すか、死ぬかのどっちかってことに——あ、でもキミももう少し遊ぶ余地がありそうだし…」

苛々、とかそんなレベルではない。そもそも、『怒る』という感情ですらない。目の前の鬼畜が竜守の心を抉ったということに、信じられないほど強い不快感を感じた。

何と言うか、それは——危機感。

今すぐにも永松の憎たらしい笑みをぐちゃぐちゃにしてやりたい、と思う。純粹にそう思った。だが、それはこの状態の竜守を差し置いてすることではない。そうライエは思い直して、竜守の身体を支えなおすと、永松に向き直った。

「決めた？ 竜守綾季アトラクタが心配ならついて来てくれてもいいんだけど」

「アホ、誰がついて行くか。そもそも渡さない」

「…えーと、それは死にたいってことでいいの？」

「生憎だけど俺は精神的DMでも何でもねえからそれもない」

「……理解に苦しむから単刀直入に言ってくれないか？」

ライエが極めて小さく、呟くように返す。

「こつこつことだ」

爆発、破裂。派手に音をたてて破裂したのは、やはりコンクリー

ト。今回は三度、その音がして、その分に見合うだけの量の砂塵が辺りに溢れかえった。

「——こういうこと、って——」

自身の能力ゆえ『無意識下での防御』なるものが可能である永松は、それに対して怯みもしない。どちらかと言うと呆れ返るくらいだが——

とんつ、という軽く地面を蹴る音が聞こえた——ような気がした。

永松の頭上を、身を翻して彼が飛び越えていく。

「——へえ」

「んじやな、鬼畜」

超能力者を抱えた金髪碧眼の硝子細工のような少年は、言葉の通り『全てを拒絶』しながらそこから飛び去った。

*

自身を石や砂から守っていた氷が、空気へ溶けるように消えていく。

永松は、コンクリートの岩塊やら何やらが散乱するそこに突っ立っていた。

（……あー、勿体無い）

逃げるにしても、後退するだろうとばかり思っていた。だがライ

工は、竜守綾季というリスクの塊を抱えたまま特攻して自らの頭上を飛び越えて行ったのである。

（最悪死ななきゃ良かったのかな。大事にしてるなーとは思っただけど）

そうだったならばかなり性質が悪いだろう、と苦笑する。何という最悪な王子様だろうか。

「さて、と」

永松はこれからどうしようかを思案した。彼を追うもよし、追って殺すのもある意味よし。まだまだ遊びがいはあるだろうと思う。

間を取って、永松は引き返すことにした。

どうせあの最悪な王子様は、近く自分を殺しにやって来るに違いないだろうから。

（それにしても——あいつ、絶対惚れてるって。竜守綾季に）

とある迷子の万有引力（後書き）

後日談なんかもございますので、合わせてどうぞ。

とある迷子の万有引力 + (前書き)

『とある迷子の万有引力』の後日談…みたいなものです。合わせてどうぞ。

とある迷子の万有引力+

竜守綾季が恐れているのは何か。

答えは複数ある。例えば幽霊だとか、虫だとか、ピーマンだとか。普通の女の子が思う恐いものと、大差無い。

「——やだよ……」

だが、虚ろな目でそう呟いた彼女は生憎なことに『普通』ではない。真正銘の化け物、超能力者。

世話焼きな保護者はライエの腕の傷を見て慌てて救急箱を取りに行ったところだ。ライエはその間に力無く自分に縋りつく竜守を彼女の寝室へと運んだ。あの場を無理矢理脱した決断は間違っではないはずだったが、変わり果てた竜守を見るとそれも思えなくなってくる。

「やだ…やだよ……」

そう呟いたのは何度目になるかわからない。ライエは半ば乱暴に竜守をベッドに放り投げた。こうなった状態の彼女を見るのは初めてではないから、対処法も知っている。『絶対安静』という名の放置がそれである。

すぐに立ち去ろうとしたライエだったが、自身も貧血で目眩を起していることに気づいた。これ以上歩くと良くないような気がして、ベッドに腰を下ろしておく。

「いや、だよ…！」

竜守が呻くように呟く言葉は変わらない。何とも鬱な気分させ
るBGMに、ライエは一つ溜め息をついた。

彼女の恐がるもの。ライエはその全体を掴み得ない。知ってい
るのは一部だけである。竜守から直に聞くのも気が引ける——とい
うかこの様だし、他に全てを知っているのはあの忌々しい研究者の
みであるから、どうにも機会が持てない。というか、持ちたくない。

八年前。竜守とライエが会うほんの前のことである。

竜守はそのとき既に万有引力という能力を有していたらしい。八
年前で、彼女は今十四歳であるから、当時六歳だろうか。そんな幼
い少女を用いて、忌々しい研究者はある実験を行ったのだそうだ。

成果は——無し。実験途中で爆発事故が起こったのだ。

最初百人は居たと言うのに、生還したのはその研究者と竜守の二
人だけ。使用した施設は全焼して、それこそ本当に成果はマイナス
といった感じであろう。話を聞いたときライエは、ざまあねえな、
と思ったものである。もちろん研究者に対して。

爆発を起こしたのは機器類だったらしいが、その具体的な理由は
公表されなかった。ここからライエの憶測になるが、今思うと研究
者が器用に裏で手を引いたのだろう、と予測できる。下手をすれば
竜守綾季という研究材料を奪われてしまうことにも繋がるだろうか
ら。

その研究者が何をしようとしていたのか、機器の爆発理由は何な
のか。そこさえわかればきっと、竜守の恐怖するものの正体が見え
てくるはずなのである。

(……憎いね)

全くこの少女は、自分をどこまで振り回したら気が済むのか。能力は自分より格上だし、その癖に戦うことはいけないことだとくならない精神論を述べるし。本気で自分を殺そうとした人物——まあライエのことなのだが——を堂々と許すと言っし、その上彼を「恩人」だと言っし。お陰で、すっかり病んでしまったではないか。

（ほんと、訳わかんね…）

彼女も、自分も。

結局彼女の手のひらで踊り続けているだけだ。

どういうわけだか竜守を守り続ける自分に、憤りに似た感情を感じる。守っても意味は無い。むしろ足手まといになるくらいであるう。

それでも、竜守はその手で自分の手を握る。

彼女は、きつとそれを知らず知らずのうちにやっているだけ。自分は、自分を繋ぎとめるために彼女が必要なだけ。

（かつこ悪い、今まで綾季なんか消してやろうと思ってたのに。酷い様だな…）

とりあえず、あいつ——永松大王は殺してやらないと竜守が、自分が危ない。自衛のためにも、あの鬼畜は敵として警戒した方がよさそうだとライエは思う。

廊下の方からばたばたと慌しい音が聞こえてきた。部屋を乱雑に使っているせいで救急箱の発掘に時間がかかったのだろう。ライエ

はその音で血生臭い思考から抜け出すと、精神系能力を有する友人もどきに連絡しなくちゃいけない、という思考へシフトした。当然、竜守の苦痛を除くために、である。

無言無表情でただひたすら燃え上がるテンションを押さえるままに
A T O G A K I ! !

いかがでしたでしょうか？企画主催者として最初にあげた小説がどうにも酷い出来でお目汚しになってしまったかもしれません。これで大体一ヶ月かそれ以上かかっているんですから驚きです。皆さんにご迷惑をおかけしましたことともに、とにかく永松君と a s u t a 様には多大なる感謝を。

さて、今回は a s u t a 様からキャラクターを拉致…ではなくご招待いたしましたて、書かせていただいたわけですが。永松君は面白ければそれでいい思考の所謂俺得キャラクターです。上手く書けているでしょうか。ホントにもう…色々変なこと聞きに行つてすみません、 a s u t a 様…！書くのが本当に楽しかったです。ありがとうございました。

続いては我が子について少し。今回起用したのは引力斥力コンビです。永松君のキャラに一目ぼれして、いい感じに襲われてくれる子って誰だろう、と考えたとき疾風迅雷が如き速さで綾季ちゃんが上がりました。レベル5だし！面白いし！ライエに関してはノーコ

メントです。綾季在るところライエ在り。ライエは何だか永松君を
目の敵にしそうなので目の敵エンドにしましゅ（（）

本編だけでは何だか消化不良に感じたので、少し後日談（まあ後
日じゃないですけど）みたいなものを書きました。戦闘描写が無い
とskskでいいですね！とりあえず恐らく書くであろう『とある
科学の万有引力』^{アトラクタ}にもちよこつとリンクするので、頭の片隅にでも
置いていただけるとありがたいです。あれっ、何か宣伝みたくなっ
てる。

そんなわけでアトガキがそんなに長くてもアレなので、そろそろ
区切りをば。次の企画小説も近いうちに！目標は12月中に！クリ
スマスに間に合うように書いていきたいなー、とか思っています。
戦闘は…次のモチベーションの大波が来るまで待つてください…。
らぶこめを…らぶこめを書かせてください…。では、どうかそれま
で見捨てないでいただけると幸いです。

ここまで読んでくださった方々に、溢れんばかりの感謝を！

【サンプル】機械人間と新天界人（前書き）

ディング様よりお預かりしました。サンプル小説になります。

「サンプル」機械人間と新天界人

「はあああじいいいめええくうううん!？」

『うわっ、来た!!』

相澤一、もといA01はただいま絶賛爆走中だった。

『悪かった植木っち!!謝る!!謝る!!ライカ電光石火で追いかけるのはやめええええ!!』

「許すわけないでしょおおおおお!?!君のせいでバーゲン行けなかったんだよおおお!!」

『そんなバーゲンくらいで……………ギャアアアア……………』

そもそもこうなってしまった訳とは。

お昼過ぎ

『あー腹減った。植木っちゃんか買ってなんか奢って』

「自分で買いなよ。僕今月ピンチなんだよ」

『まあ俺達はレベル0だもんな』

ここ学園都市はレベルの高さによって奨学金などの額が上下する。彼らにいたってはレベルなどの問題ではなく、2人とも能力開発自体受けてない。植木は頭に電極をつけた瞬間痛いと言って逃げ出し、相澤にいたっては能力開発なんてものを受けたら死んでしまうような体をしているのでできない。そもそも2人とも人であって人ではないので、例えば能力開発を受けたとしても能力を使う事は不可能だ。なので表向きは2人ともレベル0となっており、それによってもらえる奨学金の額が驚くほど低い。植木にはじつは他にも収入源があるが、それでも少々生活をするには足りず、貧乏生活を強いられているのだ。

「でも確かにおなか空いたね。どこかでお昼ご飯食べようか」

『あーあそこはどうだ?』

相澤が指を指した先には、曲がり角にあるラーメンのお店。なかなか和風な雰囲気で、お客さんもそんなにいない。

『どうだ？』

「うん、確かによさそうだね。あそこにしようか」

2人はうなずきあい、店に入ってしまった。

「あーおいしかった」

『植木っち食い過ぎ。店の人泣いてたぞ』

店に入ってメニューを見ると、早食い企画のようなラーメンがあったのでラーメンに目がない植木は即座にそれを頼む。

制限時間30分だったところを5分で完食してしまい、さらに植木はもう一つ同じ物を注文。さすがにペースは落ちたものの7分で完食し、10000円分のラーメンをただにしてもらい、賞金の10000円を入手して店を出た植木であった。

店にとつてはとんだ誤算であつただろう。

植木はラーメンが好物で、ラーメンであればバケツ10杯分食べれるらしい。

潰したラーメン店は数知れず。異名『ラーメン店の死神』と呼ばれる男だ。

彼が昔いた町ではこのような早食い企画をやることは決してない。なぜなら、一日で彼が店を潰してしまうからである。

「あーおなかいっぱい」

植木は腹をポンポンと叩きながら満足げに言う。

『さすがラーメン店の死神だな』

相澤は半分感心しながら言う。

「やめてよハジメ君。あれなんてほんの少しじゃないか。今日は調子悪くてさ」

『あれで!?!』

相澤は驚きの表情を見せる。今回の店は運がよかったようだ。

「…あれ？あそこの郵便局こんな時間なのにシャッター閉じてる」

植木の視線の先には、今の時間閉まってるはずのないシャッターが閉まっている郵便局が見えた。

『あー、あれじゃないか！？強盗とか』

「そつだとしたら問題だね。行く？相棒さん」

『当たり前だ相棒』

2人は郵便局の裏に周り、裏口を目指した。

「『おっじゃましてーす』」

「な！？なんだ貴様ら！！」

「問答無用！！」

「侵入『寝てろ』……」

相澤が0・5秒で見張りの首を絞めて意識をブラックアウトさせた。

「やっぱり強盗か」

『物騒な世の中になったな』

「そうだね。通り魔に刺されたり……」

『それは言っな』

2人は裏口から侵入し、郵便局に乗り込んだ。

『いやっほおおおおおおおう!!!!!!!!!!』

相澤が雄叫びをあげて、近くにいた銃を持っている男を殴り、気絶させる。

「「「「!?!?!?!?!」」」」

「もっと静かにやってよ。もう気づかれちゃったじゃないか」

『そんなのは俺の性分に合わねえ』

「だ、だれだ!!」

「『人間』」

実際に2人は人間ではないが、2人とも口をそろえてそう言う。

「チ、死ね!!」

銃を持った男は銃を構え、撃つ。

「よっ」

植木に向かったその弾はドッジボールをよけるような感覚で避けられた。

「な…!!」

『うし。行くか』

「頼むよ相棒さん」

そんなやりとりをすると、銃を持った男が笑う。

「はっ、相棒を庇うつてか！？友情だねえ、じゃあ死にやがれ！！」

銃をもった男たちは一斉に銃を撃ってくる。

「とっ。はっ。突撃ー！！」

『ちょ、待て植木っち！！』

植木は相澤を持ち上げ、それを自分の前にだして男たちに向かう。

「（むしろ相棒を盾にしてるー！！）」

ここで初めて強盗犯たちと中で縛られていた人達の思考がリンクする。

「ちっ、てめえから死にやがれ！！」

一人の男は銃を乱射させる。

『イタイイタイイタイイタイ』

カンカンカン、という音がして相澤の体に銃弾は弾かれる。

「!？」

「百鬼^{ヒツク}夜行!!（ものっそい手加減）」

「ぐぼは!？」

植木はブロックのような物体を突くように発射し、男を気絶させた。

「な、なんで銃が効かないんだ!？」

「なんでもなにも」

『じつじつことぞ』

そこまで言つと相澤はガトリング砲を腹の中から取り出し、強盗犯たちの銃目掛けて発射する。

そう、彼はサイボーグであり、いままでセリフの枠が『』だったのも機械であるためだ。

「「な…!!」」

銃は男たちの手から離れて、カラカラと音をたてて落ちる。

「さーて」

『お待ちかねの』

『「フルボッコタイムだ（よ）」』

「「「た、助け…」」」

『ロケットパンチ!!』『モップヘッドバット!!』

相澤は腕を飛ばし、植木は右手からモップを召喚してそれぞれ攻撃した。

「「ぎゃあああああああああ!!」」

『終わったな植木っち』

「そうだね。あ、アンチスキル警備員が来たよ。後は任せようか」

「そういう訳にはいきません。あなたがたに事情聴取をします」

2人が振り向くと、緑色の腕章をつけた女子中学生：天下の風紀委
ント ジャッジメント

員が立っていた。

「やば…」

「早く来てください」

『あ、俺無関係ですんでー。さようならー』

「ハジメくうくうくうくうん!？」

相澤は足のブーストをフル稼働させ、その場から去った。
「あなたに2人分の事情聴取を受けてもらいます。覚悟してください」

「うわあああああ…」

あわれ植木はその風紀委員
ジャッジメント
に連れて行かれてしまった。

夕方

『あー、疲れた。アイス買いにいこ』

「へー、それはよかったね…」

『（ビクッ！！）』

ゴゴゴゴゴ、という音がして植木が相澤の目の前に立ち上がる。

「人に面倒事を押しつけといて自分はアイスかー…いいご身分だね。機械のクセに」

『ちよ、ちよつと待つんだ植木っち。人は話せば分かりあえる!』

相澤にそんな機能はないはずなのに冷や汗を滝のように流しながら
必死に弁解する。

「そう…でも残念だったね。あいにく僕も君も人じゃないんだよ」

言い忘れていたが植木は人間ではなく、『新天界人^{ネオ}』という人のよ
うで人ではない生き物だ。

『新天界人^{ネオ}』はAをBにかえる能力や、神器という装備を扱うこと
ができるのだが、今の相澤、もといA01にはそんなことはどうで
もよかった。

『…………』

「……………歯あくいしばれっ」

キレた。

植木がキレてしまった。

一番怒らせてはならない人物を怒らせてしまった。

その脅威を一番よく知っている相澤は、

『…さようなら!!』

ブーストを使い全速力で逃げ出す。

「逃がさないよ」ライカ電光石火」

それを植木はローラーブレードのような神器で追いかけ始めた。

その後相澤は植木に捕まり、神器集中砲火を受けてしばらく学校を休む羽目になったのは植木からすればどうでもいい事である。

とある昼夜の黒之微笑（前書き）

あしゅき様よりお預かりしました。管理人キャラとのコラボです。

とある昼夜の黒之微笑

12月某日、夕方、学園都市、とある公園。一人の少女がベンチに座り途方に暮れていた。

「……また携帯忘れた」

どうしよう、と頭を抱えているのは”竜守綾季”見かけは美少女で普通そうに見えるが、服装は異常だった。冬だというのに寒さを感じないのか半袖短パンなのだ。おかげで通りかかる人は体を震わせた。

「あんなことあったばかりなのに……どうしよう、ライエに怒られる」

あんなこととは、前回は参照にしてほしい。簡単に言えば外道と戦ったのだ。

だが、あんなことがあった翌日に出掛けられるその神経の図太さは称えるべきかバカにするべきなのか。今日はちよつとテンションが高いから知らないところに出掛けてみよー等と訳のわからないことをほざいた数時間後にこれである。やはり、天然等という生易しいものではなく、ただのバカなのだろう。

けど綾季は決して迷子になってわけではないのだ！ちょっと好奇心にたかられて冒険に出掛けただけなんだ！と竜守は心のなかで愚痴る。けれどそれで現状が回復するわけがなく、もう一度ベンチに座って重く息を吐いた、口からでた溜め息は冬の空の下、白い息となり空気に溶ける。

「ハア……どうしよう」

携帯もない、保護者（仮）も行方不明、ここはどこ？状態。打つ手なし。そんな時だった、公園に一人、コートとマフラーをつけた者がベンチに座って溜め息をついている竜守を視界に入れる。その人は勇気を振り絞り声をかけた。

「あ。あの、その、だ、大丈夫でしかあ？」

へ？と竜守は顔をあげた、そこには黒と紫のメッシュ、黒いコートにチェック柄のマフラー。メチャクチャオドオドしている女が男がよく分からない人がいた。

「ええっと、どちら様ですか？」

「あつ、ええっと、その、あつ……」

あまりにオドオドしている目の前の人に竜守は首を傾げる、背は竜守の方が低い、竜守はベンチの上に立って落ち着かせるためにその人の頭を撫でる。

「大丈夫、落ち着いて？綾季は何もしないから、ね？」

竜守は安心させるためにその人に優しく微笑んだ。その人は意を決してのかは、はいと答える。

「ぼ、僕は”常闇直人”、です。よ、よろしくお願いでし！」

でしか…ちょっと可愛いと竜守は内心そう思う、それに声も中性的なので分らないが多分女性なのだろう。うん、可愛いし和む。常闇はその様子に気づいてないのか話を続ける。

「あの、その、困ってそうだったんで、その…」

ああなるほど。と竜守は頷く。常闇は純粹に竜守が困ってそんな顔をしていたから声をかけたのだ。しかも竜守の格好は半袖短パンなのである、もしかして服を買うお金もないのかもしれない。それも一つの要因なのだった。

困ってる人は見過ごせない。ある意味、竜守とよく似てるかもしれない。

「そうだったんだ……ありがとう直人」

「よ、呼び捨て!？」

「あ。ごめん。嫌だった?」

流石にちょっと馴れ馴れしかったかな? 竜守はそう思いすぐに謝る。

「え、いや、そのびっくりしただけなんで、別にいいです、よ?」

「そう? ありがとう!」

につこりと満面の笑みを浮かべる竜守、常闇もそれを見て思わず笑う。

「うんうん、やっぱり女の子は笑顔が一番だよね!」

「……………僕、男でし」

「あ？」

――

「……………」

「あ、あの、その、元気出してくださいでし」

結果として言うと、探し人である”ライエ”は見つからなかった。
30分も探したが影も形も見当たらず、結局振り出しである公園に戻ってきた。

「ハア…どうしよう。ここ初めてくるところだから帰り道なんて分からないよー！」

竜守は叫ぶ。まあ知らないところで冒険に出て、あげくのはてには迷子になる。完全に自業自得である。それに時間も時間である。この公園には時計がないため分からないが、太陽は既に三分の一も覗かしていない。

それに、夜の学園都市は素行の悪い奴らが彷徨く時間である。戦い
をなるべく避けたい竜守にとっては早く家に帰って寝たいところだ。
このままだと、危険な夜の中、野宿することになる。それだけはない！

しかし、彼女は気づかない。この世にはホテルというものがあることを。

「あ、あの、もし、よかつたら、僕の家に来ませんか？」

しかし、救いの手は目の前にあった。それを聞いた竜守はガバツと俯いていた顔を上げ、常闇の手を取った。

「え？いいの？本当！？」

「で、でし」

あまりの食い付きように常闇は思わず引く、ドン引きである。

「あ、ありがとうー！」

路頭に迷っていた自分を助けてくれた、今の竜守には常闇の背後に後光が差しているように見えるだろう。あまりの嬉しさにピヨピヨンと跳ねる竜守を見て常闇は現金な人だなあと笑いながら苦笑を浮かべていた。

とその時。

「へえ姉ちゃんたち綺麗だな」

ザッザッと音をたてて男が近づいてくる、男たちは三人とも下品な笑みを浮かべている。竜守は思わず顔を歪める、常闇はびくびくする。

「どうだい？俺たちと一緒に遊ばない？」

「……悪いですけど、綾季達もう帰るんで。行こ直人」

竜守はびくびくしている常闇の手を引っ張って公園を出ようとするが男たちがそれを許さない。

「まあまあそう言わずにさあ」

と男が竜守の肩に触れようとした時、パン！と男は手を弾かれる。竜守はしまった！という顔をする。

「（しまったー！反発状態を解くのを忘れてたー！）」

竜守は純粹だ、それこそ嘘を本当と信じこむ程に。詐欺師に会えば100%騙される。だが、前回のようないけなかった。そのため竜守は自信の能力を使い質量を持つ物を反発するようにしていたのだ。

「っ！コイツ、能力者だ！」

ど、どうしよう！もう誤魔化せないし、けどケンは痛いから嫌だし。そうだ！強い人の振りをしよう！そしたら諦めてくれるはず！この思考にかかった時間、僅か0.5秒である。そうと決まれば早速行動。

「ハア…そうだよ、見たところ貴方達一般人だろうし、あきらめて帰ってください。死にたいなら別だけど（え、えっと。こんな感じだよな？なりきれてるかな？）」

はつきり言って、これを見て振りだと気づけるのはライエだけだろ

う。

そう言われた男達はますます笑みを浮かべる。そして懷からウォークマンを取り出す。

「俺らさあ、前に能力者に痛みつけられたんだよねえ。だから、その時の鬱憤を姉ちゃん達はらさせてもらっぜ！」

カチツとボタンを押す、するとウォークマンから金切り音が流れて竜守の脳に激痛が走る。

「ッ!！」

あまりの激痛に竜守は頭を抱えて踞る、男達はそれをニヤニヤしながら見下していた。

「（何……これ……頭が……ッ!！）」

「ハハハ!! スゲエなあ! これがキャパシディダウンの力か!」

キャパシディダウン、それは一種の音響兵器。能力者の演算能力を阻害し、大幅に下げる道具。竜守は『超能力者』だ、能力は完全に

抑え込むとはいかないが『弱能力者』程度にまで下げられてしまう。

「綾季ちゃん！」

常闇は効いてないのか、普通にしている。しかし、その顔は焦燥に塗りつぶされていた。

「ハハハ！無駄だって！お前の声だって認識出来てるかすら分かんないだぜ？」

「おい、はやくやつちまおうぜ？俺もう我慢出来ねえよ！」

「そうだなあ、んじゃいつちょ腰振りますか」

下品な笑い声を上げながら男達は竜守に手を伸ばす。

「に、逃…げ、て。直人（誰か、助けて……私はいいからせめて直人だけでも！）」

竜守は助けを強く願うが、そう毎回毎回ヒーローが来るはずもない。涙が一筋流れた、その時、太陽が地平線へと消えた。

パン！常闇がその手を弾く、男手を押さえて常闇を睨みつける。

「何すんだこのアマ！」

「……いかん、いかんねえ。こんな美少女に手を出すなんて」

常闇は刃のように雰囲気を纏い、男を睨みつけた。

「美少女は汚すもんじゃねえ、愛でるもんだ」

常闇は先程とは全く逆の雰囲気を纏っていた。オドオドしていた気の弱さは男にタンカされる程に強くなり、その目はつり上がった。髪は黒と紫のメッシュ、それがより恐怖心を駆り立てた。男は思わずその雰囲気飲まれそうになる。

「く、くそ！行くぞお前ら！」

しかし男はなんとか常闇の雰囲気に耐え残りの二人に声をかけるが、声はだれもない公園に響くだけだった。

「お、おい！お前、ら」

男は不安になって振り返る。そこには真っ黒い何かに刺され、まるでその罪を償うかように十字架のようなポーズをしたをいた男二人がいた。

「ひつ、な、なんだよ…これ？」

「安心しろ。お前もすぐにああなる」

男は振り返る、そして見る。自分を殺そうと襲ってくる、無数の黒の槍を。

そこで男の意識は途切れた。

――

「う、うっ……ん？」

暗い部屋の中、竜守は目を覚ました。頭がボーッとする。考えが纏まらない。暗くて見えないが辛うじて机の上にコップがあることだ

けは分かった。目を覚ますために竜守は中身があるかどうかを確認して、コップを傾けた。

「ブーッ！ゲホッ、ゲホッ！に、苦アアア！」

そして吹き出した、珈琲のようだが、苦い、ひたすら苦い。どれだけ珈琲が好きな人でもこれほど苦い珈琲を飲む人など存在しないだろう。まるで炭焼きで炭になった物の苦味を百個分詰め込んだ苦さだ。わかさ生活もビックリである。これを飲む人がいるのだとすれば、それはただのキチガイか、味覚障害を持つ人だけだ。

だが、おかげで目は覚めた。とりあえず状況を判断しよう。確かに自分は公園で男達に変な音を聞かされて、何も考えられなくなって、そこで意識は途切れた。

「……判断材料、何一つないじゃん」

もしかすると、自分は男に連れ去られてここに来たのかもしれない。暗い部屋で一人、ヒトリ。そして竜守の頭の中で一つの記憶が浮かトラウマび上がる。

「ひ、い、嫌だよ…嫌だよお」

竜守はその場で踞り、小さく小刻みに震え出す。しかし、どれだけ嘆いても部屋には竜守の怯えた声しか響かない。

その時、コンコンとドアがノックされる。思わずビクツと震える。もしかして、あの男達の仲間かも知れない。ケンカは嫌いだが、大人しくやられるつもりはさらさらない。震える体に鞭を打って、演算を始める。的はあの扉の向こうにたたずんでいる誰か。ドアノブが回る、珈琲を吹き出したことによつて空気中に漂っている水分を凝固させ、小さいが槍にする。扉が少しずつ開かれ光が射し込んでいく。狙いを定め、いざ！

「あれ？起きてたんだ。丁度ご飯出来たから、持ってきたよ」

「へ？」

ビシャッと、水の槍が床に落ちた。そこいたのは自分を色々と助けてくれた、後光の射す人、常闇がいた。

リビング、中々質のよさそうなソファーに二人は座っていた。一人は竜守、もう一人は常闇だ。竜守はよほど腹が減っていたのか常闇

の作った炒飯をものすごい勢いで食べる。それを常闇は冷や汗をたらしながら微笑んで眺めている。

「んぐんぐ…つまり、直人は二重人格みたいなものなんだよね？」

「まあ、簡単に言うならそんな感じだな。あと、焦らなくていいからもつとゆっくり食え」

常闇が竜守に言った情報をまとめるところだ。

自分は能力の関係で昼と夜の性格が替わる。昼は竜守の見た通りの気が弱く常にびくびくしている臆病な性格、夜は男にタン力をきれるほどに気が強くなり、口調も荒くなる。そして能力が使えるようになる。その能力は『黒之微笑』影や闇を操る能力で常闇自信『超能力者』らしい。なので竜守も『超能力者』で『万有引力』だと言うととても驚いた顔をしていた、理由を聞くと『まあ綾季ちゃんには関係のないことさ』とはぐらかされた。

次に竜守がここまで連れてこられた経緯だ。竜守が気絶した後夜となり常闇の能力は解放、あつという間に男三人を倒したあとどうするか考え結局自宅に連れてきて寝かしたらしい。そのあと目を覚ました時のために飯を作り、部屋に置きに入ったところああなった、ということだ。

「ンゲング……んぐッ!？」

「あーあー、焦るなって言ったのによ。ほれ、水だ」

急いでろくに嚙まずに食べていた結果、やはりというべきか喉に米が詰まる。常闇はそれを見て苦笑いしながら水の入ったコップを手渡す。竜守はそれをはんば奪うように取って一気に飲み干した。

「プハア!…危なかった」

「ったく、あれほど言っただろうが」

竜守はえへへとはにかんで誤魔化す、それを見た常闇は呆れたように溜め息をつく。普段なら文句の一つも言うところだが、こんな純粋度100%の笑顔を見ては責められない。自分も存外甘くなったなと常闇はもう一度ため息をついた。

その時、リビングにチャイムが響く。誰かがきたようだ。

「ああ、もう来たのか。速かったな」

常闇は誰が来たのか分かったような口調で玄関に向かう。竜守首を

傾げたが気にせずチ炒飯を再びスプーンですくった。

少し経ち、竜守はご飯三号分は合ったであろう炒飯を一粒も残さず平らげていた。どうやらかなり腹を空かせていたらしい。

『おい、綾季ちゃん！お迎えがきたよー』

「？お迎え？」

竜守は綾季を迎えに来てくれる人なんていたっけ？なんてことを考えながら満腹感に浮かれながら玄関まで歩いていった。玄関には笑顔で、いやニヤニヤしている常闇と常闇を殺すと言わんばかりに睨んでいるライエがいた。ってか一触即発の空気だった。

「ライエ！直人とケンカはダメだよ！」

「……………チツ、覚えとけよ根倉野郎」

「まあまあ青春少年。愛しの綾季ちゃんが来たんだから機嫌直せよ」

「……………テメエはやっぱりここで殺す！」

「おっと、遊んでくれるのかい？」

「やめなさい！ケンカはダメ！」

常闇は冗談だ、と言ってまたニヤニヤし始める。それを見てライエは思わず手に持っている釘を投げそうになるが竜守の視線に気づき舌打ちをしながら釘を納めた。

「……帰んぞ、説教はそのあとだ」

「ハハハ……はい」

ライエはこんなところに一秒もいたくないと思わせるほどのスピードで玄関のドアを開けた、竜守は常闇にバイバイ、またねと言ってライエの後を追った。それを常闇は笑顔で見送っていた。

その背中が見えなくなり一人になった時、常闇は携帯を取りだし、誰かと通話し始めた。

「もしもーし、『黒之微笑』だけど。お前から受けた依頼 『万有引力』の殺害 だけど、あれ、破棄させてもらっわ」

『ッ———！———！』

「うつせえなあ、もう決めたんだよ。それにやる気がない。ああ、金はびた一文返さないからな」

「———！———！」

「あーあー、聞こえないーい。んじゃあな」

まだ何かしゃべっていたようだが、常闇は聞こえない振りをして通話を切った。冬の寒空の下、常闇は空を見上げて今日一日の出来事を思いだし、笑う。

「またね、か」

竜守が別れ際に言った言葉が常闇の頭の中に駆け巡る。常闇は楽しそうに嬉しそうに笑うと自分の部屋へ夕飯の用意をするために帰っていった。

「ハア！？なんじゃこりゃ！三合分もあつた炒飯が全部食われてやる！あれ俺の夕飯でもあつたのに！恨むぜ綾季ちゃん！」

誰もいないリビング、綺麗に平らげられていた炒飯が盛られていた皿を見て常闇は頭を抱えた。竜守は何故かくしゃみが出たとか。

とある昼夜の黒之微笑（後書き）

あしゅき様、ありがとうございました。感想などお待ちしております。

「サンプル」忘 善人（前書き）

黒羊様よりお預かりした、サンプル小説となります。

「サンプル」忘 善人

スキルアウトと呼ばれる連中がいる。

基本としてレベル0の集団が集まった、いわゆるこの学園都市におけるはぐれ者達。だが、はぐれ者だからといって力が無いのかといわれればそうではない。

武器を持てば当然、単純な数だけでも力になる。

古河^{ふるかわ}もまた、そう考える一人だった。

確かに自分は超能力を得られなかった。だがそれがなんだ。それで奴ら能力者に劣っているだなんて認めない。

能力があるからといって威張り散らす奴らこそクズだ。奴らと仲良くする奴らも同じ。それを正当化するこの街全てが気に入らない。

だから古河は数を集めた。武器を集めた。

あらゆる手段で、あらゆる奴らを。

そうして手に入れた力。これは自分の力だ。

古河はその力で能力者達を襲った。威張りくさった能力者が、地に伏して助けを乞うのは快感だった。涙と鼻水でグシャグシャになった顔で謝る姿は痛快だった。

そうして屈服した能力者を兵隊として使うのもまた、王様にでもなったように気持ちが良い。

能力者を狩り、狩った能力者を呑み込んだチームはみるみるうちにデカくなった。

気付けばチームの名前が決まる前に、この学区で逆らう奴がいなくなる程に。

ジャツジメントだろうとアンチスキルだろうと関係ない。むしろ俺たちが奴らを狩ってやる。

俺たちを馬鹿にする奴ら一人残らず、狩りつくしてやる。

そう決意していた所だった。

仲間と共にファミレスで昼食を食べていると、小さな子供——
おそらく小学生か中学生——が突然古河に向かってふざけた事を言った。本当に、ふざけた内容だった。

多分この少年は古河たちの事を知らなかったのだろう。

古河たちの事を知っている周囲の者達は顔を青くしてアンチスキルかジャツチメント辺りに連絡しているのが見えた。

しかし自分達が逃げる必要などない。来れば狩られるのは向こうだ。だから古河はゆったりと少年に尋ねた。

『デメエ、能力者か？』

本音をいえばこの質問に意味はない。既に報復相手が能力者だけでなくなってしまうていた古河にとって、自分に舐めた事をした少年は絶対許さない。たとえ彼が無能力者であろうと。

少年はまだ状況がわかっていないのか『うん』と無邪気に頷いた。意味の無い質問だったが、返答はとても愉快なものだった。

古河が席を立つ。仲間もニヤニヤと笑みを浮かべながら立ち上がる。

そうして古河は少年を連れ店を出ると、人気もない、監視カメラの死角に連れて行った。

その日の夜、古河はチームのアジトへ向かっていた。
基本チームの活動は自由で、たとえば古河が能力者を狩るから人を
集める、と命令した時に連中は集まりそいつを数で潰す。

なのだが今日はちょっと違った。

家に帰ってから、チームの副リーダーの立場にある仲間から携帯に
連絡が入った。今夜メンバー全員を集めた集会をしよう。
何故だと聞くと、彼はそろそろチームの名前を決めた方がいいと答
えた。今夜それを古河の口から発表しよう。

古河が作り上げたチームはあまりにも急激に大きくなってしまった。
最初は自分と同じような連中を集め。その後もひたすら熱心に活動
を続け、似たようなチームを吸収し、能力者を従え。その後色々あ
って時間がなく、まだ名前がなかった。

彼自身、そろそろ考えていた事だった。なので仲間の言葉に同意し、
ついでにメンバーを今夜アジトに集めるよう指示を出した。

古河のチームのアジトとはある事情から使われなくなった研究所。
というか、研究が始まる前になんらかの理由で実験が凍結され、建
物だけ建てたはいいが、一度も使われることもなく捨てられた。
機材も何も運び込まれていない、ただっ広いスペースがあるだけの
伽藍の箱。

とかく数の多い古河たちにとっては都合の良いアジトだった。

古河がアジトに入ると、既に仲間は全員集まっているようだった。

元々の仲間に加え吸収したチームの連中、そして奴隷にした能力者共。

圧巻だった。

数もさることながら、武器の質も捕まえた能力者達の兵力も。これだけの力があればこの街全てを支配する事も出来る。そう思わせる程に。

「おー、やっと来たか」

見ると例の副リーダーの男が古河に手を挙げながら近付いてきた。彼もまた、今夜の光景に胸躍らせているようで、いつもよりテンションが高い。

古河はリーダーらしく、平静を装って応える。自分まであがっているとされたら示しがつかないと。

今夜、チームが生まれる。自分が名付けた最強の――

「それで、今日はどこ襲うんだ？」

最初、古河は彼が言った事がわからなかった。

黙ってしまった古河に、男は不審そうに首を傾げ。

「メンバー全員で襲うなんてどんな野郎だよ？ やっぱ高位能力者か？ なら常盤台の女なんて最高だよな。あの高慢なお嬢様を捕まえて、連中みたいに奴隷にしちまえりゃあよー」

「ちょ、ちよつと待て」興奮して話す男を制して、古河は確認する
「今日はチームの名前決めるんじゃないかったのか？」

副リーダーはきよとした顔をした。

「なに言っただよ。お前が、デカい狩りだから全員集めろって命令だしたんだろ？」

「違いーよ」割って入ってきたのは別の男「今日は誰が幹部か決めるんだろ？」

古河、副リーダーが揃って困惑する。それだけでは終わらない。それを機に次々と仲間たちが今日集まった理由を述べ始める。しかしどれもめちゃくちゃだ。

急激に大きくなったのだからキチンとした統率がとれてないのは仕方がないが、ここまで情報がバラバラなのに、メンバー自体は全員がしっかり揃っている。それこそが異常だった。

「待て、待てよ」古河は副リーダーの男の肩を掴んで「お前、今日俺に電話したよな？」

「はあ？　してねえよ」

異常は決定的だった。

その時、混乱したこの場を鎮めたのは古河の言葉ではなく――
少年の笑い声だった。

誰かが指をさす。だだっ広い施設に隠れる場所はない。すぐにその人物は見つかった。

建物が一番奥。体育館でいうと壇上のようなになったステージに少年は立っていた。

おかっぱ頭の、中学生ぐらいの少年。

彼はチームのメンバーではない。というか、あの子供を古河は知っている。

昼間、ファミレスで古河にふざけた事を言ってきたので、仲間と共に制裁してついでに迷惑料として財布を奪った能力者の少年だ。抵抗らしい抵抗もしてこなかったのですぐに飽きて放り捨てた。

「デメエか……」

少年は口元にうっすら笑みを浮かべるだけで答えない。

「昼間の復讐のつもりか？　なら失敗だったな」

この異常を引き起こしたのがこの少年だというのは、状況からして明らかだ。方法はわからない。だがこれだけは確かだ。
こいつは、俺を馬鹿にした。

「だって馬鹿でしょ？」

「……っ」

心を読んだような一言だった。途端、頭の中で何かがキレた。

「ぶっ殺せ！ 能力者だ！」

能力者。それだけで古河以外の人間達には理由は充分だった。

少年に一番近かった仲間たちが、各々ナイフや警棒といった武器を取り出してステージに乗り上がろうとする。

——閃光が瞳を焼いた。

古河には何が起こったのかわからなかった。

気付いたら、ステージに上がろうとしていた数十人の仲間が倒れていた。

あの少年の能力か、と目をやって、再び驚く。

ステージに少年はいなかった。代わりに、どこか良いところのお嬢様といった女が立っていた。

少年はいない。代わりに立つスタイルの女が顔に引き裂くような笑みを張り付ける。——直後、再び彼女を中心に光が爆発した。まさに光線といったそれが、さらに仲間を数十人吹き飛ばし、ついでに能力者用に造られた研究所のぶ厚い壁が飴細工のように溶解

していた。

古河は理解し、青ざめた。この女は能力者だ。それもかなり高位の。だが、だからといって退く理由にはならない。

「こっちは人数も揃ってんだ！ 全部使え」

その指示で、次に仲間たちはアジトのあらゆる場所に隠していた武器を取り出す。

それは銃火器。裏ルートからかき集めた、科学都市で生まれた兵器たち。

確かにあの女の光線は強力だが、これだけの武器を持った人数相手に対処できるとは思えない。

古河が勝利を確信したと同時に、けたたましい発砲音。

しかし古河は絶句した。なんと仲間たちが同士討ちを始めた。

「な、なにやってんだ!？」

「わからねえ！ アイツら突然——ぎゃっ!!」

次々と自らが集めた銃弾に倒れていく仲間たちに古河は狼狽する。

そうして再びステージを見た時、目を疑った。

いない。あの光線を放っていた女は消え、しかし少年が戻ってきたわけでもなく、いたのはまた別の、今度は少女だった。

ステージの縁に腰を下ろし優雅に足を組む姿は先ほどの女同様、傲慢な気品を感じさせる。

どこかの学校の制服姿の少女は、同士討ちする古河の仲間たちをステージ上から愉快そうに睥睨し、手元のリモコンを弄んでいる。無能力者とはいえこの人数を同時に操っているのか？

ぞっと、古河の肌が泡立つ。

「ど、奴隷共を使え！」

もはやリーダーの威厳などへったくれもない、泣き叫ぶような声だった。

それでも同じくパニックになっている仲間たちが奴隷とした能力者達に強制して攻撃させた。まるで花火のように色とりどりの閃光がステージ上の少女に直撃——しない。光はテープを巻き戻しように同じ軌道を辿り、最終的に放ったはずの本人たちに戻り仲間もろとも炸裂した。

ステージ上に少女はもういなかった。代わりに立っていたのは、髪も服も真っ白な少年。

もう、わけがわからなかった。何もかもわからなかった。

恐怖から敗走を始めた仲間は、しかし逃げられない。

天使のような白い六枚の翼を背中から生やした少年から放たれた烈風や光が、仲間たちを紙屑のように薙ぎ倒していく。

気付けば、残っているのは果然とへたり込んだ自分だけだった。

数分前までこの街すら支配出来ると信じた彼の力は、何も残っていなかった。

ふと、今日狩った少年の最初の言葉を思い出す。

『お兄さん幸せそうだね。いいなあ。僕もそれ欲しいな』

（なんなんだよ……）

空から地上に降り立った少年は、既に少女に変わっていた。

少女は親指でコインを上弾く。ゲームセンターで使われるような普通のコイン。

落ちてくるそれを、少女は、彼女ならば決して浮かべないような凶悪な笑みでもって弾いた。

「なんなんだよテメエはああああああ！！」

その日、名前の無いチームは壊滅した。たった一人の能力者によって。

「サンプル」忘 善人（後書き）

黒羊様、ありがとうございました。

とある人外と超能力者（前書き）

ティンク様よりお預かりしました。管理人キャラとのコラボになります。

とある人外と超能力者

「ねー、ライエ。もうそろそろお昼ご飯食べない!？」

この寒いというのに半袖短パンのポニーテール少女、竜守綾季は提案した。

今はちょうど休日のお昼時。普通の生活をしていれば普通に腹が減る時間である。

しかし彼女の連れである金髪の少年、ライエはぱつさりと言った。

「ダメだ」

「えー?!ライエおなかすかないの?」

「ダメだ」

「ねーいいでしょ!?!あそこにラーメン屋さんあるし」

「ダメだ」

「ねーライ「ダメだ」」

「……」

一体何が彼をそこまで強情にさせてるのであるのか。答えは簡単である。この少女、竜守綾季が天然で超トラブルメーカーだからだ。つい一週間程前に二回も面倒事に巻き込まれ、正直ライエは疲れていて、ぶつちやけ早く家に帰りたいかった。

それにいつどこでまた面倒事に巻き込まれるか分からない。油断は禁物なのだ。

が、彼も腹が空いていない訳ではなく、当然、

グ~~~~

……こうしてお腹が可愛い音をとてる時もあるわけで。

「なんだ…ライエもお腹空いてたんだ！じゃ早く行こう！！」

「……………ちつ。今回だけだぞ」

彼も空腹には勝てず、仕方ないと自分で言い聞かせながら竜守の後を追ってラーメン屋に入ってしまった。

「へいらっしやい」そんな男の声が響く。2人が入ったそのお店はなかなか繁盛していて、それなりに賑わっていた。ラーメンのおいしそうな匂いが2人の鼻をくすぐる。

2人はカウンターの席に座り、メニューを覗き込んだ。

「どれにするんだ？」

「んーとね……………あ！これ面白そう！！」

おいしそうならともかく面白そう？そう疑問に思ったライエは、竜守が指差している絵を覗き込んだ。

早食い企画！！

超大盛ネギラーメン！！

（麺15玉分＋ネギ100グラム）

30分で完食したら10000円！！

食べきれなかった場合は10000円いただきます

「……………」

ライエはそのメニューを見て驚愕していた。

麺15玉でも異常なのに、それを30分で完食しろなんてバカにしているにも程がある。

ましてやネギ100グラムも食べたなら胸やけをおこしてしまう。

「……………」

「……………どう?」

「……………やめとけ」

「あはは…だよね」

さすがに竜守もこれを食べきれとは思ってないようで、彼女にしてはあっさり引き下がった。

だか2人は知らない。このラーメンを食い尽くせる可能性のある男が一人だけいることを……………

「いらっしやい!!」

そんな店長の声が響く。

おそらくはまた客が入ってきたのであろう。

『またラーメンか植木っち。本当にラーメン好きだなお前』

「僕はねハジメ君。1ヶ月毎日ラーメンが食べられるなら死んでもいいと思っているんだ」

『あ……………そ』

植木と呼ばれた鮮やかな緑の髪をしたライエと同じ年くらいの少年と、これまたライエと同じ年くらいのハジメと呼ばれたやけに特徴的な声をした少年は、竜守達の方に歩いてきて、竜守に話しかけた。

「すみません、ここのとおり座ってもいいですか？」

竜守が周りを見渡してもに2人分座れる席がなさそうだったので、

竜守はいいよと答えた。

「あ！！この店にも早食い企画のラーメンがある！！」

『は！？植木っち何考えてんだ？！早まるな！！やめとけ！！』

「（まああれはやめといた方がいいよね）」

竜守はそう思ったが、ハジメ、もとい相澤はそんなことを心配しているのではなかった。

『この店潰す気か！？』

「大丈夫だハジメ君。僕今日すごく調子がいいんだよ！！」

『むしろ心配でしかねえ！！』

「「え！？」」

となりにいた竜守とライエは驚く。
今彼はなんと言った？！

「すみませんこの早食いラーメン『3つ』ください」

『ダメだ……この店終わった………』

相澤のつぶやきは、誰にも聞こえることはなかった。

「じゃあ始めるぜ。制限時間は一杯につき三十分だ」

『どうだ？ 植木っち』

相澤は植木に聞く。

さすがに早食い企画のラーメンだけはあり、竜守やライエ含めた客が全員植木に注目していた。

植木の目の前には超大盛ネギラーメンが三杯。

すると相澤にとって予想どおりであり、全く望んでなかった言葉が

かえってきた。

「うん。超余裕」

「「「え？」「」」

『……………やっぱり』

「いただきます」

「え、ちょ、今君なんて言った？」

植木の発言にさすがの店長も驚く。

「え？ちよつと君…」「ふう…休憩」え！？」

隣の椅子に座っていた竜守は植木に聞くが、植木はいきなり休憩を始めた。

彼女はラーメンの丼を覗き込み、驚愕した。

「……………え?!もう三分の一は食べちゃった」

『…………もうどうにでもなれ』

植木のとなりの相澤は、半分あきらめたような感じで普通のラーメンをすすする。

「なに！？……………これはすごいな」

ライエも丼を覗き込み、驚きの表情を見せる。

「な……………」

店長もむちゃくちゃ驚いている。

『店長……………夜逃げの準備をすることをオススメするぞ』

相澤の妙に現実味を帯びた言葉に竜守達は笑うしかなかった。

その後はもう散々だった。

植木は三杯完食した後さらに三杯注文し、10分で全て平らげた。

ちなみに店長は泣きながら自分の荷物をまとめていた事は言うまでもない。

植木達（竜守、ライエ含む）が外に出ると、竜守は植木に話しかけた。

「すごいね君…名前なんて言うの？」

「ああ、僕は川中植木、レベルは0。んでこっちが……」

『相澤一。レベルは同じく0』

「ほらライエ、レベル0だって。信用できるでしょ」

「嘘を言ってる可能性は考えないのかバカ」

「いや、本当だって。」

『信じろよ……ん?!』

相澤が何かに気づいたようにあたりを見回す。三人は何事かと相澤と同じようにあたりを見回した。

『危ない!!』

「キャ!!」

相澤が竜守を突き飛ばすと同時に、轟音がひびいて銃弾が相澤の頭を貫いた。

「ハジメ君!!」

「は、ハジメ？」

「?!」

三人は驚く。

どこからか「チッ」という声が響いて男が去って行くのが植木には

見えた。

「う、嘘だよね？」

竜守はつぶやく。

自分のせいで関係のない人を死なせてしまった。
その現実が彼女に重くのしかかる。
今彼女の心の中には絶望しかなかった。

「チツ……………ん!？」

ライエが相澤の異変に気づく。

「おい。こいつなんかおかしいぞ」

「……………へ？」 竜守は相澤の異変にまだ気づかない。

「こいつ……………頭撃ち抜かれたのに血が出てねえ」

「あ」

そう、倒れた相澤の頭は撃ち抜かれた筈なのに血が全くもって出てなかったのだ。

「……………もうバレバレだよハジメ君」

「「へ？」」

『あ、そう？』

2人は驚いた。頭を撃ち抜かれ少なくとも重傷を負ったはずの相澤が立ち上がり、どこにも傷がない状態で話し始めたからだ。

『こんど赤い液体が出る機能でもつけてもらおうかな……………』

「怖いからやめて」

「な…なんでハジメは生きてるの？」
竜守は聞く。

まあ当然の疑問であろう。人が頭を撃ち抜かれて平気で話していたら誰でも驚く。

『ああ…それはな。こういうことだ』

そう言つて相澤はシャツを脱ぐ。

そこにあつたのは相澤、いやA01自慢の輝くメタリックボディだつた。

「な…なにこれ!？」

「これは……」

『俺はな。機械人間………つまりサイボーグなんだ』

「……さいボーグ?」

聞き慣れない言葉が出てきたせいかな竜守は首をかしげている。

「…確かにすごいなこれは」

ライエはカンカン、と相澤の腹をノックする。

『だから銃弾を跳ね返せたわけだな』

「すごいね……」

ラーメン店の死神と呼ばれた新天界人に機械人間。

そんな異常な2人に会おうなんて日は、今日が最初で………

今日が最後であろう。

とある人外と超能力者（後書き）

ディング様、ありがとうございました。

【サンプル】とある物理の幻想空間（前書き）

だいふく様よりお預かりしました、サンプル小説となります。

「サンプル」とある物理の幻想空間

もし重力を無くせたら？

もし物体の質量を無くせたら？

既存の物理法則では、まずそんなことは不可能だろう。

それを叶えるのが『ワンダーランド幻想空間』

幻想の世界の不思議の国。

物理法則の通用しない世界がここに存在する――

学園都市のとあるスキルアウトの溜まり場。

ここにスキルアウトではない一人の高校生が入ってきた。

「オイ！テメエ何入ってきてんだ？」

スキルアウトの一人が叫んだ先には、金髪碧眼の青年。肩に少し掛かる程度の金

髪は男にしては長いといえるだろう。

その無駄な肉のない身体からは華奢な印象をつける。

「いやいや、何もするつもりなんかないよ」
そう青年は告げた。

どうやら何となく入ってきただけのようだ。

「調子乗ってんじゃねえぞコラア！」

不良の一人が青年に掴み掛かる。

その手が青年の首で止まる。

誰もが不良が青年の首を掴んだと思った。

「うつ！」

呻き声上がる。

ただしそれは不良の声。

苦悶の表情を浮かべているのは掴み掛かった不良の方だ。

青年は全く表情を変えていない。

それどころか笑っている。

「ごめんね、僕的能力は大したことないんだけど…」

不良の手は彼の喉の直前で止まっていた。

青年はまるで自分に向かって来ることが嬉しいかのような笑いを止めずに、

「もしかしたら君たちが弱いのかもね？」

不良たちは勿論、その台詞を挑発と受けとる。

「てめっ、調子乗ったこと抜かしてんじゃねえぞ！」

先程殴り掛かってきた不良が一步下がり周りにいた別の三人が青年に襲いかかつてくる。

一人は青年の左腰に蹴りを。

一人は青年の左頬に拳を。

一人は青年の右脇腹に――ナイフを。

ナイフが腹に刺されば普通の人間ならば致命傷だろう。

しかし彼らは先程の不可思議な現象で、青年が普通の人間ではないことはわかっていないはずだ。

「なっ!」「てめっ!」

口々に驚愕を声に出す不良たち。

その手は全て、青年の身体に触れる直前で止まっている。勿論ナイフも例外ではなかった。

「だからやめといった方がいいって……」

青年は溜め息をつきながら面倒臭そうな声で呟く。

「てめえ、一体何者だ!?!」

ナイフを刺してきた不良が叫んだ。

青年は微かな笑みを浮かべて自身を示す言葉を告げる。

「『ワンダーランド 幻想空間』だよ――」

不良がの思考が恐ろしいものに突き当たった。

「まさか……お前があのかの『幻想空間』なのか!?!」

『幻想空間』

学園都市に七人しかいない超能力者のなかでも一位二位を争うと言われている能力者。

本名は誰も知らず、それ以前に名前があるのかすら分らないといわれる。

そんな化け物がスキルアウト達の前にいる。

——勝てるはずがない。

こんな化け物に勝てる人間がいてたまるものか。

そんなスキルアウト達の恐怖心が幻想空間には手に取るように分かる。

「さて、どうしようか……」

幻想空間は、薄いピンク色をした舌を口から出して唇を濡らすように舐めた。

先程までとはまるで違った性格になっているように見える。

「ひっ！」

スキルアウトの一人が余りの恐怖に、声を上げた。

しかし、それで許すわけがない。

「まずは地面に埋めようかな……」

その言葉の直後、幻想空間の周りにいた不良達の身体に今までは感じなかった重

さのし掛かってきた。

まるで、引力に相対する斥力がなくなっただかのように、不良達は地

面に叩きつけられる。

「うがあああ！」

少しずつ地面に沈んでいく不良達。

これが『幻想空間』

不思議の国に迷い込んだ彼らは、既存の法則は通用しないことを思い知らされる。

そうこうしているうちに、うつ伏せになった不良達の顔が埋まり始めた。

「さあて、このままだと死んじゃうけどどうする？」

まるで人を虐める事が楽しいかのように笑顔を見せる幻想空間。

「ゆ…許してくれえ！」

誰かが謝罪を述べた。

それを合図にするようにスキルアウト達は口々に謝り始めた。そんなことをしている間にもどんどん沈んでいく。

「まあ許してあげるよ…、俺なんか大したことないし…」
あっさり許した。

その表情はこの溜まり場に入ってきた時の顔に戻っている。

スキルアウト達の身体にかかっていた、異常な程の地面に向かっていた力は直ぐ

に消えた。

消えた、という表現は正確ではないだろう。
元々存在していた力がなくなっていたのが元に戻っただけなのだから。

「す…すまねえ…」

下を向きながら立ち上がった不良達のリーダーと思われる人物が幻想空間に礼を

言った

—— 筈なのだが、既にその場には幻想空間は居なかった。

まるで昔読んだ絵本に出てくる不思議な猫のように。

彼がどこに行つたのかはスキルアウト達には分からない。

それ以前に、人間と怪物との思考を比べる方が間違っている。

この日、スキルアウト達は己の認識の狭さを思い知らされた。

周りの色彩は青一色しかない。

ここは学園都市上空。

そこを幻想空間が一人歩いている。

彼は引力の無効と有効を高速で切り替えることで宙に浮くことができる。

更に、空気には触れることが出来ないという法則を消すことで空気を蹴る事がで

きるようになるので、結果として歩いているように見えるのだ。

彼は気ままに空を歩きながら呟く。

「学園都市で誰が一番強いんだろうなー。

俺は興味ないんだけど…」

「でも面白そうなやつはいるなあ。万有引力に黒乃微笑、圧殺空間、大気支配に

事象選択と完全移動。大能力者だったら超進化論ってとこかな…」

幻想空間は不敵な笑みを浮かべ更に呟く――

「まあ、俺の能力じゃあ勝てないだろうけどね――」

「サンプル」とある疾患の絶対排斥（前書き）

管理人より、サンプル小説です。

「サンプル」とある疾患の絶対排斥

何度でも、何度でも。

竜守綾季を自分の元に繋ぎとめておくためなら、何度でも。

竜守綾季を自分から奪おうとするものがあるのなら、何度でも。

彼は、その存在を消し去ろうとする。

——とある疾患の絶対排斥——

真つ暗闇。そう形容するのが相応しいそこに、その少年は立っていた。触ったら崩れてしまいそうな、硝子細工のような少年である。そんな、繊細さを感じさせる金髪に碧眼を持つ彼は、

——自分は病気なんじゃないか、と危惧していた。

彼の目の前には、『駆逐すべき敵』の潜むらしい研究所がある。何が楽しくて自分はここに來たのやら。敵と言っても、自分の敵ではない分余計に疑問を抱かざるをえない。

ただここに、アトラクタ 竜守綾季を狙おうとする無鉄砲な馬鹿が集っているだけではないか。自分には全くとっていいほど関係ない。

だが何だ、この状況は。ここにそういう連中が居ると掴んで、気づいたらこれだ。何か夢遊病だとか、そんな症状の一部なんじゃないだろうか。そんな風に、ライエは解決しないはずの問題に悶々と頭を悩ませていた。

「……あー、クソ」

一向に解ける兆しを見せない難問に、ついにライエは痺れを切らして愚痴を漏らす。結局こんなところに自分は用が無いのだから、さっさと家に帰ってしまった方がいい。

と、そこまで考えて、ライエは。

——正面の鉄の門を、問答無用で吹き飛ばした。

*

(…絶対、病気だ。今度病院行った方がいいな)

そう思いつつ、暗い廊下を歩くライエの足は止まらない。

廊下に響くのは警報というやつだ。正面から門を吹き飛ばし、さらには玄関までもを破壊した彼を、誰が野放しにしておくものか。自分を威嚇するように鳴り続けるサイレンを無視して、ライエは廊下を歩いていく。行く当てなど、彼には無い——つもりなのだが。

無意識に、『敵』を探している自分に無性に苛立つ。

苛々を無理矢理抑え込んだ彼が行く先に、一つ緑色の光が差す扉が見えた。耳をすませると、数人の男の声が聞こえてくる。急に鳴った警報に、混乱しているらしい。警備員の一つでもつけておけばいいのに、なんて思いながら、ライエはそこへ向かう。扉は半開きになっていて、そこから緑が溢れていた。素直にドアノブを引くのも億劫で、やはりその扉も吹き飛ばす。

バゴン！と鈍い音をたてて、扉が壁にぶち当たり止まった。男達の声も一瞬止む。

「……こんばんわ、お前らが馬鹿ですか」

いきなりの侵入者の、いきなりの質問に、男達の半数は呆けたような顔をしていた。もう半数は「何だお前は！」とありきたりなことを叫んだ。

男達の人数は大体十人。その全員が白衣を着ている。ライエにとってはとてつもなく醜い光景だった。硝子球のような瞳を細めて、ライエは舌打ちを漏らす。

「…研究者と白衣ってやっぱりセットなんだな」

——見てるだけでイラつくんだよ、それ。彼がそんな言葉を吐き出したのと同時に、研究者の男の一人が悲鳴をあげた。

「ぐああああああああッ！！！」

全員が、悲鳴の主を見る。見れば、男の目には深々と釘が突き刺さっていた。

「あ、あ、目が、目がああ……！」

「……やっぱり俺病気だな、うん」

「な、何を言っているんだお前は……！」

事態の深刻さに我を忘れて逃げ惑う研究者達。その一人が、ぼつりと呟いたライエに向けて怒鳴り、手持ちの拳銃を発砲した。

だが、弾丸が貫いたのはライエではなく——その研究者の右肩だった。

「——白衣見ると苛々する病つてことだ」

彼らがその意味を理解できるはずもない。とにかくわかるのは、これから始まるのは一方的な虐殺であるということだけだった。

*

「さて、と」

床は鉄分でできた生暖かい液体で濡れている。その海に浮かぶ十数体の骸を眺め、ライエは呟いた。

（……事情聴取忘れてたな）

まずい、いつも一緒に居るせいであの天然馬鹿少女のうつかり癖がうつっている。そのことに何となくまた苛立った。

今気づいたが、この部屋はどうやら実験室であるようだった。緑

色の光が灯っている時点で予想は出来ていたものの、確証は無かったのだ。

机の上には試験管や紙の束が乱雑に置かれている。…全て荒らされてしまっただけだ。

ライエは何となく、机に向かって紙を手取る。

「――」

万有引力^{アトラクタ}。その四文字を見ただけで、彼の視界が歪んだ。――そうだ、こいつらは、万有引力^{アトラクタ}という少女を狙って――。

「…忘れてた。すっかりだ、これは」

らしくもなく、自嘲する。

「…う」

本当に小さな呻き声が、ライエの耳に飛び込んできた。ライエはゆっくりと振り返る。どうやら、まだ息を持つ者がいたようだ。

その男は、確か――最初に目を貫かれた男。だが、そんなことはどうでもいい。

ぐしゃり、と今度こそ、ライエの放った釘が男の命を喰らう。

男は悲鳴も何もあげなかった。きっとそんな体力すら無かったのだ。しかし、ライエはそれを哀れむこともせずに無慈悲に彼の命を奪った。――奪って、そして、

「――ビョーキだな、これ」

再び、釘がその死体に突き刺さる。もう一度、もう一度。幾本の釘を使って、頭部を砕き、手足を床に打ち付け、男の身体を切り刻む。——それこそ、何度でも、何度でも。

快感だとは思わない。本能的に、この男をこの世から消してしまいたいと思った。自分から竜守綾季を奪おうと企てた人物を消したかった。殺すだけでは足りない。身体を、その魂を、砕いて砕いてぐちゃぐちゃにしてやりたかった。

それが原型を失った頃、ようやくライエは釘を止めた。表情は、ここにやって来たときから変わらない無。

「……病気だ」

それは名づけるなら、ばけもの 竜守綾季症候群。

「サンプル」とある魔術の焚書目録（前書き）

だいふく様よりお預かりしました、サンプル小説となります。

「サンプル」とある魔術の焚書目録

少女は走る。

薄暗い路地を走り続ける――

辺りは暗闇に包まれ、人の気配が全くない。

ここはイギリスのロンドン郊外。

郊外というだけあって都心部と比べればかなり寂れている。

パタパタパタパタ――

カッン――カッン――

足音が二人分。

ひとつは誰かから逃げているように走っている。

もうひとつは走っている方の足音を追いかけている。

追い掛けられているのは12、3歳くらいの少女。

彼女は『焚書目録』。

過去にあった『焚書事件』で燃やされた魔道書を記憶している魔道書図書館だ。

髪は金色で、眼も同じ色をしている。

要所要所に金の装飾が施された真っ黒な修道服を着ていてそれなりに目立つ服装だ。

彼女を追い掛けるのは魔術師。

イギリス清教の『必要悪の教会』ネセサリーウスに所属する、魔術師を殺すための魔術師だ。

まるで鬼ごっこだ。

焚書目録が逃げる側で、魔術師が鬼。

ただし、捕まれば焚書目録がどうなるのかは彼女には分からない。

「まったく、上も手荒いよなあ。いくら焚書が危険だからといって15歳の女の子を『殺せ』だなんて……」

呟いたのは魔術師。

単純に同情の言葉が漏れただけであって、別に彼がロリータコンプレックスという特殊な性癖を持ち合わせているわけではない。

彼はゆっくりと歩みを進めて行く――

焚書目録は走っていた。

「ハア、ハア、ハア」

荒い息を口から吐き出しては一瞬だけ空気を吸い込むことの繰り返し。

先程、魔術師に見付かって走り始めてから既に15分がたっているため、まともな運動をしていない彼女の体力はそろそろ限界のはずだ。

「ハア、ハア、ハア」

走るペースが少しずつ落ちてくるため、それに比例するように魔術師との距離が縮まっていく。

焚書目録が止まった。

ピタッ、という擬音が聞こえたかのような錯覚を覚える程に急に。

このまま走り続けてもいつかは追い付かれる事がわかったからなのか、魔術師に対抗する為に立ち止まったのか……。

「もう諦めたのかい？」

魔術師はその顔から浮かび上がる笑みを隠そうとはしない。

直後、彼の目の前から鎌鼬かまいたちが巻き起こった。

風の鎌は虚空を切り裂いて焚書目録の命を刈り取ろうとする。

（殺った——）

魔術師はそう思った。

「——！」

焚書目録の口から魔術師には理解できない『何か』が発せられた。

「っ!？」

魔術師の顔が驚愕でひきつる。

その『何か』を魔術師が聞いた瞬間、鎌鼬が消え去ったのだから。

「これは…強制詠唱…？いや、『崩壊詠唱』と言った方がいいかな？」

焚書目録は答えない。

魔術師は続ける。

「面白い——。面白いよ焚書目録！俺をもっと楽しませろ！」

狂ったような笑いが魔術師の腹の底から沸き上がってくる。

これが彼の『本性』

魔術師を殺すための魔術師。

「ははは、行けよ…。もっと逃げろよ…。じゃないと面白く無いだろっ?。」

焚書目録は魔術師に背を向け走り出した。

彼女が走り去った後で魔術師が呟く。

「はあ、上にどう報告しようか——」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4417x/>

【企画】とある創作の学園都市

2011年12月5日20時06分発行